

---

# とある魔法少女と不幸な転校生

Hiro

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある魔法少女と不幸な転校生

### 【Nコード】

N3166Y

### 【作者名】

Hiro

### 【あらすじ】

海鳴市にある私立聖祥大附属小学校に一人の転校生が現われた。少年の名前は上条当麻と言った。少女達との出会いは少年に何をもたらすのか。三人の少女と一人の少年の物語が始まる。

## プロローグ（前書き）

今回、子供の上条当麻となのは達のキャラクターをクロスオーバーさせて見たら、どのようになるのか興味を抱き、このような小説を書かせていただきました。

尚、この小説に出てくる上条はなのは達と同年ですので、原作の上条当麻とは少しばかり性格が異なるかもしれないので、ご注意ください。

後、更新速度がゆっくりになるかも知れませんが、それでもよろしければお願いします。

## プロローグ

少年はどこまでも『不幸』だった。

周囲の子供は彼の姿を見るなり石を投げ、周りの大人もその行為を止めようともしない。

疫病神と呼ばれ、蔑まれ続けた少年。

借金を抱えた男に追い回され包丁で刺されたこともあった。

マスコミに『化け物』扱いされ、カメラに写されたこともあった。

そして…少年は両親を事故で失った。

唯一の味方さえ失った少年は孤独だった。

そんなある日、彼は両親の知り合いと名乗る人物から海鳴市に行くように促される。

九歳の上条当麻は、海鳴市での新たな生活を始めるのだった。

## 第1話 担任は幼女！？（前書き）

相変わらず色々残念ですが、頑張っていきたいと考えておりますのでよろしくお願いします。

## 第1話 担任は幼女!?

電車に乗って海鳴市に向かう少年。

今まで住んでいた場所とは全く異なる土地で、新たな生活を始めることになる上条当麻。

しかし、少年は新生活に胸を躍らせたり、不安を抱いたりするといったことは一切無かった。

元々住んでいた場所では、陰湿ないじめを受け続けて、両親を事故で失い、少年は何もかも失った。

海鳴市で新たな生活を送ろうが、自分が疫病神であることに違いは無い。

九歳の子供とは思えない考えを抱きながら、少年は電車の中で深い眠りについた。

同時刻、二人の少女は海鳴市に到着していた。

???「ここが海鳴市…」

???「ああ…」

???「ここにジュエルシードがあるんだね…」

???「フェイト…あまり無茶しちゃだめだよ…」

???「大丈夫…」

海鳴市に到着した上条当麻。

彼が両親の知り合いと名乗る人物から聞いた話によると、海鳴市の駅に転校先の小学校の担任が来ている筈のだが、それらしき人物

は見当たらなかった。

当麻「これからどうしようかな……」

担任の教師が来ていないのに、自分だけが無闇やたらと動くわけにはいかないと考えていた少年は呟く。

そんな少年に近づいてくる中学生くらいの少女が居た。

????「君…どうしたの？」

当麻「あなたは？」

真紀「私の名前は結標真紀よ」

当麻「上条当麻です」

真紀「何だが困っているみたいだったから……」

当麻「実は……」

事情を話した少年に少女は…

真紀「だったらお姉さんが一緒に探してあげるわ」

当麻「でも…迷惑を掛けますし……」

真紀「気にしない気にしない 単なるお節介だから」

半ば強引に協力を申し出る結標真紀に上条当麻は断りきれずに、申し出を受ける。

早速、担任の教師を探すために行動を開始する二人。

真紀「そう言えば、当麻君は何処の小学校に転校するのかしら？」

当麻「私立聖祥大附属小学校です」

真紀「私の母校じゃない!？」

当麻「そうなんですか？」

真紀「ええ。聞き忘れていたけど担任の先生の名前は？」

当麻「月詠子萌先生ですけど…」

真紀「子萌先生なの!?!?…確かに先生には見えないわよね…」

当麻「????」

真紀が言っていることが理解できずに、首を傾げる少年。

真紀「ちょっと待ってね」

携帯電話を取り出し、誰かに連絡する。

真紀「子萌先生に連絡したから、ちょっとそこの喫茶店で待ってましょ?」

当麻「はい」

『喫茶店』



真紀に促されるままに、喫茶店に入る当麻。

真紀「何か食べたいものあるかしら？」

当麻「いえ……」

真紀「子供が遠慮なんてしないの すいませ〜ん。お子様ランチ  
つとイチゴパフェーっお願いしま〜す！」

少年の言葉を見殺して、メニューを頼む真紀。

メニューを待つ二人の下に、一人の少女が向かってくる。

???。「う〜。警察の人に勘違いされちゃいましたよ……」

真紀「ようやく来たのね子萌。まあ…警察が勘違いするのもおかし  
くないけどね……」クス

子萌「酷いですよ〜結標ちゃん〜」

当麻「子萌？」

その名前に少年は聞き覚えがあった。担任の名前が確か月詠子萌だ  
った。しかし、目の前の少女はどうみても大人に見えない。

子萌「貴方が上条当麻ちゃんですか？」

当麻「は…はい……」

子萌「月詠子萌です。先程は遅れてしまって申し訳ありませんでし

た」

そう言って頭を下げる子萌。

しかし、少年は子萌の謝罪など全く頭に入っておらず…

当麻「先…生…?」

目の前の少女が自分の担任であることが信じられなかった。

真紀「まあ普通はそんな反応するわよね」

子萌「こら〜！私はれっきとした大人なのですよ〜！」

頬を膨らませて怒る子萌の姿だが、全く迫力が無く、寧ろ愛くるしい印象を与える程である。

呆然としている少年だったが、子萌の一言で正気に戻る。

子萌「ともかく…ようこそ！海鳴へ！」

子萌に歓迎されて、どう反応すればよいのか分からずおろおろする少年。

そんな二人の様子を見ながら、微笑む真紀。

子萌が二人の下に現われてから、少しの時間が経ち、三人の前に料理が運ばれる。

お子様ランチを食べる少年とイチゴパフェを食べる少女。  
食事が終了した三人は喫茶店を出る。

真紀「さて…私はそろそろ用事があるから此処でお別れだね」

子萌「結標ちゃん。ありがとうございました」

上条「ありがとうございます…」

真紀「そんじゃあまたね」

ヒラヒラと手を振りながら二人の前から立ち去る少女。

子萌「それでは行きましょうか？」

当麻「はい」

二人は私立聖祥大附属小学校に向かう。  
時刻は昼前だった。

『私立聖祥大附属小学校』

お昼休みになり、高町なのはとアリサ・バニングス、月村すずかの三人は今日転校してくる予定の転校生について話していた。

なのは「子萌先生が迎えに行ってたけど大丈夫かな…？」

アリサ「まあ子萌はあの見た目だから…」

すずか「トラブルに巻き込まれていないといいんだけど…」

三人は、子萌の見た目が原因で起きる問題を何度も目撃していたのだ。

車を運転すれば未成年が運転していると誤解され、お酒やタバコを買ったときも警察に突き出されそうになった事もあるのだ。

転校生を迎えに行ったからといって、何事も無く帰ってくる可能性

は非常に低いのだ。

すずか「転校生って男子なのかな？それとも女子かな？」

アリサ「後少しで分かるんじゃない？」

なのは「友達になれるかな？」

すずか「きつとなれるよ」

アリサ「嫌な奴じゃないといいな…」

昼休憩が終了して、教室に戻ってくる子萌。

子萌「はいはい。皆さん静かにして下さいね」

子萌の言葉に反応して、席に戻る生徒達。

子萌「それでは転校生を紹介したいと思えます！」

子萌の言葉にざわめく教室。

子萌「どうぞ」

彼女の言葉と同時に、教室に入ってくるツンツン頭の少年。

子萌「自己紹介をお願いします」

当麻「上条当麻です。よろしくお願いします」

なのは「（あれ？あの子？）」

なのは当麻の目に見覚えがあった。

アリサ「何か普通だね…」ボソッ

すずか「ア、アリサちゃん…」

当麻「(何だかこのクラス…女子の方が多い…?)」

少年はそんなことを考えながらも、淡々と自己紹介を済ませていった。

## 第1話 担任は幼女！？（後書き）

淡希「シヨタはどこ！？」

主「この時点でアンタはまだ子供だろ！？」

淡希「シヨタのためなら時間を越えるくらい余裕よ！！」

当麻「この人は？」

淡希「シヨタゲットオオオ！！」 シュン

当麻「え？」 シュン

主「…次回もよろしく…」

## 第2話 初めてのフラグ建築

『私立聖祥大附属小学校』

子萌「上条ちゃんの席は、高町ちゃんの隣ですよ」

子萌の言葉を聞いた少年だったが、肝心の高町という子が分からない。

そのことを知ったアリサは…

アリサ「此处だよ」

なのはの隣の席を指差す。

少年は少女が指差した席まで移動して、お礼を言った。

当麻「あ、ありがとう」

アリサ「どういたしまして」

少年はアリサにお礼を言った後に、席に着いた。

子萌「上条ちゃんへの質問はHRが終わってからにして下さいね」

子萌の忠告を生徒達は素直に聞いて、HRを済ませていく。

そして、HRが終わってクラスメートによる上条当麻への質問攻めが行われた。

「何処から来たの？」

「趣味は？」

「何処に住んでるの？」

クラスメートの質問攻めにおろおろする当麻。

アリサ「そんな一斉に質問しても答えられるわけ無いでしょ！」

当麻「君は？」

アリサ「アリサ・バニングスよ」

アリサの隣に居た二人の少女も自己紹介を行った。

すずか「月村すずかです」

なのは「高町なのはだよ」

三人の少女が続いてクラスメートも自己紹介を始める。

浜面「俺の名前は浜面仕上だ。よろしくな」

ボサボサ頭の少年が自己紹介を行う。

数少ない男子のクラスメートが増えたことで喜んでいるのだろう。

アリサ「早速だけど、色々質問してもいいかしら？」

当麻「うん」

アリサの質問に答える当麻。



クラスメートもそれで満足したのか、それぞれ席に戻る。  
なのは無意識に当麻を見つめていた。  
少年の目に見覚えがあるのだが、それが何かは分からない。

アリサ「なのは？どうしたの？」

なのは「ううん。何でもないよ」

授業が終了して、今日から暮らすことになるマンションに向かう上  
条当麻。

自宅に向かつて居た少年は、クラスメートの月村すずかに会う。  
今にも泣き出しそうな表情をしている少女を、お人好しの少年が放  
つておける筈もなく…

当麻「どうしたの？」

すずか「上条君？」

すずかに事情を話すように求める少年。

他人から拒絶され続けた少年が自ら起こした行動。

少女が『不幸』に巻き込まれているのならば、自分がその『不幸』  
を背負えばいい。

そう考えた故の行動だった。

すずか「実は…」

自宅で飼っている猫が居なくなってしまったと話す月村すずか。

現在、家の人間に猫の搜索を手伝ってもらっているのだが未だに見  
つけられないということ。

少女からその話を聞いた少年の答えは決まっていた。

当麻「僕も手伝つよ」

すずか「え…でも…」

当麻「気にしないで」

猫の搜索を手伝うことを申し出る上条当麻。

あまり、他人に迷惑を掛けることが出来ないと考えていた少女だったが、少年の申し出を素直に受けることにした。

当麻「じゃあ僕はあっちを見てくるよ」

少女と別れ、猫を見つける為に動く少年。

猫を探し始めてから、数十分が過ぎる。

当麻「どこにいるんだろう…?」

周囲を見ながら歩く少年。

そこで彼は、道路にいる猫を見つける。

少女が猫の特徴に一致している事から、その猫が少女の飼い猫であることを推測する。

しかし、飼い猫にトラックが迫りつつあることを察知した少年は道路に飛び出す。

当麻「危ない!!」

しかし、少年が道路に飛び出したところで、状況が好転するわけではない。

少年は、猫だけは守ろうと強く抱きしめる。

トラックが少年を激突すると思われたが…

『Protection』

無機質な声が響き渡る。

少年に激突するはずのトラックは、何かに阻まれてその動きを止められていた。

何が起きたのか全く理解できない上条当麻は、自分の近くに金髪の少女を見かけた。

その少女はその場から、上条の姿を確認するとその場から立ち去って行った。

少年は少女にお礼を述べようとしたが、少女は既にその場におらず、一旦すずかに猫を見つけたという報告をするために、その場所を離れた。

猫を連れて少女に再び会った少年。

少女は目につつすらと涙を浮かべながら、猫を抱きしめていた。

すずか「上条君…ありがとう…」

生まれて初めて他人から感謝の言葉を述べられて、動揺する上条。

これが、少年が生まれて初めて他人にフラグを立てた決定的瞬間であることは誰も知らない。

感謝の言葉を述べる月村すずかと別れて、少年は気を取り直してマンションに向かう。

唯一の気掛かりと言えば、金髪の少女にお礼の言葉を述べられなかったことだが、今度会った際にお礼を言おうと決意する少年。

『マンション』

マンションに向けて歩き始めて数十分後、少年はマンションに到着

する。

海鳴市が一望できる様な大きさのマンションに、少年は溜息をつく。貧乏というわけではないが、いかにもな高級マンションに驚きを隠せない少年。

こんな所で、一人暮らしを始めるのだから、少々の不安を覚える。荷物は事前に、自室に運ばれているらしく少年は自身の部屋に向かう。

そこで、扉の前に着いた少年だったが、その隣の部屋の扉の前に一人の少女がいることに気付く。

その少女こそ、少年がお礼を延べようと思っていた人物だった。

????「あつ……」

当麻「君は……」

思い掛けない出会いに動きが止まる二人だったが、もう一人の少女がその場に乱入する。

????「どうしたんだいフェイト？誰だいアンタ？」

当麻「こ…こんにちは」

もう一人の少女に話しかけられて、挨拶をする上条。

フェイトと呼ばれた少女は、もう一人の少女に話しかける。

????「ふん。なるほどね」

フェイトの話聞いて納得する少女。

少年は少女達が話している内容よりも、少女に犬耳がついていることに疑問を抱いていた。

フェイト「どうして君が此処に居るの？」

当麻「今日からこの部屋で暮らすことになったんだけど…」

「「え？」」

少年の言葉が予想外だったのか、動きの止まる二人。

少年に聞こえないような声量で、話した二人はそれぞれ自己紹介を行った。

フェイト「そうだったの…私はフェイト・テストロッサ」

アルフ「アルフだよ。よろしくな」

当麻「上条当麻です」

二人が自己紹介して、少年も自己紹介する。

当麻「あの時は助けてもらってありがとう」

フェイト「え…いいよ。気にしないで」

どうやら少女もお礼を言われることに慣れていないのが、少しばかり動揺していた。

当麻「あの…お礼がしたいんだけど…」

フェイト「お礼なんて…」

当麻「じゃあせめてこれだけでも…」

そう言つて少年は鞆からお菓子を取り出す。  
海鳴市に着いた時に、購入したものだ。  
少年はそれをフェイトとアルフに渡す。

フェイト「あ…ありがとうございます…」

アルフ「あたしも貰つていいのかい？」

当麻「はい」

照れているフェイトと喜んでいるアルフ。

そんな二人の姿を見て、少年は心が温かくなった。

海鳴市でも、元居た場所と同じように他人から傷付けられる事を覚悟していたが、海鳴市に来てまだ、一日も経っていないが、皆が非常に優しいということはよく分かった。

海鳴市は少年にとってあまりにも眩しく、そして心地良かった。

フェイト「海鳴市には初めて来たの？」

当麻「うん」

アルフ「親御さんはどうしたんだい？」

アルフの疑問は最もだった。

右も左も分からない状態で、少年を一人で今日から住む場所に向かわせるなど、普通の親ならそんなことをさせる筈はない。

アルフの疑問を聞いた上条当麻の表情は少しばかり暗くなった。

当麻「お父さんとお母さんは居ないんだ…」

アルフ「それはどういう…」

当麻「ちょっと前に事故でね…」

フェイト&アルフ「?!?」「」

予想外の言葉に、フェイトとアルフは驚愕する。

フェイト「ごめんね…」

アルフ「悪かったね…」

当麻「ううん…」

空気が重くなり全員が黙る。

そんな沈黙を破ったのは、アルフだった。

アルフ「ま、まあとにかくこれからはお隣さんってことでよろしく  
!!!」

アルフが無理やり明るく振舞い、フェイトと当麻の二人も明るく振舞う。

二人と別れて、自室に入った少年は鞆から写真を取り出す。

そこに写っていたのは、笑顔の両親と上条当麻だった。

フェイトとアルフの二人も自室に戻っていた。

アルフ「親がいない…か…」

フェイト「…」

アルフ「どんな気持ちなんだろうね…」

彼女達も、少年と同じく海鳴市に初めて訪れたのだが、少年とは異なり明確な目的がある。

本来なら少年の事など、気にしている余裕は無い。

しかし、少年が見せた寂しそうな顔が彼女達の脳裏に焼きつく。それぞれの思いを胸に抱き、少年達は明日を迎える。



## 第2話 初めてのフラグ建築（後書き）

御坂「あいつが子供になっただって!？」

主「そうだけど?」

御坂「あいつはどこなの!？」  
「ビリビリ

主「ちょ…放電してるよ!？」

御坂「とつとと教えなさい!？」

主「結標さんが連れ去りました…」

御坂「何ですってええ!?!」  
「ドオン

主「ぎゃあああ!?!」

### 第3話 暖かな食卓

翌日の放課後、月村すずかはアリサ・バニングスと高町なのはに昨日の出来事を話した。

少年の事を語るときの少女の頬が少しばかり赤かったことには、二人とも気付かなかった。

アリサ「意外と親切なのね」

すずか「うん」

なのは「そんなことがあったんだ」

アリサ「暗そうな雰囲気だったから薄情だと思ったけど、そうじゃなかったのね」

なのは「ア…アリサちゃん…」

少女達が上条当麻について話している頃、上条当麻は浜面仕上に小学校の屋上に呼び出されていた。

少年は暴力を奮われるのかと考えていたが、海鳴市に来る前の彼にとっては日常茶飯事だったので、特に気にするほどのことでもなかった。

屋上に到着した彼を待っていたのは、浜面仕上ただ一人だった。

仕上「来たか」

当麻「何の用？」

仕上「まあちよつとこつちに来いよ」

少年の言葉に従う当麻。

浜面に呼ばれた位置まで移動した彼が見たものは、海鳴が一望できるとても綺麗な景色だった。

当麻「これって…」

仕上「綺麗だろ？俺の秘密のスポットなんだよ」

当麻「どうして教えてくれたの？」

仕上「何かお前、元気が無いみたいだからさ。まあ、疲れたときはこの景色でも見て元気だせって」

当麻「あ…ありがとう浜面君…」

仕上「浜面でいって、俺も上条って呼ぶからさ」

当麻「う…うん」

転校してきたばかりの人間にお気に入りの場所を教えるなど、浜面仕上もとても親切であると実感する上条当麻。

しばらくの間、少年達は屋上から海鳴の景色を眺めていた。

浜面と別れた少年は、晩御飯の材料を買う為に最寄のスーパーに寄った。

そこで、彼は先日お世話になった結標真紀に出会う。

真紀「あら、上条君じゃない」

当麻「昨日はありがとうございました」

真紀「どういたしまして」

どうやら彼女も買い物中だったらしく、買い物袋を持っていた。

彼女と一通り世間話をした後、少年は少女と別れた。

晩御飯の材料を買った少年は、マンションに向けて移動し始めた。

少年が自宅に向かっている頃、高町なのはは自宅にて上条当麻のことを両親に話していた。

なのは「…だっただよ」

桃子「随分親切な子ね」

土地勘の働かない場所で、猫を探すのは下手をすれば迷子になる危険性を含む。

少年が何も考えなかった可能性もあるのだが…

士郎「そうだ。なのは、今度彼を家に招待すればいいんじゃないか？」

なのは「え？」

士郎「始めて海鳴市に来るのなら、不安もあるだろうし、それにその子に会ってみたいからな」

桃子「彼の歓迎会をすればいいんじゃないかしら？」

なのは「でも、まだ知り合ったばかりだし…そこまで親しいってわけじゃないし…」

いくら高町家の人間がとても親切だと言っても、知り合ったばかりの人間の家にお邪魔することなど、少年が反対する可能性が高い。そんな少女の様子を見ていた士郎は…

士郎「それならクラスの歓迎会ということにすればいい。それなら、彼も参加しやすいだろうからね」

なのは「そうだね。じゃあ明日聞いてみる」

なのはが両親と話している頃、少年はマンションに到着していた。帰宅した少年は早速、晩御飯を作り始めた。料理を作っていた少年だったが、突如玄関の方向から音が聞こえた。

ぐ〜!!

不審に思った少年が、玄関に向かい扉を開ける。

アルフ「う…腹減った…」

当麻「だ…大丈夫…？」

玄関を開けた少年が見たのは、涎を垂らしたアルフだった。アルフの態度から、お腹が減っていると判断した少年は…

当麻「もし良かったら、ご飯食べる？」

アルフ「え…いいのかい…？」

当麻「まだ作ってる途中だけど…」

アルフ「ありがとう!!」

目を輝かせてお礼を述べるアルフに若干顔が引き攣る当麻。  
部屋にアルフを案内した当麻は、料理を再開する。

ちなみに、夕食のメニューは若鶏のから揚げ、味噌汁の二品だった。  
両親が亡くなってから、一人で暮らしていた少年にとって料理は密  
かな趣味となっていた。

料理の匂いを嗅いだアルフのお腹の音は益々激しさを増していた。  
そんなアルフの様子を見た当麻は、ある疑問がわいた。

当麻「いつもご飯はどうしてるの?」

アルフ「インスタントだけど?」

当麻「ご飯は作らないの?」

アルフ「あたしもフェイトも作れなくてね」

当麻「それって...『ピンポン』...ん?」

インターホンが鳴って当麻は玄関に向かう。

玄関に居たのは、フェイト・テスタロツサだった。

フェイト「あ...あの...アルフが来てないかな?」

当麻「来てるけど...」

アルフ「フェイト〜おかえり〜」

フェイトの言葉に手をヒラヒラ振りながら、

まるで、自分の部屋の様に振舞うアルフに溜息をつくフェイトと苦笑いをする当麻。

フェイト「何やってるの…?」

アルフ「トウマがご飯を作ってくれらって〜」

フェイト「え?」

当麻「君も食べる?」

フェイト「で…でも…迷惑じゃ『ぐ〜』…あ／／／」

当麻「ちょっと待っててね」

フェイト「…」コケ

少年の言葉に若干赤くなりながら、無言で頷く少女。

アルフはそんなフェイトの様子を見ながら、笑っていた。

ようやく、料理が完成して料理をテーブルの上に並べる当麻。

フェイトとアルフも待っているだけではなく、皿を並べるのを手伝ったりした。

当麻「いただきます」

アルフ「いただきます〜す」

フェイト「い…いただきます」

料理を食べ始める三人。

普段から、インスタント食品ばかり食べていた二人にとって、少年の料理はとても美味しかったらしく…

アルフ「美味しい…美味しいよ…!!」

フェイト「美味しい…」

凄まじい速度で箸を進める二人の様子を見ていた少年は、内心とても喜んでいた。

自分の料理を誰かに食べてもらう経験なんて、これまでの人生で一度も無かったが、初めて他人に振舞った料理を絶賛されたのは、非常に嬉しかった。

その上、誰かと一緒に食事自体が徐々に、食事もいつもより美味しく感じていた。

この瞬間、上条当麻は確かに『幸せ』だったのだ。

アルフ「ご馳走様!! あゝ美味かった…」

フェイト「ご馳走様。本当に美味しかった」

当麻「ご馳走様」

夕食を食べ終わった二人に、少年は一つの提案を行う。

当麻「あのさ…これからも二人の料理を作ってもいいかな？」

フェイト「でも流石に何度もご馳走になるのは…」



当麻「駄目かな？」

アルフ「ここはトウマのお世話になるつよフェイト」

フェイト「で…でも…」

当麻「僕が作りたいたけだから、フェイトは気にする必要なんてないよ」

フェイト「当麻…本当にいいの？」

当麻「うん」

アルフ「よっしゃ！これから毎日、美味しいご飯が食べられる！」

フェイト「あ…アルフ…」

当麻「あはは…」

#### 第4話 孤独な少年と少女（前書き）

五和「上条さんが子供になったですって!!?」

神崎「上条当麻が子供に!？」

御坂妹「あの人が…フフ…」

姫神「今の内に手懐けておけば…」

インデックス「ごはんはどうするの!？」

レッサー「子供の内から調教しておけば、イギリスの引き込むことも容易かもしれません!！」

主「上条当麻を巡る女性達の戦いが始まる。しかし、彼女達は知らない。彼女達自身が絶大な実力を持っているなど…」

上条「何ナレーションしてんだよ…」

主「ふざけすぎた…今回もよろしくお願いします」

## 第4話 孤独な少年と少女

『マンション』

少年がフェイトとアルフの料理を担当することに決まってから一夜明けた。

早速、朝ごはんを作り始める上条当麻。

ピンポンー！！

当麻「はい」

少年が玄関に向かい、扉を開けるとそこにはフェイトとアルフが居た。

アルフ「おはよ〜」

フェイト「おはよう」

当麻「おはよう」

二人をリビングに案内して、再び料理を作り始める少年。

そんな少年の様子を見ていたフェイトは、何か手伝えることはないかと尋ねたが、特に手伝ってもらうこともないので、少女の申し入を断った。

それから、少し時間が経って料理が完成した。

アルフ「いったただきま〜す！！」

フェイト「いただきます」

当麻「いただきます」

朝食を食べ始める三人だったが、当麻がアルフにある質問をした。

当麻「ずっと気になってたけど、その耳は付けてるの？」

フェイト「そ…そうだよ…ねえアルフ…」

アルフ「いやこれは…」

フェイトの言葉を否定しようとするアルフだったが、フェイトの態度を汲み取ったのか少女に合わせた。

アルフ「そ…そうなんだよ！！中々似合うだろ！？」

当麻「う…うん…」

そんな二人の態度を見た少年は、未だに疑問を抱いたままだったが、とりあえずこの問題に対しては保留にしておくことにした。

当麻「ところで二人とも、学校はどこに言ってるの？」

フェイト&アルフ「それは…」

少年に自分達の事情を話すわけにはいけないと考えている二人は、その疑問に正直に答えるわけにはいかなかった。

フェイト「色々事情があつて…今は学校に行つてないんだ…」

アルフ「同じく…」

当麻「そうだったんだ…何だかごめんね…」

フェイト「気にする必要なんてないよ!」

アルフ「そ…そうだよ!」

慌てて取り繕う二人の様子を見て、少年は少し笑い…

当麻「それなら弁当を作ったほうが良さそうだね」

フェイト「流石にそこまでしてもらおうわけには…」

当麻「前にも言ったけど、僕が勝手にやってることだから気にしないで」

当麻の態度を見たフェイトは、少年はこちらが断つても譲らないだろうと判断して、少年の申し出を受けることにした。

早速、二人分の弁当を作り始める少年。

そんな少年の後ろ姿を眺めていた二人は…

フェイト「どうしてここまでしてくれるんだろう…?」

アルフ「きつとトウマもフェイトと同じように優しいんだよ」

それから少年が弁当を作り終えて二人に渡して、少年も学校に向かった。

『私立聖祥大附属小学校』

昼休憩になり、給食を食べていた少年の下に高町なのはがやって来た。

当麻「高町さん？どうしたの？」

なのは「上条君。ちょっといいかな？」

彼女の隣にはアリサとすずかも居た。

当麻「う…うん」

なのは「あのね…」

少女はクラスで少年の歓迎会をしたいということを少年に伝える。

当麻「でも…皆に迷惑かけるし…」

なのは「そんなことないよ」

アリサ「そうよ」

すずか「駄目かな？」

当麻「ぼ…僕でよかったですら…」

アリサ「よし！これで決まりね！」

少年の了承を経て歓迎会を行うことが決定する。

『公園』

上条当麻が昼休憩を迎えている頃、フェイトとアルフの二人は海鳴市の公園で弁当を食べていた。

アルフ「見つからないね。ジュエルシード」モグモグ

フェイト「うん…」モグモグ

アルフ「確かにこの世界で間違いないはずなんだけど…」

フェイト「こればかりは地道に探すしかないよ」

アルフ「それもそっかあ」

フェイト「（もし、この世界に無かったら、当麻とお別れすることになる…）」

二人の少女がこの世界で出会った一人の少年。

たった二日程度しか経っていないが、彼女達は少年ととても仲良くなっていた。

自分で料理が作れない彼女達にとって、少年が作る料理は新鮮だったし、一緒に食事をしている間は、確かに楽しいと感じていた。

海鳴市にずっと留まる訳にはいかない少女達にとって、少年という時間は大切にされたのだ。

『図書館』

小学校の授業が終了して、少年は真っ先にマンションに帰ろうとは

せず、図書館に向かった。

海鳴市に来る以前も、図書館にいたことが多かった少年。他人から傷つけられるばかりの少年にとって、図書館は唯一静かに過ごせる場所だったのだ。

海鳴市の図書館に入って、何か適当な本はないかと探していた当麻だったが、そこで彼は一人の少女を見かける。

???「やっぱり取れんな〜どうしよう…」

何やら車椅子の少女が本を取ろうとしているのだが、少女が取ろうとしている本の位置が、高いところにあり、彼女は困り果てているようだった。

そんな少女の下に、少年は近寄ると…

当麻「あの…手伝おうか？」

???「え？」

突然の申し出に動揺する少女だったが、少し時間を置いた後…

???「頼んでもええの？」

当麻「うん」

???「あの本なんやけど…」

当麻「分かった」

少女が指差した場所にある本は、少年の背が届かない場所にあったらしく、少年は脚立を使用して本を取ったのだが…



ガシャーン!!

脚立から盛大に落ちた少年は、勢い良く地面に激突する。

????「だ、大丈夫か!？」

当麻「いたた…大丈夫だよ…慣れてるから…」

幼い頃から生傷の絶えなかった少年にとって、この程度のことは大して気にするほどのことでもなかった。

????「慣れてるって…」

当麻「それより…はい…」

そう言つて少年は少女に本を渡す。

????「おおきに」

当麻「どういたしまして」

????「初めて見る顔やけど、図書館に来るのは初めてなん?」

当麻「少し前にこの町に引っ越してきたんだ」

????「そうだったんか。そーいやまだ自己紹介しとらんかったね。八神はやてや」

当麻「上条当麻だよ。八神さんは良く図書館にいるの?」

はやて「せやな。普段から図書館におるで」

当麻「学校はどうしたの？」

はやて「事情があつて行けないんや……」

当麻「ごめんね……」

はやて「ええて。上条君が気にすることやあらへん」

沈む少年を元気付ける少女。

はやて「そう言えば、上条君は始めてこの図書館に来たって言つたけど、案内してあげようか？」

当麻「いいの？」

はやて「困つたときはお互い様や」

当麻「ありがとう」

少女に図書館を案内してもらつた少年。

二人は話しながら、ある共通点があることが発覚する。

上条当麻と八神はやては事故で両親を亡くしており、ずっと一人暮らしだったということ。

同じような境遇の人間に出会つて思つていなかった二人は、非常に驚いていたが、再び話し始めていた。

はやて「上条君の趣味は料理なんやな」

当麻「八神さんも料理が趣味なんだね」

はやて「今度、家の料理を食べてみるか？」

当麻「こつちも何か作ってこようか？」

はやて「せやね」

当麻「そろそろ帰らなきゃ……」

はやて「そっか……」

当麻「じゃあ八神さん。また明日」

はやて「…上条君。また明日な」ニコ

上条当麻は八神はやてと分かれて帰路に着く。  
その頃、海鳴市に一人に男が訪れていた。

????「ここが海鳴か…この霊装の威力を試すのに最適な場所だな  
…」

男は引き裂いた様な笑みを浮かべて歩を進めていた。  
平和な町に迫り来る危機に気付く者は誰もいない。

## 第5話 謎の『右手』

数日後、上条当麻は浜面仕上とアリサ・バニングス、月村すずかと高町なのはの五人で昼休憩を過ごしていた。

最初は、緊張していた少年も浜面やなのは達の協力もあり、徐々にクラスに打ち解けてきた。

仕上「学園都市に行ってみて〜な〜」

アリサ「どうしたのよ浜面？」

仕上「だって科学技術が物凄く発達してんだぜ？何か夢があるじゃん」

なのは「そういうものなの？」

当麻「分からないけど…」

すずか「子萌先生も学園都市から来ているのよね？」

なのは「うん」

当麻「どうして子萌先生は海鳴に来たんだろう？」

仕上「それは本人に聞いてみねーと分かんねーだろ」

アリサ「でも浜面。学園都市って旅行で行ける様な場所じゃないのよ？」

仕上「マジで？」

すずか「年に一度、大覇星祭っていう行事で外部の人に一般開放されるらしいけど…」

なのは「基本的に、学園都市に学生として入学したら、学園都市の外に行くだけでも大変な手続きが必要になるんだって」

仕上「うへえ…あんまいもんじゃねえな…」

当麻「浜面は学園都市に行きたかったの？」

仕上「だってロボットがいるんだぜ！？男のロマンだろ！？」

なのは「そうなの？」

当麻「僕にはよく分かんないけど…」

仕上「分かってねえな上条。それに超能力なんて物もあるんだぜ？」

なのは「脳を開発して超常現象を引き起こす力だっけ？」

すずか「でも、脳を開発するなんてちょっと怖い」

アリサ「大体、超能力なんて何に使うのよ？」

仕上「う…それは…」

アリサ「全く…浜面は浜面なんだから」

他愛ない話をする少年少女達。

そこで、浜面が何かを思い出したように語る。

仕上「そついや、ここ最近海鳴で何か事件が起きてるらしいけど、あれは化け物の仕業っていう噂があるらしいぜ」

当麻「化け物の仕業？」

なのは「そんなのがいるの？」

アリサ「いるわけないでしょ……」

すずか「ア…アリサちゃん……」

仕上「何でも石の巨人みたいなのが、暴れまわってるらしいんだ」

アリサ「石の巨人ねえ……」

当麻「どれくらい大きいの？」

仕上「そこまでは分からないけど、多分巨人っていうくらいだから、相当でかいんだろうぜ」

雑談している少年少女達だったが、そこで思わぬ横槍が入る。

子萌「みなさ〜ん。本日の授業はこれで終わりになりました〜」

予想だにしなかった月詠子萌の言葉に動揺する一同だったが、

仕上「せんせ〜それって、海鳴の事件が原因ですか？」

子萌「秘密です。皆さんは寄り道せずに帰ってくださいね〜」

そう言っただけで教室から出て行く子萌。

その後ろ姿を見ていた少年少女達は…

「「「「「怪しい…」「」「」「」

全員、子萌の態度を不審に感じていた。

しかし、子萌の言葉を素直に聞いていた一同はそれぞれ帰宅することに決めた。

上条当麻が小学校から出た頃、フェイト・テストロツサとアルフは海鳴市のスーパーを訪れていた。

何故彼女達がスーパーに来ているのかというと、フェイトが上条に料理を作らせつつ放しでは忍びないので、買い物だけでも任せて欲しいと言ったからである。

フェイト「えつと…この商品は…」

アルフ「フェイト〜これ買ってもいい〜？」

フェイト「いいよ。それで…これは…何処にあるの？」

順調に買い物を進めていくフェイトだったが、少年に頼まれた商品が見つけれなかった。

途方に暮れている少女達に近づくと一人の女子中学生が居た。

真紀「どうしたの？」

フェイト「あ…えっと…商品を探しているんですけど…見当たらないかな…」

真紀「もし良かったら手伝いましょうか？」

アルフ「いいのかい？」

真紀「困ったときはお互い様だからね」

フェイト「あ…ありがとうございます」

真紀「それじゃちゃっちゃと見つけちゃいましょうか」

結標真紀に協力してもらい、再び商品を探し始めるフェイトとアルフ。

探していた商品が見つかり安堵する二人。

アルフ「ありがとね」

フェイト「ありがとうございます」

真紀「どういたしまして。それじゃ〜ね〜」

手をヒラヒラ振りながら二人の前から去っていく少女。

フェイト「親切な人だったねアルフ」

アルフ「そうだね」



買い物を終えた少女達は、マンションに向けて移動を開始した。その頃、上条ははやてに出会っていた。

どうやら彼女は今日も図書館に出かけていたのだが、図書館がいつもより早く閉じてしまい、困っているところだったらしい。

はやて「それにしても、物騒な世の中やな」

当麻「そうだね。早く事件が解決するといいんだけど…」

はやて「せやな…って何やあの人…けつたいな格好しおってからに…」

当麻「ちょ…八神さん…失礼だよ…」

二人は一人の男を見かける。

その男は黒い服装をしているのだが、明らかに過剰にアクセサリのような物を身に纏っていた。

海鳴では決して見る事の無い姿の人間に、若干警戒心を抱きながら男の前を通り過ぎようとする二人だったが…

???「この力…素晴らしい…」

男はそう呟くと、懐からチョークのような物を取り出して、地面に何かを描き始めた。

ズゴォー！！

瞬間、地面が隆起して巨大な石の巨人が二人の前に現われた。

ゴーレム「グオオオオオオオ！！」

当麻「な…あれって…」

はやて「な…なんなん…あれ…」

浜面仕上から聞いた単なる噂だった筈の存在が、上条当麻と八神はやての前に居た。

???「殺せ」

男の言葉を聞いた瞬間、少年は少女の車椅子の取っ手を掴みその場から全力で逃げ出していた。

未だに目の前の現実を受け入れる事が出来ない二人だったが、あのゴーレムが危険ということは本能で理解したのだろう。

必死で怪物から逃げる二人だったが、焦りながらも会話を交わす。

はやて「上条君！なんなんあれ!？」

当麻「分かんないけど、とにかく逃げなきゃ!！」

全力で逃げる二人を追いかけけるゴーレムだったが、二人が子供ということもあり、姿を見失ってしまう。

???「ちっ…」

男は二人を逃がしてしまったことに苛立つが、例え警察を呼んだところで何かが出来るわけでもない。

ゴーレムを撒いた二人は…

当麻「何とか逃げ切れたのかな…?」

はやて「上条君…私…怖い…」

無理もないだろう。

ゲームやアニメの様な非現実な出来事が目の前で起きたのだから…

当麻「一旦僕の家には避難しよう！」

はやて「え？」

少年は少女をマンションに連れて行くことを決意する。

動揺するはやてだったが、少年もそこまで気が回っておらず、少女の言葉を無視してマンションに辿り着く。

そこで彼はフェイトとアルフに遭遇する。

フェイト「当麻？どうしたの？」

冷や汗の出ている少年を不審に思ったフェイトは当麻に問いかける。

アルフ「そっちの子は？」

当麻「悪いけどこの子をお願い！！」

アルフの質問を無視して、少年は再びゴーレムの所に向かおうとする。

はやて「駄目や上条君！！危険すぎる！！！」

当麻「大丈夫だよ」

一言呟き、少年は先程ゴーレムと遭遇した場所まで走って行った。

はやて「上条君…どうして…」

フェイト「一体何があったの？」

二人に何があったのか尋ねるフェイト。

はやては先程の出来事をフェイトに語る。

少女の言葉を聞き終えたフェイトは…

フェイト「アルフ！！この子をお願い！！」

アルフ「分かった！！」

はやて「危険や！！」

フェイト「大丈夫…当麻は任せて！！」

フェイトも上条が向かって行った方向へ駆け出す。

はやてはそんな少女を呆然と眺めていることしか出来なかった。

先程、ゴーレムと遭遇した場所まで戻ってきた少年。

辺りを見回す少年だったが、謎の男もゴーレムも見当たらない。

何処か別の場所に行ったのかと考える少年だったが…

きやあああああ！！

悲鳴が聞こえて、その場所に向かって全力で駆け出す。

少年が悲鳴がした場所に辿り着くと、黒髪のショートの少女がゴーレムに襲われていた。

すかさず少年は少女とゴーレムの間に割り込む。

当麻「大丈夫？」

????「う…うん…」

当麻「良かった…君は早く逃げるんだ！」

????「で…でも…」

当麻「僕なら大丈夫…だから早く！」

少年の言葉を聞いた少女は、無言で頷きその場から逃げ切る。

少年は男とゴーレムを睨みつける。

男は少年の姿を見て鼻で笑い、ゴーレムに少年を殺すように命令する。

その拳は、人間の原型を留めることが不可能と言ってもおかしくないほどの威力を持っている。

少年は、目の前の存在が恐ろしくて震えが止まらない。

今すぐにでも逃げ出したい衝動に駆られる。

しかし、少年は逃げない。

今、ここで自分が逃げたら目の前の化け物は他の人間を襲うことを知っているから。

ゴーレムの拳が少年に迫る。

少年は両手を交差していた。

フェイト・テストアロッサは上条当麻を追っていたが、途中で見失ってしまう。

遅くなればなるほど、少年は危険に晒される可能性が高いと知っている少女は焦っていたが、突如そこまで遠くない場所から少女の悲鳴が聞こえる。

少女は悲鳴が聞こえた方向に走り、その現場に辿り着くが、少年が今まさにゴーレムの一撃を受けようとしているところだった。少年を追っている為に「してない少女だったが、今から」したところで少年を助けられるわけではない。

フェイト「当麻ああー!!」

少女の叫びも虚しく、ゴーレムの拳は上条当麻に直撃した。しかし、少年が死んでしまうという少女の幻想は殺された。

バキン!!

ゴーレムの拳が、上条当麻の『右手』に触れた瞬間、世界が割れる様な音が周囲に響き渡った。

ゴーレムの動きが停止することに驚愕する男とフェイトと当麻だったが、更に驚くべき出来事が発生した。

ポゴオオ!!

突如、少年に触れたゴーレムの身体が崩れ始めたのだ。

???「なっ…!？」

フェイト「何が…!？」

当麻「え…?」

あまりにも異常な事態に思考が停止する三人だったが、ゴーレムの身体が再び信じられない速度で再生する。

ゴーレムの胸元には小さな宝石の様な物が光を放っていた。

フェイト・テストロッサはその宝石に見覚えがあった。

フェイト「あれって…ジュエルシード!？」

「???」  
「くくく…」  
とんだイレギュラーがあつたが、俺にがあの宝石がある」

男は実力のある「」ではなかったが、ジュエルシードを使用することにより、あれほどのゴーレムを作り出せる程の力を得たのだ。男は引き裂いた様な笑みを浮かべて、ゴーレムに再び少年を攻撃するように命令した。

しかし、この場にいるイレギュラーは上条当麻だけではなかった。

フェイト「バルディッシュ!！」

「Photon Lancer」

突如、金色の魔力弾がゴーレムに直撃する。

何が起きているのか理解できていなかった男と少年は、攻撃が放たれた場所を見る。

そこには、フェイト・テストロッサが居た。

しかし、普段の彼女とは全く異なる服装をしており、何に似ているかと表現するならば、魔法少女という言葉が最適だった。

呆然とする二人だったが、少女は続けて手に持っている鎌の様な物をゴーレムに向けて…

「Sealing mode・Setup」

フェイトの鎌から光の様な物がゴーレムに直撃する。

そして、ゴーレムの身体が徐々に崩壊する。

そして…

フェイト「ジュエルシールド、封印!!」

『Sealing』

ゴーレムの身体が完全に崩壊して、その身体から小さな宝石が出現して、その宝石はフェイトの持つ鎌の様な物に吸収されていた。もとの姿に戻ったフェイトを呆然とした表情で見ている上条当麻。

フェイト「当麻…今まで隠しててごめんね…」

悲しそうな表情で呟くフェイト・テストロツサ。

一方その頃、ゴーレムを倒された男は逃走していた。そんな彼の前に、中学生くらいの少女が現われる。

男は少女を無視してその場を通り過ぎようとしていたが…

ヒュン!!

ドス!!

???「うつ…」

少女の一撃を受けた男はその場に倒れる。

真紀「全く…傍迷惑な『魔術師』ねえ」

結標真紀は一人で呟く。

真紀「それにしても…あの子が『魔導師』ね…まあ悪い子じゃなさ



そうだから、別に放っておいてもいいかな」

少女は倒れた男を放置してその場から悠々と立ち去って行った。

## 第6話 フェイトの決意と当麻の歓迎会（前書き）

滝壺「はまづらが子供になった？」

絹旗「私がお姉ちゃんに超なるわけですね!？」

麦野「今なら簡単に殺せるか…!」

主「麦野さんだけ物騒すぎますよ!」

麦野「あ!？」

主「ナンデモアリマセン」

フレミア「今の私ならはまづらと幼馴染にゃあ」

## 第6話 フェイトの決意と当麻の歓迎会

ゴーレムを倒した二人は八神はやてとアルフに合流して、はやてを自宅に送った後、上条当麻とフェイト・テスタロッサとアルフの三人は少年の自室に集合していた。

当麻「…」

フェイト「…」

アルフ「…」

先程から一言も話さない一同。

沈黙がその場を支配する。

しかし、そのままでは埒が明かないのでアルフが口を開く。

アルフ「当麻には知られたくなかったんだけどね…」

当麻「二人は…一体…」

フェイト「私達はね…別の世界から来たんだよ」

当麻「別の…世界…?」

少年は少女が何を言っているのか全く分からなかった。

別の世界なんて存在するか定かでもない世界から来たというのだから。

それから、少女達は自らの正体を語り始めた。

フェイトが昼間見せた姿は、デバイスと呼ばれる道具を用いて変身

した姿であるということ。

その姿になると魔法と呼ばれる力を行使できるということ。

ゴーレムの身体に埋め込まれていた宝石は、ジュエルシードと呼ばれるもので莫大な力を秘めているということ。

少女達がこの世界に来たのは、ジュエルシードと呼ばれる宝石を手に入れるためであること。

アルフは人間ではなく、フェイトが魔力で作りに出した使い魔という存在であること。

唯一の一般人である少年にとって信じられないような話のオンパレードだったが、目の前で魔法を使った場面を見たことから少年は少女の言葉を疑う余地は無かった。

フェイト「ごめんなさい…私のせいで当麻を巻き込んだじゃって…」

突然、少年に謝罪の言葉を述べる少女に少年は困惑する。

少女が謝る必要など全く無いのだが、一人で全てを背負い込みがちな少女は少年に謝らずにはいられなかった。

当麻「フェイトは何も悪くなんてないよ。それにフェイトが助けてくれたおかげで僕はここにいられるんだから」

フェイト「…」

当麻「それより…どうしてフェイトはジュエルシードを集めているの？」

少年は少女が世界を超えてまで、ジュエルシードを集めることがどうしても理解できなかった。

お使い感覚で世界を超えられるようなことなんてあるはずもない。

だからこそ、少年は少女がそこまでする理由が知りたかったのだ。

フェイト「それは…」

アルフ「フェイト…」

当麻「どうしても知りたいんだ…駄目かな？」

フェイト「私は…お母さんの為に…」

当麻「お母さんの？」

アルフ「フェイトの母親がジュエルシードを必要としていてさ…フェイトはその為にジュエルシードを集めているんだよ」

当麻「そうだったんだ…」

まだ幼い子供で世界を渡らせてまでジュエルシードを集めさせるなんて普通はありえない。  
心なしかフェイトの母親のことを語るときのアルフの表情が少しばかり暗かった。

当麻「フェイトはこれからもジュエルシードを探し続けるの？」

フェイト「うん」

強い決意を秘めた目で少年の言葉に答える少女。  
しかし、どこかその瞳は哀しげだった。

上条当麻という少年はそんな少女の話を聞いて一つの決意をする。

当麻「僕にもジュエルシードの搜索を手伝わせてくれないかな？」

フェイト&アルフ「え？」

予期しない少年の言葉に少女達は動揺する。

家事や宿題を手伝うといった生易しい問題ではないのだ。

先程のゴーレムの戦闘を体験している少年が、ジュエルシードを集めることの危険性を理解していないわけではないのだ。

それなのに、目の前の少年は二人を手伝うと申し出てきたのだ。

フェイト「だ…駄目だよ！当麻は魔法を使えない一般人なんだよ！？」

アルフ「そ…そうだよ！」

二人は少年の申し出を断るが…

当麻「お願い」

頭を下げて二人に頼み込む上条当麻。

短い間ながらフェイトとアルフは、この少年は一度決めたことを絶対に曲げないほど頑固であることを熟知していた。

フェイト「分かった…でも絶対に無茶しちゃ駄目だよ？」

当麻「うん！」

嬉しそうに喜ぶ少年の姿を見て、苦笑いするフェイトとアルフ。

正直言つて、ただの一般人である少年にジュエルシードを見つけれれるとは思わなかった。

しかし、危険を承知で自分に味方してくれる少年の気持ち無下にす

ることなど少女達に出来なかった。

一方その頃、自宅で図書館から借りた本を読んでいた八神はやては…  
はやて「あの時の上条君かつこよかったな…」

思い出すのは昼の出来事。

初めて会った時はどこか頼りない印象を抱いていたが、ゴーレムと対峙した際に見せた強い決意を秘めた表情。

身を挺してまで自分を守ってくれた少年の事を思い出すたびに、少女は顔が赤くなるのを感じていた。

翌日、上条当麻は浜面仕上と共に翠屋の前に居た。

本日は、上条当麻の歓迎会が行われる日だったのである。

当麻「ここでいいのかな？」

仕上「とつとと入ろうぜ！」

カラン！

勢い良く扉を開ける浜面仕上。

店内は少年のクラスメート達で埋め尽くされていた。

呆然としている当麻だったが、少年の下に一人の女性が近づいてきた。

桃子「あなたが上条君ね？」

当麻「は…はい…上条当麻です…」

桃子「そんなに緊張しなくてもいいのよ？私は高町桃子。なのはの母です」

当麻「高町さんの…」

仕上「とつとと座ろうぜ上条」

いつの間にか席についていた浜面仕上が上条に手を振る。桃子に促されて席に着く少年。

そんな少年の下にケーキを持ったなのはが近づいて来た。

なのは「上条君。いらっしやい」

なのはにケーキを渡される当麻。

当麻「あ、ありがとう高町さん」

なのは「どういたしまして」

ケーキを渡されてなのはにお礼の言葉を述べる。

そして本日の進行役であるアリサが…

アリサ「全員に行き渡ったわね？それじゃあ上条の歓迎会を今から行おうよ〜！」

アリサの言葉に同意するクラスメート達。

そして、一斉にケーキを食べ始める一同。

仕上「やっぱりこのケーキは超うめえ〜！」



ケーキにがつつく浜面を見たアリサは…

アリサ「あなた…もうちょっと丁寧に食べなさいよ…」

すずか「あはは…」

呆れるアリサと苦笑いするすずか。

ケーキを食べている最中の当麻に一人の男性が近寄ってくる。

士郎「うちのケーキは美味しいかな？」

当麻「とても美味しいです」

士郎「喜んでくれているようで何よりだよ。私は高町士郎。なのはの父親だよ」

当麻「今日は本当にありがとうございます」

士郎「かしこまらなくていいんだよ。そう言えば君はどのあたりに引越したんだい？」

上条当麻が海鳴市の何処に住んでいるのか聞いていなかったクラスメートは、その話に耳を傾ける。

当麻「僕は…」

海鳴市のとあるマンションに住んでいると告げる上条。

士郎「なるほど。そう言えば君のご両親も海鳴に来たばかりだろう？ご両親のケーキも用意しようか？」

当麻「両親は…」

少しばかり暗い表情になった少年は両親がいないことを淡々と語り始める。

少年の話を聞いた一同は驚愕していた。

クラスメートも上条の両親が居ないことは知らなかったらしく、呆然としていた。

高町士郎と高町桃子も沈痛な表情をして…

士郎「すまなかったね…辛かったろう…？」

当麻「いえ…それに…」

桃子「それに？」

当麻「皆のおかげでそれほど辛くないんですよ」

海鳴市に訪れるまでは少年の味方は両親だけで、常に周囲の人間の悪意に晒されてきたのである。

しかし、海鳴市では少年を傷つけるような人間はおらず、むしろ心優しい人ばかりで少年は確かな『幸せ』を感じていたのだ。

士郎「そうか…」

静まりかえった店内だったが、突如浜面が…

仕上「おい上条！早くケーキ食わないと俺が食っちまうぞ！」

当麻「は、浜面！？ちょっと待って!？」

浜面の突然の行動に焦る上条。

周囲の人間はそんな彼等のやりとりを聞いて、笑い出した。再び明るい雰囲気を取り戻す店内。ケーキを食べ終えた上条は…

当麻「あの…このケーキを三つ頂いてもいいですか？」

桃子「ええ…どうぞ」

当麻「ありがとうございます」

上条当麻の歓迎会が無事終了して、クラスメートはそれぞれ解散した。

後片付けを手伝う高町なのはは、初めて少年に出会ったときの違和感の正体を理解した。

少年が時折見せた寂しそうな表情。

それはかつて、高町なのはが一人だったときと酷似していたのだ。しかし、少女は少年の様に大切な人を失ったわけではない。

少年と少女には決定的な違いがあった。

当麻は自宅に向かう前に八神はやての自宅に向かった。

ピンポン！

はやて「はい」

扉を開くはやては当麻の姿を確認する。

はやて「上条君？どないしたの？」

当麻「ケーキ貰ったんだけど、良かったらどうかな？」

はやて「ええの？」

当麻「うん」

はやて「おおきに！」

喜ぶはやてを見て微笑む少年。

当麻「それじゃあ僕はこれで」

はやて「ありがとな…あ！」

当麻「どうしたの？」

はやて「上条君。明日図書館に来れるか？」

当麻「行けるけど…」

はやて「弁当作ってもええか？」

当麻「いいの？」

はやて「ケーキをくれたお礼や」

当麻「ありがとう」

約束をして自宅に向けて移動する少年。

帰宅した少年は、フェイトとアルフを誘って本日翠屋で貰ったケ-

キを食べた。

アルフ「滅茶苦茶美味いよこれ!!」

フェイト「うん」

ケーキを頬張る二人を見て、少年はこの幸せがいつまでも続けばいいと願っていた。

## 第7話 始まりの物語

翌日、はやてから弁当を渡された上条はマンションにて、フェイトとアルフと一緒に渡された弁当を食べていた。

どうやら彼女の弁当の味は少年よりも上だったらしく、二人は絶賛していた。

フェイトとアルフは弁当を作ってくれた八神はやてに、近いうちにお礼をすることに決めた。

弁当を食べ終えた三人は、ジュエルシードの搜索を始めた。

当麻は初めてのジュエルシードの搜索ということもあり若干緊張していた。

フェイト「そんなに緊張する必要はないよ」

アルフ「そ〜だよ。別に当麻が戦う必要なんてないんだし〜」

当麻「う…うん」

ジュエルシードを探しながら少年は、フェイトからジュエルシードの特徴について教えられていた。

ジュエルシードは全部で21個存在しており、それぞれが強大な魔力を秘めており、周囲の生物が抱いた願望を叶える力を持っているらしい。

フェイトの母親が何故そのような物を探させているのか全く検討のつかない少年だったが、今はその問題については後回しにしておこうと考えた上条当麻だった。

結局、本日はジュエルシードを発見することが出来なかった一同。マンションに帰った三人は早速夕食の準備に取り掛かる。

夕食を食べ終わった三人はそれぞれの部屋に戻って行った。

ベッドに入った少年は、ジュエルシードの事について考えていた。周囲の人々の被害を未然に防ぐためにも、一刻も早くジュエルシードを回収しなければいけないことは分かっている。

しかし、ジュエルシードを回収し終えたらフェイトとアルフは海鳴市を去ってしまう。

自分の考えが我侭である事を承知しながらも、少年は二人に去って欲しくなかったのだ。

こうして夜が更けていき、海鳴市に来てから初めての休日は終わりを告げた。

授業が終わって下校中の一同。

アリサ「魔法少女？」

仕上「そうなんだよ。何でも謎の化け物もそいつが倒したらしいぜ」

すずか「流石に魔法少女なんていないんじゃないかな？」

なのは「私もそう思うけど…」

当麻「ま…魔法少女もゴーレムも噂なんじゃないかな…？」

フェイトとゴーレムの戦いの様子を誰かに見られていたのだろうか。

噂の中心部に居た少年としては、非常に気まづかった。

仕上「確かにそうだけだよ。でも本当だったら何か面白そうじゃないん」

アリサ「謎の化け物とはかく、魔法少女は夢があるかもね」

すずか「確かにそうだね」

なのは「にゃはは……」

再び歩き始める一同だったが…

????「（聞こえますか!? 僕の声が聞こえますか!?）」

なのは「!?!」

当麻「高町さん? どうしたの?」

なのは「聞こえないの?」

アリサ「何が?」

どうやら今の『声』はなのは以外には聞こえていないようだった。

少女は『声』がした方向へ駆け出していた。

他のメンバーは何が起きているのか全く分からなかったが、とりあえずなのはを追いかけることに決めた。

そして、なのはを追った少年少女達が見つけたのは、傷だらけになって倒れているフェレットだった。

なのは「大丈夫!?!」

アリサ「ど、どういうこと!?!」

すずか「早く手当てをしてあげなくちゃ…!」

当麻「この近くに動物病院は……」



仕上「俺は知ってる！早く連れて行くぞ！」

なのは「う、うん！」

なのはがフェレットを抱きかかえて、一同は最寄の動物病院まで向かった。

フェレットを医師に預けた後、少年少女達はフェレットを誰が預かるかについて話していた。

仕上「俺んちは多分無理だ」

アリサ「私も親が…」

すずか「…」

なのは「私がお父さんに聞いてみようか？」

当麻「僕が飼うよ。一人暮らしだから何の問題もないから」

なのは「分かったよ。それにしても…」

アリサ「何であのフェレットは傷だらけだったんだろ…？」

すずか「もしかして…誰かに虐待されたのかな…？」

仕上「もしそうなら…俺がそいつをボコボコにしてやる…」

当麻「落ち着いて浜面…」

明らかかな怒りを見せる浜面だったが、当麻が落ち着かせる。とにかく、一旦帰ることを決めた少年少女達。

上条はフェイトとアルフの二人に合流して、本日のジュエルシードの搜索を始めた。

いつもより暗い雰囲気を醸し出している少年を、不審に思ったフェイトとアルフは少年に何があったのかを聞いていた。

フェイト「そんなことが…」

アルフ「…」

当麻「うん…」

フェイト「当麻はその子を飼う事にしたんだよね？」

当麻「うん」

フェイト「じゃあ今度ペットフードとか皆で買いに行こうか？」

当麻「…そうだね」

ジュエルシードの搜索を再開する三人。

それから数時間が経って、本日も見つからないのかと考えていた三人。

そろそろ帰宅する時間に近づいてきたが、そこで少年が一つの提案をする。

当麻「ちよつとあつちを見てくるよ」

フェイト「分かった」

アルフ「早く戻ってきなよ」

フェイトとアルフも別の方向へ移動する。

二人と別れた少年はジュエルシードを探し続けていたが、そこで彼は思わぬ人物を見つける。

当麻「高町さん？」

なのは「か…上条君!？」

当麻「どうしたのこんな時間に？」

なのは「ちょ…ちょっとね…」

何が起きているのか理解できない少年だったが、少女の焦った表情を見た上条当麻は…

当麻「なんだか分からないけど、僕もついて行くよ」

なのは「え…でも…」

当麻「それに、もうこんな時間だし一人じゃ危ないよ」

なのは「…ごめんね…」

当麻「気にしないで」

そして少年は少女はどこに向かうつもりなのかと質問する。

少女は動物病院に向かうつもりだったらしく、移動中に少年と遭遇

したというこらしい。

少年は何故動物病院に向かうのかその理由が分からなかったが、少女にその理由について聞くようなことはしなかった。

動物病院に到着する高町なのはと上条当麻。

当麻「やっぱり誰もいないのかな？」

なのは「…」

何かを探すような動作をするなのはに疑問を覚える当麻だったが…

「「え？」」

突如、二人の前を二つの生物が通り抜けた。

一匹は昼間のフェレットらしく身体に包帯が巻かれていた。

一匹は身体から触手の様な物が生えている明らかに普通ではない生物だった。

なのは「な…何…あれ…？」

当麻「…」

呆然とするなのはと当麻だったが、フェレットは怪物に追いかけるれたままだった。

木に登るフェレットに対して木に体当たりをする怪物。

メキメキ！！

怪物の体当たりを受けた木がいと簡単にへし折れる。

空中に投げ出されたフェレットだったが、少女がフェレットをキャ

ツチする。

フェレットをキャッチした直後の少女に、怪物は近づく。

なのは「きゃああー!!」

当麻「高町さん!!」

すかさず襲い掛かってくる怪物に、怯える少女の前に少年が出る。恐怖に震えながらも、少年は右手を突き出す。

バキン!!

少年の右手に怪物の身体が触れた途端、ガラスが割れる様な音が周囲に響き渡る。

怪物の身体の一部が欠けていた。

しかし、その欠けた部分は徐々に元通りになっていった。

呆然としているなのは手を握り、当麻はその場から全力で逃げ出していた。

怪物から逃げている最中に、すこしばかり落ち着いたなのは。

なのは「な…何なのあれ？」

当麻「分からないけど…今はとにかく逃げなきゃ…!」

少年は怪物の正体について心当たりがあったが、今は逃げることに専念していた。

フェイトの下に向かう途中で、フェレットが目を覚ました。

そして更に驚くべき出来事が発生したのだ。

何と高町なのはが抱きかかえていたフェレットが喋ったのだ。

あまりにも異常な事態に固まる二人だったが、フェレットはなのは

に話しかける。

フェレットの話の中で魔法というキーワードに少年は反応する。間違いはない。

目の前のフェレットは、フェイトやアルフと同じ魔法に関係している。

フェレットがなのはに話しかけている最中で、先程の怪物が追いついた。

再び当麻のなのはの前に出る。

そして、怪物に右手を向ける。

しかし、怪物は身体から触手を伸ばして少年の右手を避けて、身体に直撃させる。

当麻「がつ!?!」

なのは「上条君!?!」

触手に突き飛ばされた少年は、コンクリートの壁に勢い良く激突する。

そして、少年の意識は深い闇に飲み込まれていった。

## 第8話 少女の決意

なのは「上条君!」

コンクリートに叩き付けられて気絶した少年の下へ向かう少女。

なのは「上条君!しっかりして!」

少年を揺さぶっても起きる気配は全く無い。

そうしているうちに、徐々に迫り来る怪物。

???「くっ!」

痛みを我慢して、怪物となのはの間に割り込むフェレット。

なのはは自分達を庇うフェレットの姿を見て、一つの決意をする。

なのは「どうすれば魔法って力が使えるの?」

???「え...?」

なのは「上条君やフェレットさんにはこれ以上傷付いて欲しくないから。だから!」

???「...これを!」

なのはの言葉を聞いたフェレットは、少女に赤い石を渡す。

なのは「これって...暖かい...」

「????」それを手に持って、目を閉じて、心を澄ませて、今から僕が言う言葉を繰り返して」

なのは「う…うん！」

「我、使命を受けし者なり」

「『我、使命を受けし者なり』」「契約の元、その力を解き放て」

「えっと…『契約の元、その力を解き放て』」

「風は空に、星は天に」

「『風は空に、星は天に』」

「そして、不屈の心は」

「『そして、不屈の心は』」

「『この胸に』…!」

瞬間。

高町なのはが持っている赤い玉から、桃色の光が進る。

当麻「う…」

タイミング良く少年が目を覚ます。

「『この手に魔法を、レイジングハート、セットアップ』…!」





なのは「きゃああー!!」

無意識に杖を正面に向ける少女。

『Protection』

かつて、上条当麻をトラックから守ってくれたフェイト・テスタロツサが使用していた物と同じ壁が、少女の目の前に発生する。怪物が魔力で作られた壁に激突する。

しかし、その壁は非常に頑丈らしく怪物の攻撃を全く受け付けない。怪物の身体が削られて、周囲に飛び散り、様々な物を破壊するが、今の少女にそのことを気にしている余裕はなかった。

再び怪物の身体が再生していく様を見て、恐怖するなのは。

その隙を見逃さなかった怪物は、不完全に回復した身体で少女に突進してきた。

しかし、怪物の一撃は少女に当たるとは無かった。

バキン!!

当麻「高町さん…大丈夫…?」

なのは「か…上条君!?!」

意識を取り戻した少年は、怪物と少女の間に割り込み、右手を突き出して少女を怪物の攻撃から守っていた。

しかし、先程少年が受けた怪物の攻撃は思った以上に強烈だったらしく、少年は所々出血していた。

なのは「上条君…血が…」

当麻「僕なら大丈夫…」

「???」「あれは魔力の塊なんだ！ 物理的な攻撃じゃ駄目なんだ…  
魔力を減らすとかして力を弱らせてからコアを封印しないと…！」  
「  
なのは「私なんか出来るのかな？」」

当麻「大丈夫…きっと…高町さんなら…」

怪物の攻撃を受け止めている少年の声を聞いた少女は、決意した。  
そして、少女は目を閉じる。

自分の呪文を見つける為に…  
程なくして、少女はその呪文をみつけた。  
高町なのはは瞳を開ける。彼女に最早迷いは無かった。

「『リリカル、マジカル……』」

「封印すべきは、忌まわしき器『ジュエルシード』！」

「『ジュエルシードを、封印!!』」

『Sealing mode . Set up』

なのはの杖から強烈な光が発生して、その光は怪物に直撃する。  
その光は怪物を包み込み、少しずつ怪物の身体が崩壊していく。  
そして、怪物の眉間にローマ数字が出現した。

「???」「今だ！」

フェレットの言葉に少年は、最後の力を振り絞りその場から離れた。

なのは「ジュエルシード、封印!!」

『Sealing』

怪物の身体は更に崩壊していき、やがてその身体は完全に消滅して、その場には宝石が残っていた。

???「……早く、杖あの宝石に触れて……」

なのは「あ……うん」

フレットの言葉に従い、なのはが杖の先端の赤い宝石で、それに触れると青い宝石に吸い込まれていった。

しかし、変身を解除した少女の災難は、終わることが無かった。

???「巻き込んでしまって……ごめん……なさい……」

当麻「なんとか……なって……よかった……よ……」

意識を失ったフレットと上条当麻。

なのは「ふ……二人とも……!!」

どうしていいかまったく分からず、動揺するなのはの前に……

桃子「なのは?」

なのは「お……お母さん!?!」

家を勝手に抜け出したのはを探しに来ていた高町桃子がその場に居た。

その頃、結標真紀は端末の様な物で何者かと連絡を取っていた。

真紀「ええ…ロストログアの反応は未だに見られないわ」

「???」

真紀「分かっているわ。あれがどんなに危険なものなのか」

「???」

真紀「それじゃあね」

そう言つて、彼女は携帯端末の電源を切る。

真紀「全く…職務熱心なのは悪くないけど、堅物過ぎるのも悩みものね…」

彼女の前には一人の女性が立っていた。

真紀「この間の魔術師といい…あなたといい…この町に何かあるのは確実なんだけどね」

正面の女性は杖の様なものを構える。

そして、大量の魔力弾を少女に向けて発射する。

ドオン!!

真紀「穏やかじゃないわね…」

先程とは全く異なる場所に移動していた結標真紀は、小型の機械を取り出す。

真紀「フェンリル」

『Set up』

少女の服装が変化する。

しかし、彼女の姿はフェイトやなのはの様な魔法少女を彷彿とさせる様な服装ではなく、どこことなく機械的な印象を与えていた。

真紀「生憎『これ』には非殺傷設定なんて便利な機能はついてないから、死んでも気にしないでね」

「???」「!?!?」

女性の両手両足が、光の輪の様な物で拘束される。

真紀「ちなみにそれ…ただのバインドじゃないからね」

バリバリバリ!!

輪から発生した電撃が女性を容赦なく襲う。

「???」「!?!?!」

そして…

ドサツー！！

真紀「全く…海鳴も物騒になったわね…まあ…学園都市ほどじゃないけど…」

結標真紀はそのまま自宅に向けて帰って行った。  
その頃…

フェイト「アルフ…そっちは…？」

アルフ「駄目だ…どこにもいない…」

フェイト「当麻…一体何処に行ったの？」

## 第9話 大切な約束

当麻「ここ…は…？」

先程、自分が居た場所とは異なり、目が覚めた少年の視界に入ったものは見たことも無い光景だった。

桃子「目が覚めた？」

上条当麻に声を掛けたのは、高町なのはの母親である高町桃子だった。

当麻「高町さんの…お母さん？」

桃子「少し待っててね」

そう言っただけ高町桃子は、部屋から出て行く。

当麻「あれから、一体何が…」

少年は自分の体を見る。

体には包帯が巻いてあった。

どうやら、高町家の人が治療してくれたらしい。

当麻「高町さんに迷惑掛けちゃった…」

当麻は迷惑を掛けたことに対する罪悪感を感じていた。

それから少し時間が経ち、高町なのはが部屋に入ってきた。

少女は、その腕にフェレットを抱きかかえていた。



ちなみに、高町桃子はその場に居なかった。

なのは「上条君…体は大丈夫？」

当麻「うん。迷惑掛けてごめんね…」

なのは「ううん。私のせいで上条君が怪我したんだから…」

当麻「そんなことは…」

なのは「本当に…ごめんなさい…ひっく…」グス

当麻「高町さん」ポン

なのは「え？」

当麻「僕が勝手にやったことだから、高町さんが気にする必要は無いよ」

なのは「でも…」

当麻「それに、高町さんがいなかったらこの程度じゃ済まなかったと思うしね」ナデナデ

なのは「う…」

当麻「だから、高町さんが気にする必要はないんだよ」ナデナデ

なのは「う…うん／＼／」

なのはの頭を撫でながら笑顔で語りかける当麻。

「???」「怪我は大丈夫かい？」

当麻「うん。君はどうなの？」

「???」「余った魔力を回復に使わせてもらったから、僕は大丈夫だよ」

フェレットの体の傷は殆ど無くなっており、少年は軽く驚く。

当麻「良かった…」

「???」「巻き込んでしまつてごめんなさい…」

当麻「気にしないでよ。僕が勝手にやったことだから」

「???」「…」

当麻「それにしても…君は一体…喋るフェレットなんて初めて見たけど…」

「???」「それは…」

フェレットは、自身の正体と目的を二人に語る。

フェレットの名前は、ユーノ・スクライアと言った。

ジュエルシードと呼ばれる宝石は、元々彼が居た世界に存在するもので、発掘作業を行っていた彼が偶然掘り起こして、別の世界に散らばってしまった物らしく、彼が一人で回収作業を行っているという話だった。

二人にその話をするときのユーノの表情は暗かった。恐らく、自分自身の問題に魔法とは全く関係ない人間を巻き込んでしまった罪悪感があるのだろう。

なのはは、別世界の話を聞いて驚きを隠せなかったが、当麻はフェイトと既に出会っているため、そこまで驚くような話でもなかった。一連の話が終わり、少年は大切なことを思い出した。

当麻「高町さん。電話借りてもいいかな？」

なのは「え…？う、うん。構わないけど…」

少女は少年を電話の場所を教えて、少年は電話を掛ける。

彼が連絡した先は、現在彼が住んでいるマンションに向けてのものであった。

『マンション』

一方その頃、フェイト・テストアロッサとアルフはマンションに帰っていた。

上条当麻を探していた二人だったが、結局少年を見つける事が出来ず、アルフに少年がマンションに帰っているのかも知れないと言われたフェイトは、一旦マンションに戻ることに決めた。

しかし、マンションに少年は帰っておらず、再びマンションを出て少年を探すことを決めた二人だったが…

P r r r r ! !

フェイト「電話？」

アルフ「こんな時間に誰なんだ？」

不審に思いながらも、受話器を取るフェイト。

フェイト「どなた様ですか？」

当麻「もしもし…フェイト？」

フェイト「当麻!？」

アルフ「当麻なのかい!？」

驚く二人だったが、少年から何があったのか説明される。

ジュエルシードの暴走によって生まれた怪物に襲われて気絶して、クラスメートの子の家にお世話になっていることらしい。

当麻「ごめんね…迷惑掛けて…」

フェイト「ううん…当麻が無事でよかった…」

当麻「それじゃあね…」

フェイト「うん…」

通話が終了してフェイトは受話器を置く。

フェイトとアルフは当麻と別行動を取っていたことを後悔していた。もし、その場に自分がいれば少年が怪我をすることがなかった。

フェイトはそのことに心を痛めていた。  
フェイトとアルフに連絡を終えた少年は、再び部屋に戻った。

ユーノ「連絡は終わったの？」

当麻「うん。高町さん。手間掛けさせちゃってごめんね」

なのは「ううん。気にしないで」

当麻「それじゃあ。僕は帰るから」

なのは「え？」

当麻「あまり長居するわけにもいかないだろうし」

なのは「で…でももう夜中だし…」

桃子「なのはの言う通りよ上条君」

高町桃子が部屋に入ってくる。

ユ一ノは、話している所を知られるわけにはいかない為黙っていた。

当麻「で…でも…」

桃子「それに夜中は何かと危険だからね」

当麻「迷惑を…」

少年が言い終える前に、高町桃子が上条当麻を優しく抱きしめる。

桃子「無理しなくていいのよ…」

抱きしめられて驚く少年だったが、懐かしい感覚を思い出し、そのまま眠りについた。

翌日、本日は小学校が休日ではなかったのだが、なのはの両親が学校に少年が休むとの連絡を入れてくれた。

当麻「本当にありがとうございます」

桃子「本当にいいの？無理しないほうがいいわよ？」

当麻「大丈夫です」

少年は結局、高町家で泊まった後にマンションに帰る事にした。

桃子「気をつけてね」

当麻「はい」

マンションに帰宅した少年は、フェイトとアルフに再開する。

フェイト「当麻！」

アルフ「大丈夫かい！？」

当麻「うん。迷惑掛けてごめんね」

フェイト「ううん…私がしっかりしてれば…」

当麻「そんなことないよ」

アルフ「当麻の言つとおりだよフェイト。当麻も無事だったんだし」

フェイト「そうかな…？」

場の雰囲気切り替える様に、上条当麻はフェイトとアルフに二つの頼みごとをする。

当麻「いきなりだけど、二人にお願いがあるんだ」

フェイト「お願い？」

アルフ「なんだい？」

当麻「僕に戦い方を教えて欲しいんだ」

「「え？」」

予想外の申し出に動揺するフェイトとアルフ。

当麻「二人の足を引っ張りたくないんだ。それに…」

フェイト「それに？」

当麻「フェイト達に無理して欲しくないから…」

厳密には、フェイトとアルフだけではなく、高町なのはとユーノ・スクライアも含まれていた。ジュエルシードの問題を、同じ年の少女に任せることは少年にとって我慢出来ないことだった。

だからこそ、少年は彼女達の負担を軽くする為に二人の少女に戦い方を教わることを決めたのだ。

強い決意を宿した少年の瞳を見たフェイトとアルフ。

フェイト「分かったよ。だけど今日は休まなきゃ」

アルフ「そうだよ。この状態じゃ戦い方を教えることなんて出来ないよ」

当麻「うん」

二人の言葉に従い、本日はマンションで休養を取ることにした上条当麻だった。

その頃、浜面仕上は海鳴市をぶらついていていた。

仕上「暇だな」

今日は、上条当麻が休みということもあり、当麻を誘って遊びに行くつもりだった浜面は暇になったのだ。

仕上「なんか面白いモンでもないかな？」

少年が海鳴の公園を通りがかった時、公園のベンチに目を開けたまま、微動だにしない少女の姿を見つけた。

仕上「何やってんだあいつ？」

明らかに目立っている少女を見つめている浜面だったが、少女の体が少しずつ傾いていき…

ドサ…！

仕上「お、おい!?!」



少年は慌てて少女の下に駆け寄る。

仕上「大丈夫か!？」

少女に声を掛けるが、返事は無い。  
救急車を呼ぶ為に、急いでその場から離れようとしていた少年だったが…

????「グー…スカー…ピー…」

仕上「グースカーピー？」

再び少女に近づく。

仕上「何だよ…寝てるだけじゃねえか…」

拍子抜けした少年は盛大な溜息をつく。

少年の溜息で目が覚めた少女は、寝ぼけ眼で周囲をキョロキョロ見回して…

????「南南西から電波が来てる…」

仕上「はあ…?」

少女が話している内容が全く理解できない浜面仕上。

????「あなたは？」

少年に気付いた少女は、少年の顔をじくっと覗き込む。  
仕上は内心ドキドキしながら、少女の質問に答えた。

仕上「お前が意識を失ってると思って近づいたんだよ。救急車を呼ぼうとしたら、寝てるだけだったとは思わなかったけどな…」

「???」「そう…」

仕上「そっぴゃ…ここらじゃ見ない顔だけど…」

「???」「私は…海鳴に来るのは初めてだから…」

仕上「そうなのか…よし!!」

突然何かを思いついた少年は、少女の方を向いて笑いながら。

仕上「ならこの俺が海鳴を案内してやるよ!」

「???」「いいの…?」

仕上「かまわねえって!そんじゃあ行こうぜ!!」

少年は少女の手を握り、その場から駆け出した。

少女の名前は滝壺理后と言った。

それから、少年は少女の海鳴を案内していた。

案内というよりはデートに近かったが、二人ともデートという認識はこれっぽっちもなかった。

少年が案内した場所は、ゲームセンターや翠屋などだった。

ゲームセンターで遊んだ際に、少年はUFOキャッチャーをして馬のぬいぐるみを取って少女にプレゼントした。

翠屋に到着した際は、高町家の人々にニヤニヤされながら見られていた。

少女は基本的に無表情だったが、少年に案内されていたときは、しばかり笑顔が見えた気がした。

少年も最初は、単なる暇つぶしのつもりだったが少女と一緒にいる時間を楽しいと感じていた。

再び二人が出会った公園に戻った。

浜面仕上は滝壺理后と一緒に居るうちに様々な話を聞いた。

少女は学園都市に向かう途中で、海鳴市に立ち寄ったらしく、公園で昼寝していたときに少年と出会ったらしい。

学園都市に憧れを持っている少年だったが、この前に高町なのはと月森すずかから聞いた話を思い出す。

学園都市に行ったら、学園都市の外に出るだけでも大変な手続きが必要になるということ。

超能力という物を手に入れるために脳を開発するということ。

一緒に遊んだ少女が、そんな遠い場所に行ってしまうことを実感する。

理后「そろそろ行かなきゃ…」

仕上「そうか…」

理后「今日は楽しかったよ。ありがとうはまづら」

仕上「俺も楽しかったよ。ありがとな滝壺」

理后「じゃあ…さよなら…」

少女は少年の下から立ち去っていく。

どンドン離れていく少女の後姿を見ていた少年は、全力で叫んだ。

仕上「またな!!また遊ぼうぜ!!滝壺!!」

少女の足が止まり、少年の方を向く。

理后「ありがとね…はまづら…またね…！」

滝壺理后の姿が見えなくなっても、浜面仕上は手を振り続けた。

## 第10話 少年の特訓

『私立聖祥大附属小学校』

仕上「はあ……」

当麻「浜面？どうしたの？」

アリサ「朝からこの調子だから放っておいたほうがいいわよ」

溜息をついている仕上を心配した当麻が声を掛けるが、アリサに止められる。

当麻の言葉に反応しない少年だったが、仕上が溜息をついている理由は先日、彼が出会った滝壺理后という少女が原因であった。

すずか「でも…浜面君、一体どうしたんだろうね？」

アリサ「さあ…浜面が何考えてるかなんて分かるわけないでしょ」

なのは「体調でも悪いのかな？」

当麻「どうなんでしょう？」

なのは「そういえば…上条君。身体は大丈夫？」

当麻「大丈夫だよ。ありがとう高町さん」

なのは「う…うん…／＼／」

少女の顔が少しばかり赤かったが、鈍感な少年がそのことに気付くことはなかった。

仕上「学園都市かあ…」

すずか「学園都市がどうしたの？」

アリサ「学園都市にでも行きたいわけ？」

仕上「まあ…会いたい奴がいるんだけど…」

当麻「学園都市に友達でも居るの？」

仕上「まあな」

なのは「そうなんだ」

浜面仕上の友人が学園都市に居るということを始めて聞いた一同だったが、それほど興味があるわけではないのか、その事について言及する気は無かったらしい。

子萌「学園都市がどうしたんですか？」

学園都市の話をしていた少年少女達の下に、担任の月詠子萌がやって来た。

なのは「浜面君の友達が学園都市に居るといっ話をしていたんですよ」

子萌「そうだったんですか。もしかしたら、先生が浜面ちゃんのお友達に出会うかもしれませんね」

上条「子萌先生は学園都市の先生でしたよね」

子萌「そうなのですよ」

アリサ「先生以前に大人っていうのが納得できないけど…」

すずか「ア…アリサ…」

子萌「だから私はれっきとした大人なのですよ〜！」

アハハ！

何気ないやり取りをして、平凡な一日を過ごす少年達と少女達。

『マンション』

授業が終わって、上条当麻は早速マンションに帰った。

今日は、フェイトとアルフに戦い方を教えてもらうと約束した日だった。

当麻に戦い方を教えると約束したフェイトとアルフだったが、少年用のデバイスなど所持していなかったし、少年が自分達のように戦えるわけではないと理解していた。

ゴーレムと対峙した時の服装になっているフェイト。

ちなみに、少女が身に纏っている服はバリアジャケットと言っらしい。

『Protection』

少女は魔力で構成された障壁を作り出した。

フェイト「当麻。右手である壁に触れてもらってもいい？」

当麻「うん」

フェイトが何故いきなり障壁を作り出して少年の右手で触れるように指示したのかと言うと、それは、ゴーレムと戦った際に少年の右手がゴーレムに触れた際に、ゴーレムの身体の崩壊したことからなんらかの魔力を打つ消すことがあるのではないかと推測したからだ。少年の右手が障壁に触れた途端…

バキン！！

ガラスが割れる様な音が周囲に響き渡り、障壁は跡形もなく消滅した。

当麻「え？」

アルフ「バリアが消えた？」

少年は、ゴーレムやジュエルシードの暴走によって生まれた怪物との戦いでも右手を無意識に突き出していたが、自分の右手にこのような力が宿っているとは知らなかったのだろう。

フェイト「（やっぱり…）」

少年が障壁を打ち消した場面を見て、フェイトは一つの確信をする。



フェイト「当麻とアルフが握手してもらってもいいかな？」

アルフ「ああ」

当麻「うん」

フェイト「言い忘れていたけど、当麻は右手で握手してね」

当麻「分かったよ」

ガシッ！

アルフ「あれ？何だか力が抜けていく？」

フェイト「もういいよ」

アルフと当麻は握手をやめる。

フェイト「もう一度握手してもらっていいかな？当麻は今度は左手でお願い」

再び握手をする二人。

フェイト「アルフ。何か違和感みたいなものはある？」

アルフ「いや…無いけど…」

当麻「どうしたのフェイト？」

アルフと握手させた意図が分からず、質問する当麻。

フェイト「多分なんだけど…当麻の右手には魔法の力を打ち消す力が宿っているんだと思う」

当麻「魔法を打ち消す力？」

アルフ「それって…アンチマジックゲローブAMGみたいな物かい？」

フェイト「そうだと思うけど…」

当麻「そんな力があるなんて…」

自分の右手に魔法を打ち消す力があることに驚きを隠せない少年。しかし、右手にその力が宿っていなければゴーレムの戦いで確実に命を散らしていた。

それが、少年にとっての幸運か不幸かは誰も知る由がない。

フェイト「じゃあ早速、特訓を始めるけどいいかな？」

当麻「うん。よろしくお願いします！」

特訓の内容は、フェイトが放った魔力弾を打ち消したり、アルフに近接戦闘を習うといったものだった。

少年が特訓をしている頃、高町なのははユーノ・スクライアと一緒に海鳴市を歩き回り、ジュエルシードの搜索を行っていた。

ユーノの話聞いたなのはは、彼に協力してジュエルシードの搜索に当たることを決めた。

なのは「（見つからないね…ジュエルシード…）」

ユーノ「（そう簡単に見つかるような物じゃないからね…）」

念話で会話する二人。

喋るフェレットと会話している所を、見られるわけにはいかないの  
でこのような形で会話することになった。

なのは「見つからないなあ…」

真紀「どうしたの君？」

なのは「え？」

困っている様子の高町なのはに声を掛ける結標真紀。

真紀「何か困っているようだったから…」

なのは「にやはは。すいません。大した事じゃないんです」

真紀「そう？ならいいけど…」

なのは「心配してくれてありがとうございます」

真紀「いえいえ。困ったときはお互い様だからね」

結標真紀と別れる高町なのは。

真紀「（あれは…念話か…あの子は…）」

それから、ある程度の時間が過ぎて高町なのははジュエルシードに  
よって、怪物化した犬と戦っていた。

始めの頃に比べて、スムーズに変身できた上に順調にジュエルシードを封印することが出来た。

そんな少女の様子を離れたところから見ている真紀の姿があった。

真紀「あの子も魔導師か…全く…厄介な事になりそうね」

ヒュン！！

音も無くその場から消える結標真紀だった。

翌日、上条当麻のマンションに少年宛に差出人不明の手袋が送られて来た。

フェイトとアルフにその手袋を見せる当麻。

当麻「これってどういうことなんだろう？」

アルフ「何で右手用だけしかないんだよ…」

当麻「誰が送ったのか全然分からないし…」

フェイト「もしかして…この手袋を送った人は当麻の右手について何か知っている人なのかもしれないね」

当麻「そうなのかな？」

アルフ「確かに…そうじゃなきゃ右手用しかない手袋なんてただの嫌がらせだろ？」

当麻「そうだね…」

フェイト「でも…誰が何の為に…」

アルフ「それは分からないけど…とにかく、せっかくだから試してみようよ!」

アルフの提案に乗った当間は早速、手袋を着けてアルフと握手する。

アルフ「やっぱり…力が抜けない…」

手袋を着けている状態だと、少年の力が発動しないことを理解した一同。

しかし、誰が何の為にこの手袋を送ったのかその理由が分かる者はその場に居なかった。

その頃…

???「うっ…お腹が超空きました…」

一人の少女が海鳴市をうろついていた。

## 第11話 歪んだ奇跡

「???」孤児院を抜け出したのはいいんですが…お腹が超空きました…」

海鳴市をふらふらしながら歩く少女は、どうやら家出をしているようだった。

少女が居た孤児院は、別に子供達に対して非人道的な行いをしている訳ではない。

しかし、孤児院に居る子供達の中でもとりわけ活発だったこの少女に、そこでの生活は耐えられるものではなかったらしく、こうして孤児院を抜け出したのだ。

「???」それにしても…ここは海鳴の何処なんでしょうか？」

基本的に外出を禁じられている為、少女は現在自分が歩いてる場所が海鳴のどこか全く把握出来ていないようだった。

しかし、運良く少女は少年と少女を見つける。

「???」丁度いいですね。ここが海鳴のどこなのか尋ねてみましょう」

恋人同士の様な雰囲気を感じ出している少年と少女だったが、生憎幼い少女にはその機微を感じることなど出来ない。

少年が少女に宝石の様な物をプレゼントしようとする場面で、少女は二人に近づいていくが、突然少年が少女に渡そうとした宝石が強い光を放つ。

「???」え…」

そして、光が収まった頃…

少年と少女が居た場所には巨大な木があった。更に、その周辺には巨木の根っこの様な物が生えていた。

????「ええええええええええ！？超何なんですかあああ！！？」

少女は目の前の異常事態にただただ絶叫していた。

少し前…

高町なのはとアリサ・バニングスと月村すずか、上条当麻と浜面仕上の五人はサッカーの試合観戦をしていた。

今日は地元の少年達による試合があつたらしく、高町なのはの家族に誘われてこうして試合を眺めていたのだ。

アリサ「浜面と上条はサッカーをしないの？」

仕上「ああ…」

上条「僕はサッカーをしたことがないから…」

試合が終了して、一同は翠屋に集まった。

ちなみに先程試合をしていたチームである翠屋JFCのメンバーも招かれていた。

ケーキをご馳走になる少年少女達。

仕上「それにしても…こいつも元気になったみたいだな」

ワシヤワシヤ！！

ユーノ「キュー！」

テーブルの上に乗っているユーノを浜面が触る。

すずか「そうだね。元気になってよかったよ」

アリサ「ずるいわよ浜面！私にも触らせなさい！」

ユーノを取り合うアリサと浜面。

そんな二人の様子を見ながら微笑む三人。

仕上「そっぴや結局こいつは上条じゃなくて高町が飼う事になったんだよね？」

なのは「うん。家の人も気に入ってくれたし……」

少年少女達が話している間に、翠屋JFCのメンバーはケーキを食べ終えたらしく、高町四郎に挨拶をして帰っていく。

なのは達も彼等を見送ろうと、店の外に出た。

彼等が見送っていた一人の少年が、バッグの中から小さくて輝いている宝石みたいなものを取り出して、ポケットの中に入れた。

それを偶然見た当麻となのは。

当麻「あれって……まさか……ジュエルシード？」

なのは「（あの子……気のせい、だよな……）」

彼等を見送った一同。



当麻「ごめん。ちょっと用事が出来たからまた明日」

一同と別れた少年は、先程の少年を急いで追いかけた。少年が何処に行ったのか分からない当麻だったが、運良く少年を見つけることが出来た。

丁度、少年が少女にジュエルシールドを渡そうとしている場面だった。彼等の近くには一人の少女も居た。

急いで少年と少女の下に走るが時既に遅く……  
ジュエルシールドから発生した光が少年と少女を包んだ。

当麻がメンバーと別れてから、解散したなのは達。

なのはとユーノは、本日もジュエルシールドの捜索に勤しんでいた。少女は先程の少年が持っていた寶石に疑問を感じていたが、少年に言及するようなことはしなかった。

そして、突如ジュエルシールドの暴走を関した二人は、一旦ビルの屋上に移動した。

高町なのはとユーノ・スクライアはジュエルシールドの暴走によって引き起こされた暴走を目の当たりにした。

街中の至る所に張り巡らさせた巨大な木の根。  
そして、街の中心部に存在する巨木。

なのは「これって……」

ユーノ「たぶん人間が使ったんだと思う。不完全でもジュエルシールドは人間の願いによって凄まじい力を発揮するから……」

なのは「そんな……私のせいだ……あの時ちゃんと調べてれば……」

しかし、少女が後悔しても状況が好転するわけではない。

その頃、ジュエルシードの暴走の中心部に居た上条当麻と少女は…

「超訳が分かりません!!」

当麻「お…落ち着いて…」

「これが落ち着いていられますか!？」

軽いパニックに陥った少女を落ち着かせる上条当麻。

巨木も近くに居る二人の存在に気付いたのが根っこを伸ばして二人に攻撃を加える。

「きゃあああ!!」

巨大な木の根が襲い掛かってくる。

そんな物が直撃すれば無事で住む筈がない。

少女は無意味と知りながらも、頭を抑えてうづくまる。

しかし、巨木の根が少女に直撃することは無かった。

バキン!!

少年の右手に触れた木がいとも簡単に消滅する。

「え…?」

何が起きているのか全く理解できない少女。

当麻「とにかくここから離れるよ!!」

ガシ!!

少年に手を掴まれて動揺する少女だったが、いち早く落ち着きを取り戻した少女は…

???「分かりました!!」

少年と少女はその場から全力で逃げ出した。襲い掛かる根っこは右手で打ち消しながら、ある程度離れた場所に移動することに成功した二人。

当麻「怪我は無い?」

???「は…はい。大丈夫です」

当麻「良かった…」

呼吸を整える二人だったが、そんな二人は近くに一人の少女が居ることに気付く。

当麻「高町さん!」

なのは「え…?上条君?」

当麻はなのはに声を掛ける。

ちなみに、少女はバリアジャケット姿であり一般人から見れば、コスプレでもしているのかと勘繰られそうだが、今はそんなことを言っている場合ではなかった。

なのは「どうしてここに?」

当麻「高町さん！この子をお願い！」

そう言つて少年は傍らにいる少女に話す。

なのは「上条君は何処に行くの!？」

当麻「ジュエルシードの暴走の巻き込まれた子が居るんだ!!」

ダッ!!

そう告げた少年は、再び暴走の中心部へ向かつて行つた。

止める間もなく少年の姿を、呆然と見ていることしか出来なかつた少女。

????「それってコスプレですか？」

なのは「え!?!え〜と…これは…」

予想だにしない質問に動揺するのはだったが、ユーノに念話で話し掛けられる。

ユーノ「(なのは!?!早く彼を追いかけないと!!)」

なのは「(う…うん!!)」

ユーノの言葉を聞いたなのは…

なのは「ちよつとここで待ってもらえるかな?」

????「…はい…」

なのは「ごめんね！すぐ戻るから！」

高町なのはも上条当麻を追って、暴走の中心部へ向かった。巨木の根元に辿り着いた少年は、巨木の根に阻まれて先に進めずいた。

当麻「くっ……」

バキン！！

少年は行く手を阻む根を打ち消しながら進もうとするが、所詮は単なる小学生でしかない当麻は体力を相当消耗していた。

ビシユ！！

少年に向かって突撃してきた根が頬を掠める。

そこから血が滴り落ちていた。

しかし、少年がその程度で諦めない。

他人の不幸を許さない少年だからこそ、彼は拳を握るのだ。

当麻「はあ……はあ……」

ドッ！！

一気に大量の根が少年に向かって伸びてきた。

右手一つしか対抗手段の無い少年に、この攻撃が防ぎ切れるわけではない。

恐らく、この一撃が少年に当たれば命を失う可能性は非常に高いだろう。

しかし、少年はその様な状況でも前に進み続けた。

そして、大量の根が少年に当たる直前…

謎の光が巨木に突き刺さった。

その光は、巨木の中の少年と少女が閉じ困られている繭を正確に貫いた。

少年を貫こうとしていた根は動きを止めて、徐々に消滅していった。

当麻「あの子達は…」

少年が周囲を見回す。

そこには、少年と少女が倒れていた。

外傷は無く、無事な姿を確認できた少年は安堵した。

当麻「良かった…」

????「超大丈夫ですか!?!」

当麻の下に駆けつけた少女。

続いて、なのはとユーノもその場に現われた。

なのは「上条君…」

なのはは当麻の姿を見て後悔する。

所々傷を負っており、頬からは血が流れていた。

なのは「ごめんなさい…私があの時気付いていたら…」

もし、少年が所持していた宝石について問い詰めていたら、この様な事態には陥らなかつた。

当麻「ううん…僕はあれがジュエルシードだって気付いて行動してたのに…結局僕だけじゃ二人を助けられなかつた…」

なのは「でも…上条君は…」

上条当麻は右手以外は普通の小学生であり、高町なのは様に魔法の力を持っているわけではない。

当麻「高町さん…」

なのは「ごめんなさい…」

上条当麻も高町なのはもフェイト・テストロッサも年相応の子供らしくなく、自分で全てを背負い込もうとする性質の人間である。

当麻「高町さん…僕もジュエルシードの搜索を手伝つよ…」

なのは「え？」

少年の突然の申し出に動揺する少女。

当麻「一人だつたら出来ないことでも二人だつたら何とか出来るかもしれない」

なのは「でも…」

当麻「それに、僕の右手には魔法を打ち消す力があるらしいんだ」

なのは「魔法を打ち消す力？」

当麻「それなら、僕でも力になれると思うから…」

なのは「…」

当麻「僕はただ…誰かに不幸になって欲しくないだけだから。それに高町さんには笑っていて欲しいからね」

なのは「上条君…本当にいいの？」

当麻「うん」

上条当麻は高町なのはに無理をさせない為に、ジュエルシードの捜索に協力することを決めたが、高町なのはとフェイト・テストアロツサがジュエルシードを集める理由は決定的に異なっている。

そのことを理解しても、高町なのはを放っておくことが出来なかった少年だった。

???「超放つたらかしです…」

そして、先程から二人に放っておかれていた少女は少しばかり不機嫌だった。

一方その頃、ビルの屋上から結標真紀は海鳴を眺めていた。

真紀「やっぱり…ロストロギアは危険ね…そろそろ連絡を入れようかしら…」



端末を起動して、『 に連絡を入れようとする少女だったが…

バァン！！

銃弾が端末に直撃して破壊される。

真紀「狙撃か…」

周囲に人影は全く無く、今の銃撃は遠距離から放たれたものであると推測する少女。

真紀「誘っているのかしら…」

破壊されたのは端末だけで、少女に向けて銃弾は撃たれていない。

ヒュン！！

少女は無言でその場から消えた。

真紀「駆動鎧…」

?????」…」

先程の銃弾を放ったと考えられる場所に移動した少女は、五体の駆動鎧を見つけた。

真紀「学園都市の暗部か…狙いはロストロギアと私の処分って所でしようね…」

?????」…」

少女の問いに答えるつもりがないのか、駆動鎧は少女に銃口を向けてくる。

真紀「まあいいわ…さっさと…」

駆動鎧の一体が小型の機械の様な物体を取り出す。

そして…

キィイーン！！

真紀「な…あ…！？」

小型の機械から発生した音を聞いた少女は、突然苦しみ始める。

真紀「頭が…くう…！！」

謎の激痛でまともに立っていられる状態でない少女に、駆動鎧は一齐に銃口を向ける。

しかし、その銃口が火を噴くことはなかった。

ズガアア！！

一瞬で全ての駆動鎧が地面ごと切り裂かれる。

非常に頑丈な筈の駆動鎧を易々と切り裂かれて、呆然とする結標真紀。

痛む頭で少女が見たのは、黒髪で長身の身の丈以上の刀を背負った少女だった。

## 第12話 新たな出会い

高町なのはと上条当麻がジュエルシードの暴走によって生み出された怪物と戦っていた頃、フェイト・テスタロッサとアルフもジュエルシードの暴走によって生み出された怪物と戦っていた。

怪物に苦戦することも無く、ジュエルシードを封印することに成功する二人。

少女が居た場所は、海鳴市の中心部から遠く離れており、巨木の根による被害は無かった。

マンシヨンに向けて移動していた二人だったが、そこで予期せぬ人物に出会う。

はやて「あれ？」

フェイト「君は……」

アルフ「あの時の……」

フェイトとアルフは八神はやてに出会う。

どうやら、彼女は図書館から帰っている途中らしかった。

アルフ「あの弁当とっても美味かったよ！」

はやて「気に入ってくれた様でなによりや」

フェイト「本当にありがとうね。…ええと……」

お互いに自己紹介していなかったことに気付く三人。

彼女達が出会ったのは、ゴーレムとの戦いのみであり、少女を自宅

に送った際もお互いに自己紹介をするのを忘れていたのだ。

はやて「自己紹介してへんかったな。八神はやてや」

フェイト「フェイト・テストロッサだよ」

アルフ「あたしの名前はアルフだ」

はやて「フェイトちゃんにアルフちゃんか。ええ名前やね」ニコ

フェイト「あ…ありがとう…／／／」

アルフ「あんたもいい名前だよ」

はやて「おおきに」

お互いの自己紹介を終えた三人。

フェイト「あの弁当のお礼に何か出来ることないかな？」

弁当のお礼に何か出来ることはないかとはやてに尋ねるフェイト。

はやて「お礼なんてそんな…」

アルフ「遠慮なんてしなくていいんだよ」

フェイト「そうだよ。何でも言っつて」

フェイトとアルフの申し出に動揺した少女だったが、何かを考え込んだ後…

はやて「せやな…二人とも私の家に来てもらってもええか？」

フェイト「いいけど…」

アルフ「何をすればいいんだい？」

はやて「それは家に着いてからや」

何を手伝えばいいのか全く分からない二人だったが、そのまま少女について行った。

そして、一行は一軒家の前に到着する。

はやて「ここが私の家や」

少女に案内されて、家にお邪魔する二人。

そんな二人に少女が頼んだことは、料理の味見をして欲しいというものだった。

予想外の申し出に、本当にそれでいいのと聞くフェイトだったが、少女はそれで十分だと告げた。

自宅で色々な話を話す内に、フェイト・テストロッサとアルフは八神はやてに両親が居ないという事を知る。

上条当麻と同じ境遇の少女。

そのことを知ったフェイトの雰囲気若干暗くなるが、アルフが無理やりその場を盛り上げた。

慌てるアルフの姿を見て微笑むはやてと苦笑いするフェイト。

フェイトとアルフに料理を振舞うはやて。

自分の作ってくれた料理を絶賛してくれた二人に、少女は内心感謝していた。

一軒家でずっと一人で過ごしてきた少女にとって、この瞬間はとて

も新鮮で幸せだった。

一方その頃…

????「こほけーひ…超おいひいでふね…」

当麻「そんなに急いで食べなくても…」

なのは「にゃはは…」

少女はケーキを頬張っていた。

少し前、上条当麻と高町なのはに放ったらかしにされていた少女は二人に声を掛けようとしたが…

グ~~~~~!!!

盛大にお腹の音が周囲に鳴り響いた。

顔を真っ赤にする少女に気付いた二人。

気の毒に思った当麻は、先程貰ったケーキを少女に差し出した。

目にも止まらぬスピードでケーキを少年から受け取った少女は、そのままケーキにがつついた。

????「ご馳走様でした!」

当麻「よっぽどお腹が空いてたんだね」

なのは「大丈夫?」

????「大丈夫です!」ニカッ

二人に笑顔を見せる少女。

当麻「良かった…」

????「おっと…聞き忘れる所でした。ここは海鳴の何処ですか？」

なのは「え…？」

予想外の質問に戸惑う二人。

当麻「海鳴には初めて来たの？」

????「いえいえ。私は海鳴出身ですよ？」

なのは「ならどうして…？」

????「孤児院から外出しちゃいけないって超言われてましてね」

当麻「孤児院？」

なのは「（ということはこの子は…）」

????「退屈なので抜け出して来たんですが…」

当麻「さっきの騒ぎに巻き込まれたってこと？」

????「その通りです…」

なのは「災難だったね…」

当麻「孤児院を抜け出して来たって言うけど、どこか行く当てはあるの?」

????「いえ…全く…」

当麻「もし良かったら僕の家に来ない?」

「「え?」」

当麻「僕は一人暮らしだから一人増えても問題ないから…」

????「そんなこと言って…超変なことをするつもりじゃないですか?」

当麻「し…しないよ!」

????「冗談ですよ。でも…本当にいいんですか?」

当麻「うん」

????「それでは、お言葉に甘えさせていただきます」

少女は少年のマンションと一緒に生活することが決めた。  
そんな二人を見ていた高町なのは…

なのは「…む…」

当麻「高町さん?どうしたの?」

なのは「…何でもない…」



少しばかり不機嫌だった。

「????」「そういえば…まだ名乗ってませんでしたね。絹旗最愛です」

当麻「上条当麻だよ」

なのは「高町なのは。よろしくね」

最愛「上条に高町さんですね。よろしくお願いします」

当麻「さっきから『超』って言ってるけど…それは一体どついつ…」

最愛「口癖ですけど…変でしたか…?」

当麻「いや…可愛いと思うけど…」

最愛「そ…そうですか…/ / /」

なのは「…うゝ…」

当麻「高町さん?」

なのは「…上条君の馬鹿…」ポソ

海鳴の中心部から少し離れたビルの屋上。

黒髪で長身の少女は、あまりにも不釣り合いな日本刀を背負っていた。

神裂火織

天草式十字凄教の女教皇である少女は、ビルの屋上に佇んでいた。

神裂「私は…どうしたら…」

少女は、天草式十字凄教の女教皇という立場を捨てて、日本中を一人で旅していた。

少女は世界に20人しか存在しない『』の一人で、生まれつき神の加護による強運を持つがそれが周囲の人間に不運を与えていると考えて、女教皇という立場を捨てたのだ。

自分の進む道を見失い、途方に暮れていた彼女に近づく影があった。

???「おゝこんな所に居たのかにやゝ」

神裂「何者です？」

少女の近くに居たのは、金髪の少年だった。

どうやら、髪は染めているが年は小学三年生位だった。

???「そんなに威圧して欲しくないぜい。天草式十字凄教の女教皇さんよ」

神裂「っ！?どうしてそれを!？」

???「必要悪の協会。そう言えば分かるかにやゝ」

神裂「魔術関連の事件捜査や、魔術師・魔術結社の殲滅・処分を任務とする対魔術専門国際治安維持機関…」

パチパチ!

「……」名答

わざとらしく拍手する少年。

神裂「そんな組織が私に何の用ですか？」

「……」単刀直入に言わせてもらうぜい。神裂火織。必要悪の協会に所属しろ」

少年の纏っていた空気が一変する。

神裂「それはどういっ……」

「……」必要悪の協会が処分対象とする魔術師がどっいっ奴かは知っっているな？」

神裂「ええ……」

「……」そっいっ奴等を放っておくことが、何を引き起こすかも知っっているだろっ？」

神裂「……分かりました」

「……」話の分かる奴で助かるぜい。俺の名前は土御門元春だ。よろしくな」

自宅に帰った結標真紀は、予備の端末を取り出して『』に連絡を入れた。

激しい頭痛を引き起こした謎の機械と、自分を助けてくれた長髪の少女。

解決していない問題は多々あるが、一旦はジュエルシードの問題について報告するべきと考えて、端末を起動した。

『?????』

?????「やはり……」

?????「海鳴市ね……」

?????「でも……あの世界は……」

?????「ええ……だからこそ私達は慎重に動かなければならないわ」

?????「しかし……!」

?????「落ち着きなさい。この世界は表面上は平和だけど、その裏は非常に危険よ」

?????「……」ギリ!

?????「一旦、上層部に報告しますね」

?????「お願いね」

マンションに帰宅したフェイトとアルフ。

八神はやての所で食事をご馳走になっていたことを上条当麻に伝える為に、少年の部屋に入る二人。

ちなみに、部屋の合鍵は少年が事前に渡していた。しかし、少女達を出迎えたのは上条当麻ではなく……

最愛「超お帰りなさい!!」

フェイト&アルフ「誰!?!」

絹旗最愛だった…

第13話 『幸運』と『不幸』

『マンション』

上条当麻の部屋に見知らぬ少女が居る事に動揺するフェイトとアルフだったが、我に帰ると料理を作っている少年の所まで近づき、問い詰めた。

その時、フェイトが黒いオーラを纏っていたが、少年はそのことに気付かなかった。

フェイトとアルフに問い詰められ、少女についての説明をする上条当麻。

アルフ「なるほどね」

フェイト「…そうだったんだ…」

説明を聞き終えたフェイトは、少しばかり不機嫌だった。

フェイト「…全く…当麻は…」

最愛「もしかして…超お邪魔でしたか…」

黒いオーラを放っているフェイトに声を掛ける絹旗最愛。

フェイト「ううん。そんな事無いよ」

最愛「もしかして上条の彼女ですか？」

「「「え？」「」」

最愛「違うんですか？」

フェイト「そんな…私は…当麻とは…あう…／／／」

顔を真つ赤にしながら口籠るフェイト・テスタロッサ。

アルフはそんなフェイトの姿を見て苦笑いする。

当麻「フェイトは彼女じゃないよ」

あっさりと絹旗最愛の言葉を否定する上条当麻。

その言葉を聞いて、この世の終わりの様な顔をするフェイトと盛大な溜息をつくアルフ。

当麻「そもそも彼女なんて僕に出来るわけが無いし…」

フェイト「…」

アルフ「トウマ…あんたって奴は…」

当麻「とにかく、僕は料理を作っておくから皆はリビングで寛いでてね」

最愛「了解です！」「ビシッ！

アルフ「は〜い！」

フェイト「当麻。私とアルフははやての所でご飯を馳走になったんだけど…」

当麻「そうなの？…でも少しくらい食べても良いんじゃない？」

アルフ「そうだよフェイト」

アルフは正直食べ足りなくて、少年の言葉に賛同する。

フェイト「それもそっか。せっかく作ってくれたのに食べないのは悪いしね」

最愛「そうですよ！皆で食べたほうがご飯は美味しいですから！」

元気一杯の少女の態度に微笑む三人。

少年は調理を再開して、フェイトとアルフと最愛は三人で話していた。

出会って間もないというのに、アルフと最愛はとても仲良くなっていた。

精神年齢が近いからなのかもしれないとフェイトは考えた。

最愛「その耳はコスプレなんですか？」

アルフ「これは「アルフ」コスプレって奴だよ…」

最愛「海鳴ではコスプレが流行ってるんですかねえ…」

絹旗最愛が昼に出会った高町なのはの姿といい、アルフの犬耳とい  
い事情を知らない人から見ればコスプレをしている様にしか見えな  
いだろつ。

当麻「出来たよ」



彼女達が話している内に料理が完成したらしく、お皿を並べる。

「「「「いただきます!」「」「」

当麻の手料理を始めて食べた最愛は…

最愛「超美味しいですねこれ!」

当麻「ありがとう」

アルフ「ハヤテの料理も美味いけど、トウマの料理も美味いよ」

フェイト「私もそう思うよ」

彼女達に褒められて少年は、照れながら頭を掻く。

凄まじい速度でご飯を食べる最愛とアルフ。

その豪快な食べっぷりを見て、若干顔が引き攣る当麻とフェイト。

「「「「ご馳走様でした!」「」「」

夕食を食べ終わり、食器を片付ける一同。

そんな中、上条当麻は絹旗最愛が寝る場所について考えていた。

当麻「（絹旗さんはベッドでいいのかな?）」

食器の片づけを終えた上条当麻。

フェイト「おやすみなさい当麻」

アルフ「また明日ね」

隣の部屋に帰ろうとするフェイトとアルフ。

最愛「何処に行くんですか？」

フェイト「何処って…部屋に帰るんだけど…」

予想外の言葉に軽く動揺しながらも答えるフェイト。

最愛「この部屋で暮らしてたんじゃないんですか？」

アルフ「違うよ。アタシとフェイトは隣の部屋」

最愛「行っちゃうんですか？」ウルウル

「」「」「」

謎の罪悪感が湧き上がる三人。

当麻「でも…一緒に寝るわけには…」

アルフ「そっだよ…いくらなんでも…」

フェイト「一緒に…あう…／／／」

最愛「どうしても駄目なんですか？」

どうしたらいいか分からずうつろたえる三人だったが、アルフが溜息をついて絹旗に話す。

アルフ「いや…そもそもあのベッドじゃ四人は寝れないでしょ…」

最愛「だったら隣の部屋から持ってくればいいんじゃないですか？」

どうしても譲らないつもりなのかアルフの言葉を否定する最愛。

三人はお互いの顔を見て、覚悟を決めた。

アルフ「はあ…分かったよ…」

一旦隣の部屋に帰ってベッドを持ってくるアルフ。

少女が持てる重量ではなかったのだが、アルフはベッドを簡単に運んだ。

最愛「見た目によらず超怪力なんですね！」

アルフ「『超』は余計だよ…」

少年のベッドの隣にベッドを置くアルフ。

体を洗っていないことに気付いた一同は、一旦部屋に帰って体を洗うことに決めた。

ちなみに、最愛はフェイトとアルフと一緒にだった。

身体を洗い終えた少女達は、ベッドに向かう。

最愛「それじゃあ寝ますか！」

ベッドにダイブする最愛と彼女に続いてダイブするアルフ。

そんな二人の様子を見ていた上条当麻とフェイト・テストアロッサ。

当麻「ねえ…やっぱり僕は風呂場で寝てもいいかな？」

フェイト&最愛「(超)だめ(です)!!」

フェイトと最愛に否定されて頂垂れる少年。  
アルフはそんな少年を見て笑っていた。

アルフ「諦めなよトウマ」「ニヤニヤ

当麻「…はあ…」

ベッドに入る四人。

右からアルフ、フェイト、最愛、当麻となっていた。

最愛「おやすみなさい!」

アルフ「おやすみ」

当麻「おやすみなさい…」

フェイト「おやすみ…」

ぐっすり眠るアルフと最愛。

しかし、当麻とフェイトは…

当麻&フェイト「(眠れない…)」

全く眠ることが出来なかった。

翌日、最愛とアルフが目を覚ます。

ベッドの上には…

アルフ「いや〜良く寝た〜」

最愛「すつきりです」

リフレッシュしたアルフと最愛と…

当麻&フェイト「良かったね…」

目の下に隈の出来た当麻とフェイトが居た。

朝食を作り終えて、全員でご飯を食べる一同。

小学校に行く少年を見送る少女達。

授業を終えて、自宅に向かう途中の少年は八神はやてに出会った。  
少女と話しながら移動する少年。

当麻「それでね…」

はやて「そうなんか…」

取り留めの無い会話を交わす二人だったが、二人はATMの前に頭を抱える少女を見つける。

当麻「どうしたんだろう?」

はやて「分からんけど…何か困つとるみたいやな…」

二人は頭を抱える少女の下へ近づいていった。

神裂「どうして…こんなことに…」

必要悪の協会に所属することになった神裂火織。

彼女は土御門元春から、ATMでお金を引き落として来いと言われてカードを渡された。

しかし、極度の機械音痴である彼女にとっては、これは試練に等しかった。

ATMの使い方が分からず、最終手段を取るべきか考えていた彼女の下に少年と少女が声を掛けた。

当麻「あの…」

はやて「大丈夫ですか？」

神裂「え？」

動揺する彼女に、何があつたのかと尋ねる二人。

ATMの使い方が分からないと話す神裂。

二人にATMの使い方を説明されて、何とかお金を引き出すことが出来た。

神裂「なんとお礼を言ったらいいか…」

当麻「気にしないで下さい」

はやて「困った時はお互い様や」

神裂「ありがとうございます」

二人に一礼して、その場から立ち去ろうとする少女だったが…

グ~~~~!!

当麻&はやて「あ…」

神裂「／／／」カァ

少女のお腹の音が周囲に響き渡る。  
顔を真っ赤にする少女。

神裂「も…申し訳ありませんが…この近くに定食屋はありませんか？／／／」

当麻「定食屋は無いですけど…」

はやて「ファミレスなら…」

ファミレスという言葉に聞き覚えが無い少女だったが、二人に強引に案内される。

二人は少女をファミレスの前まで連れてきた後、その場から立ち去ろうとしたが、少女に引き止められる。

何かと世話になった二人にご飯を奢ろうとする少女の申し出を断る二人だったが、そのまま強引にファミレスの中にまで連れて行かれた。

運ばれてきた料理を食べながら、色々なことを話す三人。

ご飯を奢ってくれた少女に、屈託の無い笑顔で感謝する二人。

神裂「私は…人に感謝される様な人間では…ありません…！」

一瞬で雰囲気が変わった少女に動揺しながら、その理由を聞く三人。  
神裂火織は自身の幸運体質について語り始めた。

はやて「よく分かんけど…神裂さんがおみくじ引いたら大吉で、

周りの人がおみくじ引くと大凶が出るってことなんか？」

神裂「大体その様なものです」

当麻「そんなことって…」

神裂「私は『幸運』によって周りの人を『不幸』にしているんですよ…」

自嘲気味に話す少女の姿を見る上条当麻。

強すぎる『幸運』によって『不幸』になってしまった少女。生まれつきの『不幸』によって苦しみ続けた少年。

境遇こそ違えど『不幸』に苛まれる二人。

自身が『不幸』だからこそ、他人の『不幸』を望まない少年。

そんな少年にとって、少女の苦しみは耐えがたいものだと感じた。しかし、八神はやての反応は…

はやて「それは…間違つとるんやないか？」

当麻& a m p ;神裂「間違つてる？」

はやて「それって神裂さんが他人を不幸って決めつけとるだけじゃないんか？」

神裂「しかし…!」

はやて「『幸運』か『不幸』かを決めるのはあくまで本人や、他人が決める様なもんやあらへん」

当麻「…」



はやて「もし、神裂さんが周りの人を『不幸』にしとるって考えたら、それはただの『幻想』や」

神裂「幻想…ですか？」

はやて「せや。『幻想』は『現実』やあらへん」

当麻「幻想…」

はやて「せやから、神裂さんはあんま思い詰めんようにな」二コ

神裂「ありがとうございます…」

食事を終えて、二人は神裂火織と分かれた。

八神はやてと別れた上条当麻は、先程の彼女の言葉を思い出していた。

当麻「（『幸運』か『不幸』かを決めていいのは自分自身…）」

例え、傍から見たら『不幸』な人間が居ても、本人は『幸運』と感じているのかも知れない。

当麻「幻想か…」

なのは「上条君？」

当麻「た…高町さん？」

なのは「そうだけど…」

ユーノ「何か言っていたみたいだけど…」

当麻「気にしないで…それより、高町さんは何をしてるの？」

帰宅途中といえはそれだけなのだが、高町なのははランドセルを背負っていなかった。

なのは「ジュエルシードを探してるんだけど…」

当麻「僕も手伝うよ」

なのは「いいの？」

当麻「うん」

当麻の申し出を受けるなのは。

嬉しそうな表情を見せる高町なのは。

ユーノ・スクライアも嬉しそうだった。

二人を巻き込んでしまったことに罪悪感を感じているが、なのはの負担を和らげることが出来ることに安堵していた。

## 第14話 二人の魔法少女

『私立聖祥大附属小学校』

いつも通り五人で昼食を食べていた一同。  
そこで月村すずかが上条当麻に声を掛ける。

すずか「あの…上条君…」

当麻「どうしたの月村さん？」

すずか「明後日は空いてる？」

当麻「ごめん。その日はちょっと…」

すずか「う…ううん！気にしないで」

少しばかり残念がっているすずかだったが、少年にも事情があることを察する。

その日は、月村すずかの自宅にて高町なのはとアリサ・バニングス、浜面仕上が集まる予定だった。

内容は月村邸で行われる定期的なお茶会といったものだった。少年が少女に誘われた日は、フェイトのジュエルシードの搜索に付き合つと決めてある日だった。

授業が終わっていつもの様に帰る一同。

浜面仕上は、なのは達と別れた後、自宅に向けて歩いていく。

仕上「ううん…」

ここの所悩んでばかりいる少年。  
その理由は、少し前に出会った滝壺理后という少女。  
一日遊んだだけなのに、少年は少女のことを一日も忘れられなかつた。

仕上「学園都市かあ…」

最愛「何をボソボソ呟いているんですか？」

仕上「うおわあ！！」

最愛「ちょ…いきなり大声出さないで下さいよ！！！」

仕上「いきなり話し掛けられたらビックリするに決まってるだろ！！！」

最愛「何ですかその言い草は！！せっかく人が超心配してあげたのに！！！」

仕上「誰も心配してくれなんて言ってねーだろ！！！」

下を向いて呟いている浜面仕上を心配した絹旗最愛が声を掛けたのだが、余計な心配だったようだ。

最愛「恩を仇で返すボサボサ頭にはご飯を奢ってもらいます！！！」

仕上「何でそうなるんだよ！！つーかボサボサ頭って言うな！！！」

最愛「どう見てもボサボサ頭じゃないですか！！！」

仕上「この野郎…」

最愛「そんなことは超どうでもいいですから、とっとと行きますよ」

近場のファミレスに強制的に連行される浜面仕上。

少女が年下ということもあり、ここは自分が大人になるべきだと言  
い聞かせる少年だったが…

最愛「え〜っと…これとこれとこれ…お願いします」

仕上「ちょっと頼みすぎじゃねえか？」

最愛「そんなことはありません」

仕上「今月の小遣いが…」

財布の中を見て項垂れる少年。

凄まじい速度で頼んだ料理を食べる絹旗最愛。  
その食べっぷりを見た少年は…

仕上「太るぞ？」

最愛「ッ！…ごほ…」

少年の言葉でむせる少女。

仕上「お…おい…大丈夫か？」

最愛「乙女に何てこと言うんですか…！」

バキ！！

仕上「へぶあ！！！」

少女の拳が少年の顔面に直撃する。

仕上「いてえ……」

涙目になっている少年と料理を食べ進める少女。

最愛「ご馳走様でした！！！」

仕上「…はあ…」

最愛「どうしたんですか？溜息なんかついて…」

仕上「誰のせいだと思ってんだよ…」

最愛「小さいことを気にしてはいけませんよ。ボサボサ頭」

仕上「だから俺はボサボサ頭じゃねえって…浜面仕上だよ」

最愛「浜面ですか…私は絹旗最愛です」

仕上「そっか」

最愛「そっけない反応ですね。超美少女である私の名前を知れただけでも幸せでしょう？」

仕上「自分で美少女って言うなよ…」

ファミレスを出る二人。

最愛「ご飯を奢ってもらってありがとございました」

仕上「殆どカツアゲだったじゃねえか…」

最愛「さよなら」

手を振って仕上に挨拶する最愛。

少女の姿が見えなくなって、財布の中を確認する少年。  
案の定、財布の中は空っぽになっていた。

仕上「…チクショウ…」

『月村邸』

翌日、浜面仕上と高町なのは、アリサ・バニングスが月村邸を訪れていた。

ちなみに、なのはの兄である高町恭也も付き添いで来ていた。

仕上「相変わらずでけえな…」

なのは「そうだね…」

アリサ「そうかしら？」

浜面仕上も何回か月村邸を訪れたことがあるのだが、それでもこの大きさには慣れていなかった。  
紅茶を飲んで雑談する一同。

少女達が雑談している頃、浜面仕上とユーノ・スクライアは…

バリバリバリ！！

仕上「ぎゃあああ！！」

ユーノ「キューー！！」

仕上は猫に顔面を引っ搔かれていて、ユーノは猫に追い掛け回されていた。

アリス「浜面は猫に嫌われてるのかしらねえ…」

すずか「は…浜面君…大丈夫？」

仕上「これが大丈夫に見えますかあ！？」

なのは「にゃはは…」

仕上「笑ってないで助けてくれえ！」

ユーノ「（…な…なのは…僕も助け…）」

なのは「（ユーノ君！？）」

高町なのはに念話で助けを求めるユーノ・スクライア。

すずかの飼い猫に襲われる仕上とユーノを助け出した少女達。

普段から非常に大人しく、人を襲うような事などしないはずの猫が少年を襲う理由は不明だった。



仕上「上条も来ればよかつたんだけどな…」

なのは「仕方ないよ…」

すずか「上条君は一人暮らしだし…」

アリサ「だけどさあ…」

仕上「そつだ！今度俺達で上条の家に遊びに行こうぜ！」

アリサ「上条の家に？」

すずか「で…でも…上条君に聞かなくてもいいのかな？」

仕上「いいんじゃないの？あいつも色々大変そうだから、俺達で何か手伝ってやろうぜ」

なのは「上条君を手伝う…」

アリサ「いいわねそれ！浜面のくせに良い事言っじゃない」

仕上「うるせえ…」

なのは「（上条君…喜んでくれるかな？）」

ピクッ！

ユーノ「（なのは…！）」

なのは「（これって…）」

ユーノ「（ジュエルシードの反応がある！それも近くに！）」

ジュエルシードの反応を察知したなのはとユーノ。  
突然その場から逃げ出したユーノ。

なのは「あ、ユーノ君！」

アリサ「なのは！私達も！」

なのは「大丈夫！すぐ連れ戻して来るから！」

そんな少女を、浜面仕上とアリサ・バニングス、月村すずかは心配そうに見守るのだった。

一方その頃、上条当麻とフェイト・テストアロッサとアルフはジュエルシードの反応を察知して、月村邸の庭の中と思われる森に来ていた。

この屋敷が上条当麻のクラスメートである月村すずかの自宅であることは、少年が知る良しもない。

当麻「広いね……」

アルフ「確かに……」

フェイト「ここにジュエルシードが……」

森の中に侵入する三人。

森の中を歩き始めて、少し経ってからフェイトは何か気付く。

フェイト「結界が張られてる…」

当麻「結界？」

アルフ「結界っていうのは…」

結界についての簡単な説明を少年にするアルフ。

ズシン！！

当麻「な…何！？」

フェイト「何か来る！」

アルフ「くっ…」

すぐさま臨戦態勢を取る三人。

警戒する三人の前に現われたのは…

ニヤ〜！

「「「はあ？」「」「」

巨大化した猫だった。

当麻「これって…」

フェイト「やっぱり…」

アルフ「猫…だよな…」

明らかに普通ではない大きさの猫。

当麻「これも…ジュエルシードの影響なの？」

フェイト「多分…」

アルフ「何か力が抜けちゃったよ…」

呆然としていた三人の下に、巨大化した猫が近づく。

巨大化した事に気付いていないのか、呑気な声を上げながら少年の下に近づいて…

ベロン！

少年の顔を舐めた。

巨大化している為、舌の大きさも普通の猫とは比べ物にならないのだが…

フェイト「この子…当麻に懐いている？」

当麻「あれ？この子って…」

少年は巨大化している猫の姿を注意深く見る。

当麻「あの時の…」

アルフ「知っているのかいとうま？」

当麻「うん」

少年の顔を舐めた猫は以前、月村すずかが探していた猫であり、少年が海鳴市に来て初めて出会った猫だった。

当麻「僕の右手でどうにか出来ないかな？」

フェイト「それは分からないけど…」

アルフ「やってみる価値はあるんじゃない？」

少年は猫の身体に右手を近づけていたが、その動きは途中で中断されることになる。

フェイト「ッ！！」

即座に後方に向けて『バルディッシュ』を構えるフェイト。

フェイトに続き、臨戦態勢を取るアルフ。

少年も二人に続いて後ろを見る。

そこには…

なのは「…上…条君…？」

当麻「高…町…さん？」

高町なのはが居た。

予想外の人物に出会ったことに動揺する二人。

フェイト「同型の魔導師…ロストロギアの探索者…」

少女の言葉を聞いたユーノ・スクライアは…

ユーノ「(彼女は...)」

目の前の金髪の少女は自分と同じ世界からやって来た人物で、ジュエルシードの正体に気付いているということに気付く。

フェイト「ロストロギア…ジュエルシード」

『Scythe Form Set up』

そう呟いたフェイトは専用のデバイスである『バルディッシュ』を戦斧から鎌の形状に変化させる。

フェイト「悪いけど…頂いていきます…」

一気に高町なのはに近づき、斬りかかるフェイト・テストロッサ。この場の上条当麻が居るといふ事に動揺しているのはだったが…

『Evasion, Flier Finn』

少女の足にピンク色の羽根みたいなものが生えて、フェイトに斬りつけられる前に空中へ移動した。

二人の戦いを眺める事しか出来ない上条当麻とアルフ、ユーノ・スクライアの三人。

ユーノ「どうして!?!」

当麻に向かって叫ぶユーノ。

上条当麻にはジュエルシードの危険性について全て話した。

その上で、彼は自分に協力してくれると言った。

少年はジュエルシードの暴走によって巻き込まれた少年と少女を助ける為に全力で戦った。

そんな上条当麻がどうして他の魔導師と一緒に居るのかユーノにはどうしても分からなかった。

その頃、高町なのはとフェイト・テスタロッサは未だに戦い続けていた。

徐々に追い込まれていく高町なのは。

なのは「どうして…こんな…」

フェイト「答えても多分…意味はない」

お互いに距離を取る二人。

『Device Mode』

鎌から斧の形状に変化した『バルディッシュ』

『Shooting Mode』

射撃に特化した形に変化した『レイジングハート』

『Divine Buster Stand By』

『Photon Lancer Get Set』

お互いを攻撃するための準備が終了する二人  
そんな中でも、なのはの心を支配していたのは先程の出来事だった。

なのは「（どうして上条君が…それにこの子は一体…）」

突然の事態に混乱する精神を無理やり落ち着かせる。

お互いの必殺の一撃が放たれようとした瞬間…

ニヤ〜！！

巨大化した猫の声がその場に響き渡った。

それこそが、高町なのはにとって命取りとなった。

フェイト「…ごめんね…」

『Fire』

『バルディッシュ』から放たれる金色の光線。

『Protection』

金色の光線が直撃する前に『Protection』を発動するなのはだったが、全てを防ぎ切れず、少女の身体は宙を舞った。

ユ一ノ「な、なのは！！！」

意識を失い墜落するなのは。

このまま地面に激突するかと思われたが…

当麻「おおおおお！！！」

高町なのはの落下地点まで駆け出した上条当麻。

なのはを受け止める事に成功する当麻。



所々傷を負っている少女の姿を見て、心を痛める少年。  
少年の下に降りてきたフェイト。

フェイト「当麻…」

当麻「ごめんフェイト…ちょっと待って…」

そう言っただけ少年は絆創膏を取り出し、怪我をしている箇所を貼った。

当麻「ごめんね…」

高町なのはを木の根元まで運んだ上条当麻は、巨大化した猫の下まで近づき右手で触る。

バキン！！

猫の身体からジュエルシードが出現する。

『Capture』

ジュエルシードを封印するフェイト。

その場から立ち去る三人。

去り際にもう一度なのはとユーノの方を向いた少年は…

当麻「…ごめんなさい…」

その少年の姿を見たユーノは…

ユーノ「一体何が起きているんだ…」

ただ呆然としていた。

## 第15話 それぞれの戦う理由

『月村邸』

フェイト・テスタロッサと高町なのはの戦いから少し経って、少女は心配して探しに来た一同に発見された。

アリサ「なのはは!?!」

仕上「高町!?!」

すずか「大丈夫!?!」

なのは「…う…」

忍「ノエル!!ファリン!!」

「はい!?!」

月村すずかの姉である月村忍が、月村家の専属メイドであるノエルとファリンに声を掛ける。

高町なのはを月村邸に運ぶ二人。

恭也「くそ!?!」

高町なのはの兄である高町恭也は、自分の妹が怪我をしていることに気付けなかった自分を責めていた。

なのは「う…ん…」

アリサ「なのは!」

すずか「なのはちゃん!」

仕上「気がついたか?」

なのは「あれ…私…」

アリサ「庭の森の中で倒れていたのよ」

なのは「そう…(やっぱり…あれは…夢じゃない…)」

自分と同じ魔法の力を使う金髪の少女とクラスメートである上条当麻と出会ったことを思い出す少女。

仕上「一体何があったんだ?」

なのは「え…つと…」

先程の出来事を正直に話すわけにはいかない少女。

恭也「なのははまだ起きたばかりだから休ませてやってくれ」

仕上「それもそっか…」

目覚めたばかりの少女に、質問攻めにするのは良くないと判断した恭也が一同に告げる。

忍「ごめんなさい」

なのはに謝罪の言葉を述べる月村忍。

恭也「忍は悪くない」

彼の言う通り、敷地内で事件に巻き込まれるなど予想が出来る筈もない。

なのは「そうですよ。勝手に抜け出した私の責任ですから…」

申し訳なさそうな顔でなのはは、一同に勝手に抜け出したことを謝った。

仕上「とにかく。大したことなさそうでしたぜ…」

それから少し後、早めに帰宅した一同。

なのはは恭也におぶられて、自宅に帰った。

『高町家』

恭也から何があったのか説明を受けた家族はなのはを心配したが、少女は心配ないと話してその場を乗り切った。

自分の部屋に移動した高町なのはとユーノ・スクライア。

ユーノ「なのは…大丈夫かい？」

なのは「うん…思ったより怪我はしてなかったから…」

ユーノ「良かった…」

なのは「でも…高いところから落ちたのに…」

金髪の少女の一撃を受けて、気絶した少女は地面に墜落した筈だ。それなのに、それほど身体は痛くない。

ユーノ「当麻君がなのはを受け止めたから…」

なのは「上条君が？」

ユーノ「うん…なのはが怪我した頬に絆創膏を貼っていたし…」

そう言われた少女は、自分の頬を触る。

なのは「そうだったんだ…」

ユーノ「ジュエルシードを回収した後に、ごめんなさいって言うってたんだ…」

なのは「…」

上条当麻の一連の行動をユーノから聞いた少女は…

なのは「上条君…一体何が…」

ユーノ「それは分からないけど…」

少年の真意が分からない以上、これ以上考えても無駄であると結論を出す二人。

なのは「あの女の子は…」

ユーノ「恐らく…あの子は僕が居た世界の人間だ…」

なのは「ユーノ君と同じ世界？」

ユーノ「うん…だからジュエルシードの危険性は知っている筈なんだけど…」

金髪の少女がジュエルシードを集める目的など、全く見当の付かない二人。

なのは「（あの子…最後に…謝っていた…）」

なのはが思い起こすのは、金髪の少女が一撃を放つ前に告げた一言。あの少女が情け容赦の無い人間だったなら、高町なのははこの程度の怪我では済んでいない。

なのは「（それに…）」

上条当麻が金髪の少女と一緒に行動していた理由も分からない。

短い間ながら、上条当麻の性質を理解していた少女。

誰よりも他人の不幸を望まず、不幸に巻き込まれている人間がいるならば、全力で助けようとする少年。

そんな彼が、ジュエルシードの悪用を考えている人間と一緒に行動する筈がない。

幸い明日は小学校がある為、少女の目的について少年に尋ねる事が出来る。

上条当麻が学校に来るかどうかは別として…

色々な問題が起きているが、ベッドに入って眠りにつく高町なのはだった。

『マンション』

フェイト「…そう…だったんだ…」

アルフ「トウマのクラスメート…ねえ…」

当麻「うん…」

上条当麻の部屋で今日の出来事について話していた三人。  
絹旗最愛は深い眠りについていた。

今日戦った魔導師は当麻のクラスメートであることを聞いたフェイト。

そのことを聞いた少女は少しばかり動揺していたが…

フェイト「それでも…私は…ジュエルシードを集めなくちゃいけない…」

アルフ「分かってるよフェイト」

当麻「…うん…」

フェイト・テストロッサがジュエルシードを集める目的を知っている少年は、彼女の決意を否定出来なかった。

しかし、高町なのはとフェイト・テストロッサが傷付け合うことを望まない少年にとって、現在の状況は非常に好ましくなかった。  
部屋に戻るフェイトとアルフ。

少年も明日に向けてベッドに入る。

具体的な解決策も見つからないまま、上条当麻は眠りについた。



『?????』

大量の死体が転がっている中央に小学校低学年位の少女が立っていた。

彼女の身体には夥しい量の血液が付着しており、彼女の周囲に転がっている死体には、鉄の棒の様な物体が突き刺さっている物や綺麗に切断された物が散乱としていた。

幼い頃から『実験』と称して、人間を殺すことを強要されてきた少女。

その少女にとって、人を殺すという行為は何も珍しいというわけではない。

ある日、少女はとある少年の『実験』を見学させられていた。

白髪の少年に向かって、容赦なく発射される銃弾。

しかし、銃弾は少年の身体ではなく、銃弾を放った男達の身体を貫いていた。

白髪の少年と目が合った少女。

お互いに興味など全く無かったらしく直ぐに目を逸らした。

次の日、白髪の少年の『実験』が再び行われるということで見学することになった少女。

『実験』の内容は昨日のように男達が少年に向けて、銃弾を放つというものではなく…

『実験』の会場にあった物は、大量の戦車や戦闘機など、一人の人間に対してあまりにも過剰すぎる戦力だった。

少年に向けて行われる一斉射撃。

肉片すらも残りそうに無い破壊の暴風が吹き荒れる。

しかし、攻撃が止んだ場所には無傷の少年が何事も無かったかの様に立っていた。

圧倒的な力を奮う少年。

その姿は正しく『化け物』と呼ぶに相応しかった。

少年の『実験』が終了して数日後、少女が居る研究所に一人の少女

が入って来た。

どうやらその少女は『置き去り』らしく、自分の様に『闇』に浸かっているわけではなかった。

積極的に話しかけてくる少女に、今まで出会ったタイプの人間ではないと実感する少女。

その少女は、命は何よりも大切だと常々少女に語った。

あまりにも多くの生命を奪ってきた少女に、その言葉は酷く滑稽に思えた。

最初は鬱陶しいだけだと考えていた少女だったが、いつの間にかその少女と一緒に居る時間に温もりを感じていた。

今まで生きてきた中で感じたことも無い様な感情。

その感情の正体が分からない少女だったが、その時間が何時までも続いて欲しいと思っていた。

しかし…

ある日、温もりを覚えてくれた少女が『実験』に参加するという話を聞いた。

急いで『実験』の会場に向かう少女。

そこで彼女が見たものは…

血塗れになって倒れている少女だった…

????「…ちゃん…私…死にたく…もっと…ちゃんと…一緒に…」

口から流れ続ける血で、必死に話す少女。

そして…

少女は動かなくなった…

????「ッ!!」

海鳴のマンションで少女は目を覚ます。

????「また…あの夢…か…」

少女は自分でも気付かない内に、目から大粒の涙を流していた。

『私立聖祥大附属小学校』

授業が終了していつも通り帰ろうとする一同。

しかし、今日はいつもと異なっている点があった。

アリサ「なのはー帰るわよー!」

なのは「ごめんアリサちゃん。今日はちょっと…」

アリサ「分かったわよ」

そう言っつて浜面仕上と月村すずか、アリサ・バニングスは教室を出て行った。

上条当麻も彼等が続くように帰ろうとしたが…

なのは「上条君…ちょっといいかな…?」

当麻「…うん」

少年も少女が言いたい事を理解していたのかその言葉を聞いて軽く

頷く。

屋上に向かう高町なのはと上条当麻。  
屋上に到着した二人。

当麻「怪我は大丈夫？」

なのは「うん…上条君が助けてくれたんだよね？」

当麻「…」

なのはの問いに当麻は答えない。

ユ一ノ「どうして君はあの子と一緒にいたんだい？」

当麻「それは…」

言葉に詰まる少年。

なのは「上条君はあの子がジュエルシードを集める目的を知っているの？」

当麻「…うん…」

ユ一ノ「それは…？」

当麻「ごめん…言えない…」

なのは「…上条君…」

少年の言葉を聞いた少女はそれ以上何も言えなくなる。

上条当麻は屋上の入り口まで戻って…

当麻「ごめん…高町さん…ユーノ君…」

少年はそのまま二人の前から立ち去って行った。

## 第16話 海鳴温泉

『私立聖祥大附属小学校』

高町なのはとフェイト・テスタロッサとの出会いから数日後、昼休  
憩の小学校にて…

当麻「温泉？」

仕上「ああ、毎年この時期に高町の親が連れてってくれるんだよ」

当麻「そうなの？」

アリサ「そうよ」

すずか「海鳴市の名物の一つとして温泉があるから」

当麻「なるほど」

仕上「だからさ〜お前も来ないか？」

当麻「ごめん。その日も用事が…」

仕上「またそれかよ〜」

すずか「上条君だって用事があるから…」

なのは「…」

上条当麻の用事とはジュエルシードの搜索なのだろうと推測する高町なのは。

当麻「本当にごめんね…」

アリサ「何か困ったことがあるなら相談しなさいよ？友達なんだから」

当麻「ありがとう…皆…」

自分の事を気に掛けてくれるメンバーに感謝すると同時に、ジュエルシードの被害から守ってみせると堅く誓う上条当麻。

仕上「この前も用事があつたらしいけど、お前の用事って何なんだよ？」

当麻「それはちょっと…」

すずか「言えない事もあるんじゃないかな？」

仕上「そういうもんか？」

アリサ「そういうものよ」

高町なのは達が温泉に向かうと話した日に、上条当麻も海鳴市の温泉に用事があつた。

しかし、彼は温泉に行つてリフレッシュすることが目的ではない。授業が終了して帰路につく一同。

本日は、高町なのはとアリサ・バニングスと月村すずかの三人は塾があるらしく、そのまま別れた。

浜面仕上も今日は家庭の用事があるらしく、そのまま別れて上条当麻は一人マンションに向けて帰ろうとしたが…

当麻「（久しぶりに図書館にでも行こうかな…）」

海鳴市に来てから殆ど時間の取れなかった少年は、久々に図書館に向かった。

八神はやての言葉通り、図書館には彼女が居た。

当麻に気付いたはやては無言で手を振る。

少女が座っている場所まで移動する少年。

はやて「図書館で会うのは久しぶりやね」

当麻「このところ色々忙しかったからね」

はやて「まあ…上条君は海鳴に来たばかりやからな」

少年が多忙な原因は、ジュエルシード絡みであるのだが…

少年も借りてきた本を読み進める。

そこで、八神はやてが…

はやて「上条君…いきなりやけど…明後日は空いとる？」

当麻「どうしたの？」

はやて「いや…その…上条君はまだうちの料理…食べてないやろ？」

フェイトとアルフには手料理をご馳走したはやてだったが、少年は少女の料理を食べたことが無い。



当麻「その日は…ごめん…用事があるんだ…」

はやて「そっか…なら仕方ないね…」

少しばかり寂しそうな表情を見せる八神はやて。

そんな彼女の表情を見逃さなかった上条当麻は…

当麻「八神さんは…明後日は空いてる？」

はやて「え…？う…うん…」

当麻「明後日は用事があるって言ってたけど、友達と温泉に行くんだ。その…八神さんも来ない？」

はやて「…温泉？」

突然の申し出に動揺する少女。

はやて「で…でも…」

当麻「大丈夫だよ。一緒に行くのはフェイトとアルフと…一緒に暮らしている友達が一人だから…」

ピク…!!

一緒に暮らしている友達という言葉に反応する八神はやて。

はやて「一緒に暮らしてる友達って…女の子か？」

少しばかり黒いオーラを放つ少女。

当麻「そうだけど…優しい子だから直ぐに仲良くなれるよ」

はやて「…全く…」

当麻「どうしたの？」

はやて「何でもないで…」

当麻「八神さんも一緒に来ない？」

はやて「…うん」

少女の了承を得た少年は一旦図書館から出て携帯電話を使い、フェイト・テストアロッサに連絡を取る。

通話を終えて、再び八神はやてが居る場所に戻る上条当麻。

当麻「それじゃあ明後日に迎えに行くから」

はやて「うん」

八神はやてと別れた上条当麻はマンションに帰って行った。

翌日、海鳴市の温泉に向かうメンバーは、高町家一同と月村家+メイド一同、浜面仕上、アリサ・バニングスとなっていた。

テンションの上がつている仕上と彼を落ち着かせるアリサとすずか。高町なのははユーノ・スクライアと念話をしていた。

なのは「（あの子は何でジュエルシードを集めているんだろう？）」

ユーノ「それは分からないけど…当麻君の態度を見る限り…僕達の目的とは確実に違っただろうね…」

なのは「…うん…」

もし、あの金髪の女の子がユーノと同じ目的を持って行動しているのならば、敵対する理由が無い。

相手がこちらがジュエルシードを悪用すると考えても、上条当麻が誤解を解く筈だからだ。

なのは「（上条君があの子のジュエルシードの搜索に協力する理由…）」

ユーノ「（こればかりは本人が話してくれるのを待つしかないだろうね…）」

高町なのはとユーノ・スクライアがそのことについて深く考え込んでいる内に、温泉に到着した面々。

早速、温泉を堪能するために行動する一同。

大浴場に向かった浜面仕上と高町士郎と高町恭也。

温泉を堪能する男性陣。

仕上は高町士郎の身体を見て…

仕上「相変わらずおっちゃんの身体はすごいな〜」

士郎「…おっちゃんって…」

軽くショックを受ける高町士郎。

浜面仕上が声を上げたのは、筋肉隆々とした肉体ではなく、その身

体に刻まれた多くの傷を見たからだだった。

翠屋のマスターをする以前の高町四郎は、ボディガードとして世界中を飛び回っており、多くの傷を負っていたからだ。大浴場で動き回る少年を見て呆れた高町恭也。

恭也「そんなに動き回るとこけるぞ」

警告する恭也の言葉を聞いた仕上は、彼の方を向いて…

仕上「そっぴゃ月村のねーちゃんとはどうなったんだ？」

恭也「！？…ごぼっ…」

予想外の質問にむせる高町恭也。

仕上「付き合ってたんだろ？」

恭也「何をいきなり…」

仕上「あれで付き合ってたわけねーだ「根性おお！！」…」

「…何だ！？」「」

突如、大浴場に響き渡った大声に呆然とする男性陣だった。男性陣が温泉を出てから、女性陣が後に続いた。

アリス「ユ一ノも一緒に入ろうね」

ユ一ノ「キューー！！」

全力でその場から逃げ出そうとするユーノだったが、この場に居る全員から逃げ切ることなど不可能。

ユーノ「（助けてなのは〜）」

なのは「（大丈夫だよユーノ君）」

ユーノ「（大丈夫じゃないよ〜!）」

そのまま女性陣に連れられて行かれそうになっていたユーノ・スクライアだったが…

『根性だあああ!』』

突如聞こえてきた絶叫に気を取られた女性陣の間隙をついてその場から逃げ出すユーノ。

すずか「あ!ユーノ君が!」

なのは「ユーノ君!」

アリサ「何なのよ一体…!」

突然の出来事に呆然としていた女性陣だった。

それから一時間が経ち、フェイト・テストアロッサ御一行も温泉に着した。

高町なのは達がリラックスで訪れた温泉と、ジュエルシードを封印するために訪れた温泉が同じ場所であるなど少年が気付く筈もなかった。

初めての温泉に胸を躍らせる一同。  
参加メンバーは、上条当麻にフェイト・テストロッサ、八神はやてと絹旗最愛、アルフとなっていた。  
この中で温泉に入ったことがあるのは、八神はやてだけだった。  
温泉に到着した一同は、まず割り当てられている部屋に向かった。  
彼女達が泊まる部屋は一室だけで、四人の女の子に囲まれて寝ることが決定している上条当麻だった。  
部屋に到着した一同。  
先に風呂に入ってくればいいとフェイト達に促される上条当麻。  
その言葉に甘えて温泉に入る少年。

当麻「…ふう…」

生まれて初めての温泉を堪能する少年。

ポコポコ！

当麻「ん？」

少し離れた場所で、泡が発生している場所を見つける少年。  
その正体が気になった当麻は徐々に近付いていく。

ドパアアン！！

当麻「うわあああ！！！」

泡があつた場所から黒髪の少年が勢い良く出てくる。

????「よし…これで三十分だ…」

当麻「あ…あ…」

腰の抜けた上条当麻を見た少年は…

???「何だお前？立てないのか？根性の無い奴だな…」

と呟いていた。

少し時間が経って落ち着きを取り戻した上条当麻。

当麻「君は？」

軍覇「俺の名前は削板軍覇だ!!」

力強く名乗る少年。

当麻「僕は上条当麻」

軍覇「上条か…中々根性ある髪型してるじゃねえか！」

ツンツン頭を褒められてどう対応すればいいのか全く分からない少年。

軍覇「それじゃあな!!」

凄まじい速度でその場から去って行った削板軍覇。  
残された上条当麻は空いた口が塞がらなかった。

上条当麻が部屋に戻り、温泉に向かうフェイト達。  
部屋に戻った時の少年の様子が少しばかりおかしかったが、特に気にしないことにした。

早速、温泉に入るフェイト達。

八神はやては足が不自由というハンデがあるのだが、その問題は三人がカバーすることによりクリアすることが出来た。  
初めての温泉を堪能する少女達。

最愛「超極楽です……」

アルフ「サイコーだね……」

フェイト「気持ちいい……」

はやて「懐かしいな……」

何かと忙しいフェイトやアルフにとって、この時間は至福の時となっていた。



## 第17話 セカンド・エンカウント

浴衣に着替えて旅館内を歩き回っていた高町なのはとアリサ・バニングス、月村すずかと浜面仕上。

旅館の中を見回っていた途中で、すずかがなのはに声を掛ける。

すずか「なのはちゃん。大丈夫？」

なのは「え？」

すずか「ここ最近、何だか疲れてるようだったから…」

なのは「大丈夫だよ」

アリサ「上条にも言ったけど、何か困ったことがあるなら相談しなさいよ。友達なんだから…」

仕上「あんまり無理すんなよ？」

なのは「皆…ありがとう…」

少女の悩みの原因を話すわけにはいかないが、自分を心配してくれる人々の言葉を聞いて、少しばかり気が楽になる高町なのはだった。

ユーノ「（なのは…せっかくの休みなんだから…ちゃんと休みなよ）」

なのは「（ありがとうユーノ君）」

なのはの肩に乗っているユーノが、念話でなのはに話しかける。  
今回は、ジュエルシードの搜索を忘れてリフレッシュすることを促すユーノに感謝するのは。

再び、旅館内の探索をする一同。

そこで彼女達は、額に赤い宝石の様な物を付けた女性に出会う。

アルフ「はあゝい おちびちゃん達」

「「「「「？」「「「「」

突然話しかけられて動揺する一同。

高町なのはとユーノ・スクライアは目の前の女性に見覚えがあった。

なのは「（ユーノ君…あの人…）」

ユーノ「（金髪の女の子や当麻君と一緒にいた人だ…）」

月村邸でフェイト・テストロツサと対峙した際に、上条当麻と一緒にいた女性。

やたらとテンションの高い女性を見た少女達は、酔っ払いなのではないかと判断した。

浴衣姿の女性は、そのまま高町なのはに近付いて…

アルフ「君かね？　うちの子達をアレしてくれちゃってるのは？」

うちの子達とは、金髪の少女と上条当麻であると推測する二人。

高町なのはの姿をジロジロ見た女性は…

アルフ「あんま賢そうでも強そうでもないし…ただのガキンチョに

見えるんだけどなあ……」

なのは「あ……あの……」

うろたえるなのはの前にアリサが立ち塞がる。

アリサ「……なのは、お知り合い？」

なのは「え……ええっと……」

厳密に言えば、初対面ではないのだが、こうして面と向かって話すのは初めてな少女。

口籠る高町なのはの様子を見たアリサ・バニングスは……

アリサ「この子、貴女を知らないそうですが？どちらさまですか？」

毅然とした態度でアルフに話しかけるアリサ。

友達想いの少女だからこそ、ここまで初対面の人間に対して言う事が出来たのだろう。

静まり返る廊下。

高町なのはの顔を見つめるアルフ。

アルフ「あははは！！」

突然笑い始めた女性にどう反応すればいいのか分からず呆然とする一同。

アルフ「いや〜ごめんごめん。人違いだったかな」

アリサ「人違い？」

アルフ「あたしが知っている子に淒く似てたもんだからさ」

なのは「なんだ…そうだったんですか…」

アリサ「む〜」

アルフ「可愛いフェレットだね〜」

高町なのはに近付いてユーノの頭を撫でるアルフ。

相変わらずアルフを警戒するアリサと安堵する高町なのは。

アルフ「(…今のところは、挨拶だけだね…)」

「「!?!?」」

突如、頭の中に響いてきた声に動揺するのはとユーノ。

なのは「(これって…)」

アルフ「(忠告しておくよ。子供はいい子にして、おうちで遊んでいなさいよね…)」

ユーノ「(君は…)」

アルフ「(おいたが過ぎるとガブツといくわよ?)」

なのは「(貴女は…)」

アルフ「(トウマのクラスメートだからって手加減しないからね)」

ピクー!!

トウマという言葉に反応する高町なのはとユーノ・スクライア。

なのは「さあ〜て、もうひとつ風呂行ってこよ〜と」

意気揚々とその場から立ち去るアルフ。

すずか「な…なのはちゃん…」

なのは「あ…う…うん…」

アリサ「なあにあれ!？」

なのは「か…変わった人だったね」

アリサ「真昼間から酔っ払ってんじゃないの!？」

すずか「ア…アリサちゃん…」

アリサ「だからって節度ってモンがあるでしょ!？」

なのは「まあまあ…ここは寛ぎ空間だし色んな人が居るよ」

先程から怒りを露にしているアリサ・バニングスを落ち着かせている高町なのはと月村すずか。

二人がアリサを落ち着かせている頃、浜面仕上は…

仕上「…胸でけえ…」

アルフの胸の大きさを思い出していた。

それから少し時間が経って、上条当麻とフェイト・テスタロッサとアルフは旅館から少し離れた森の中に居た。結界を張るフェイト。

彼等が何故この様な場所に居るのかというと、上条当麻の特訓を行う為である。

フェイト「始めるよ!!」

当麻「うん!!」

『バルディッシュ』を構えるフェイト・テスタロッサ。彼女はバリアジャケットに着替えており、戦闘準備は万端だった。

『Device Form』

フェイト「バルディッシュ…フォトンランサー…連撃」

『Photon Lancer Full Auto Fire』

ドドド!!

大量の魔力弾が少年に襲い掛かる。

当麻「くっ…!!」

バキン!!

少年はそれを右手で殴り打ち消していく。  
消し切れない攻撃は、ギリギリで避ける。

『Scythe Form』

戦斧から鎌の形状に変化する『バルディッシュ』

フェイト「ハアツ!!」

当麻「ここか!？」

ビュン!!

近接戦闘を仕掛けるフェイト。

上条当麻はフェイトの攻撃をギリギリで避ける。

特訓を始めた当初は、フェイトの攻撃に全く対応することが出来なかったが、非常に厳しい特訓を何度も繰り返したことにより、少年はフェイトの攻撃にある程度対応することが出来るようになっていた。

アルフ「頑張れ!!」

そんな二人の戦いを眺めるアルフ。

アルフは上条当麻の近接戦闘の特訓を受け持っている。

フェイトのデバイスとは異なり、拳で戦うのが主な彼女は当麻にとつて師匠と呼べる存在だった。

防戦一方だった上条当麻もフェイトに向かって攻撃する。

上条当麻は空を飛ぶことが出来ないこともあり、ハンデとして地上で戦っているフェイト・テストアロツサ。

上条当麻の右拳による攻撃を避けるフェイト。

少年の右手には魔法を打ち消す力が宿っており、魔導師によって天敵とも言える能力と言える。

それ故に、フェイトも訓練だから言って油断は出来ないのだ。

一旦上条当麻から距離を取るフェイト・テストロッサ。

『Device Form』

戦斧形態に戻る『バルディッシュ』

フェイト「行くよ!!当麻!!」

『Thunder Smasher』

バルディッシュから放たれる金色の雷。

その雷は上条当麻に向かって真っ直ぐ伸びて…

当麻「おおおおお!!」

右手で真正面から受け止める上条当麻。

莫大なエネルギーの為、直ぐに消えない攻撃だったが…

バキン!!

何とか打ち消すことに成功する。

当麻「はあ…はあ…」

フェイト「…ふう…お疲れ様…当麻…」

当麻「ありがとう…フェイト…」



アルフ「そんじゃあ、旅館に戻るうか！」

特訓が終了して旅館に戻る三人。

上条当麻の特訓から数時間が過ぎた。

アリサ・バニングスと月村すずかが寝静まった一室で、高町なのはとユーノ・スクライアは念話を用いて、会話をしていた。

なのは「ユーノ君…昼間の人はやっぱり…上条君とあの子の関係者なのかな？」

ユーノ「(多分ね…)」

なのは「(このままジュエルシードを集めていたら…また…あの子と戦うことになるのかな?)」

ユーノ「(多分…)」

なのは「(…)」

ユーノ「(なのは。僕はあれから色々考えたんだけど…やっぱり僕が一人『ストップ』…)」

なのは「(そこから先言ったら怒るよ?)」

ユーノ「(…)」

なのは「(ジュエルシード集め。最初はユーノ君の手伝いだったけど…今はもう違う)」

ユーノ「(…)」

なのは「(私が…自分でやりたいと思ってやってることだから)」

ユーノ「(…)」

なのは「(一人で無茶したら怒るよ?)」

ユーノ「(…うん)」

それから更に時間が経過した夜中…

なのは「(ユーノ君!)」

ユーノ「(近くにジュエルシードがある!)」

ジュエルシードの反応を察知した二人が、反応を察知した場所まで急ぐ。

その頃、上条当麻とフェイト・テストアロッサとアルフが、橋の上から湖の様子を覗いていた。

ジュエルシードを封印する為の準備が完了している三人。

アルフ「凄いなこりゃ。これがロストロギアのパワーって奴?」

アルフが楽しそうに語る。

フェイト「随分と不完全で不安定な状態だけどね」

当麻「暴走はしてないみたいだね…」

今までジュエルシードの暴走によって、発生した怪物と戦っていた少年が初めて見る光景だった。

アルフ「フェイトの母親は、どうしてあんなものを欲しがってんだろうね…？」

それはアルフだけではなく、上条当麻も疑問に感じていた。

フェイト「分からないけど…理由は関係ないよ。母さんが欲しがってるんだから、手に入れないと…!!」

当麻「…」

フェイト「バルディッシュ、起きて!!」

『Yes, sir』

『Sealing Form Set up』

フェイト「封印するよ。二人ともサポートお願い!!」

アルフ「ああ!!」

当麻「うん!!」

ジュエルシードを封印することに成功するフェイト。  
ジュエルシードを封印し終えた彼女達が出会ったのは…

なのは「上条君…」

当麻「高町さん…」

アルフ「……あくら、あらあら……」

高町なのはとユーノ・スクライアだった。

月村邸の時と同じく、予想外の場面で出会い軽く動揺する上条当麻。高町なのはは昼間にアルフに出会っていたことから、少年に出会う可能性を考慮していた。

アルフ「子供はいい子でって言わなかったっけ？」

ユーノ「それを…ジュエルシードをどうするつもりだ!? それは危険な物なんだ!」

アルフ「さあね…答える理由が見当たらないよ?それにさあ…アタシ親切に言っただけだよ?いい子でなきゃガブツと行くよって…」

狼を連想させる姿に変身するアルフ。

その姿を始めてみた少年は…

当麻「…犬?」

アルフ「アタシは狼だ!!」

当麻「…ごめん…」

ユーノ「やっぱり…アイツ、あの子の使い魔だ!」

アルフの姿を見て何かを確信したユーノが話す。

なのは「使い魔……?」

アルフ「そうよ。アタシはこの子に作られた魔法生命。製作者の魔力で生きる代わり、命と力のすべてを賭けて護ってあげるんだ」

当麻「…」

アルフはフェイトの方を向いて…

アルフ「先に帰ってて。すぐに追いつくから…」

フェイト「……うん…」

高町なのはに襲い掛かるアルフ。  
しかし、彼女の攻撃が少女に届くことは無かった。

ガギイ!!

ユーノ・スクライアが咄嗟に張った結界が少女を守った。

ギギギ!!

アルフ「ちっ…」

ユーノ「なのは! あの子をお願い!!」

アルフ「させるとでも……思ってたの!?!」

ユーノ「させてみせるさー!!」

アルフとユーノが戦っている場所に魔法陣が出現する。  
そして…

アルフ「これは…!」

一瞬でその場から、アルフとユーノが消える。

当麻「一体何が…?」

何が起きているのか把握出来ない少年が、無意識に呟く。  
その場に残っているのは、高町なのはとフェイト・テストアロツサと  
上条当麻だけだった。

フェイト「結界に、強制転移魔法……いい使い魔を持っている」

なのは「ユーノ君は『使い魔』ってやつじゃないよ。私の大切な友達!」

フェイト「で…どうするの?」

なのは「話し合いで、何とか出来るってこと…ないかな?」

当麻「話し合い…」

フェイト「私は…ロストロギアの欠片を……ジュエルシードを集めないといけない。そして、貴女も同じ目的なら、私達はジュエルシードを賭けて戦う敵同士ってことになる」

なのは「だから、そういうことを簡単に決めつけない為に、話し合  
いって必要なんだと思う！」

高町なのはの言葉に聞き入る上条当麻。

フェイト・テストロツサがジュエルシードを集める目的は母親の為  
だが、もし、フェイトの母親がユーノと同じ目的でジュエルシード  
の搜索を命じているのならば、協力できるのかもしれない。

フェイト「話し合うだけじゃ……言葉だけじゃ、きっと何も変わら  
ない」

高町なのはの言葉を切り捨てたフェイト・テストロツサは目を閉じ  
て…

フェイト「……伝わらない!!」

再び目を開き、なのはに襲い掛かるフェイト。

『Flier Fin』

高町なのはの足よりピンク色の羽根が生えて、空中に移動する。

彼女に続き、フェイト・テストロツサも空へ移動する。

『バルディッシュ』を構えたフェイトは…

フェイト「賭けて。それぞれのジュエルシードを一つずつ!」

『Photon Lancer, get set』

高町なのはの遙か頭上に飛んでいたフェイト・テストロツサ。

『Thunder Smasher』

『バルディッシュ』から発せられる声。

そして『バルディッシュ』の先端部分から、金色の光が放たれた。

『Divine Buster』

高町なのはも『レイジングハート』を構える。

『レイジングハート』から発せられる声と共に、先端から桃色の光線が発射される。

ドゴオオ!!

二つの光線が激突する。

なのは「レイジングハート、お願い!」

『All right!』

高町なのはの呼び声に応えた『レイジングハート』

デイベインバスターの威力が増大して、サンダースマッシャーを打ち破る。

当麻「フェ…フェイト!？」

しかし…

『Scythe Slash』

デイベインバスターを避けたフェイトは、デバイスを変形させて、



高町なのはの懷まで飛び込み…

少女の首筋に魔力刃を突きつけた。

なのは「くっ…」

『Pull out』

レイジングハートが突然、封印していた筈のジュエルシードを一つ出した。

なのは「レイジングハート…何を!？」

予想外の行動に動揺するなのは。

フェイト「きつと主人想いのいい子なんだね」

ジュエルソードを手に入れるフェイト・テストロッサ。地上に降りた彼女は、上条当麻とアルフに声を掛ける。

フェイト「帰ろう…アルフ…当麻」

アルフだけではなく、ユーノもこの場に戻っていた。

その場から立ち去ろうとするフェイト。

しかし…

アルフ「悪いけど…ここで倒させてもらおうよ!」

高町なのはに襲い掛かるアルフ。

突然の行動に、なのはもユーノも動きが取れなかった。

フェイト「アルフ!! やめて!!」

フェイトの制止も振り切って、アルフは少女をその爪で引き裂こうとした。

大切な主人の『敵』を排除する為に…

なのは「ッ!!」

目を瞑ってしまう高町なのは。

しかし、いつまで経っても衝撃が来ない。

恐る恐る目を開けてみると、彼女の目の前には上条当麻が立っていた。

当麻「駄目だよ…アルフ…」

高町なのはとアルフの間に割り込んだ少年は、両手を広げて少女をアルフの攻撃から守っていた。

そんな上条当麻の姿を見たアルフは…

アルフ「…分かったよ」

狼の姿から人間の姿に変化する。

当麻がアルフを止めてくれたことに安堵するフェイト。

フェイト「帰ろう…」

当麻「うん…」

アルフ「ああ……」

その場から立ち去ろうとする三人。

なのは「待って！」

なのはの一言で、三人の足が止まる。

フェイト・テストロッサは振り返って……

フェイト「出来れば……私達の前にもう現れないで。もし次会ったら、今度は止められないかもしれない……」

なのは「名前……貴女の名前は？」

フェイト「フェイト……フェイト・テストロッサ」

なのは「わ、私は……！」

高町なのはの言葉を聞かずに、その場から立ち去る三人だった。

## 第18話 すれ違う気持ち

海鳴温泉での戦いから二日が経過した。  
それぞれの朝を迎える一同。

『高町家』

先日の温泉でのフェイト・テストロッサとの戦いを思い出す高町なのは。

なのは「(きつと…私と同じ年くらいで…深くて綺麗な瞳をした…  
あの子…)」

自分と同じ年くらいの少女。

なのは「(また…会えば…戦うことになるのかな…?)」

フェイト・テストロッサから投げ掛けられた明確な拒絶の言葉。  
恐らく、再び会えば戦いは免れないだろう。

なのは「(それに…)」

フェイト・テストロッサと同じく高町なのはの悩みの原因になっている少年。

なのは「(上条君…一体…何を考えてるの?)」

ジュエルシードの捜索に協力してくれると言ってくれた少年が、フェイト・テストロッサと行動を共にしているという事実。

しかし、上条当麻はフェイトやアルフとは異なり、敵対の意思を見せていない。

温泉の一件でも、アルフから高町なのは身を挺して守った。

なのは「（上条君はあの子がジュエルシードを集める目的を知っている…）」

以前、小学校の屋上で少年に少女がジュエルシードを集める目的を聞いた時に、少年は話せないと言った。

なのは「（どうしたらいいんだろう…）」

『マンション』

先日のアルフの行動を思い出す上条当麻。

身勝手な行動をしたアルフをフェイトは叱っていた。

しかし、フェイトの為に行動したアルフを責める事など少年には出来なかった。

温泉での高町なのはとの戦いの後、少しばかり険悪な雰囲気を感じ取っていた八神はやたと絹旗最愛だったが、その事について言及するような真似はしなかった。

当麻「（高町さん…大丈夫かな…？）」

高町なのはのジュエルシード搜索に協力すると言っておきながら、フェイト・テストアロツサのジュエルシード搜索を手伝っているという現状。

自分が場を混乱させている事を自覚していた少年。

それ故に、彼は強い罪悪感を抱いていた。

フェイト「当麻：大丈夫？」

先程から色々考え込んでいる上条当麻を心配したフェイトが声を掛ける。

当麻「大丈夫だよ。心配掛けてごめんね」

フェイト「ううん。そんなことないよ」

フェイトは少年が悩んでいる理由の原因は自分であると感じていた。少年と先日戦った少女が親しいかどうかは不明だが、クラスメートを傷付けられて心中穏やかではないだろう。

これ以上自分の前に現われないと警告したが、彼女がもう自分の前に再び現われないという保障は無い。

少年のクラスメートを傷付けるのは忍びないが、例え少年とは無関係であっても、心優しい少女にとって人を傷付けるのは望まない行為だった。

しかし、母親の為にジュエルシードを集めている少女は、止まるわけにはいかなかった。

暗い雰囲気を迎えた朝食。

明らかに普段とは異なる雰囲気を感じ取った絹旗最愛は、何が起きているのか理解出来ていなかったが、その事について口を出す様なことはしなかった。

『私立聖祥大附属小学校』

バン！！

アリス&仕上「いい加減にしなさいよ（しろよ）！！」

机を叩きつけて怒りを露にする浜面仕上とアリサ・バニングス。

仕上「ふざけんじゃねえよ!！」

アリサ「こないだから何話しても上の空で…!！」

仕上「そんなに俺達と一緒にいるのは嫌なのかよ!？」

少年と少女の怒りの矛先は、上条当麻と高町なのはに向けられていた。

当麻「そんなわけじゃ…」

なのは「ご…ごめんね…アリサちゃん…」

仕上「じゃあ何でそんな顔してんだよ!！」

アリサ「ごめんじゃない!! 私達と話すのが退屈なら二人でずっと居ればいいじゃない!！」

ダッ!!

教室を出て行ったアリサ・バニングスと浜面仕上。

すずか「…アリサちゃん…浜面君…」

なのは「…」

すずか「なのはちゃん…上条君…」

なのは「いいよ…すずかちゃん…今は私が悪いから…」

当麻「ごめんなさい…」

すずか「そんなことないよ…二人とも言い過ぎだよ…少し話してくるね…」

なのは「ごめんね…」

二人を追いかけてそのまま教室から出て行く月村すずか。

教室に残された上条当麻と高町なのは。

アリサ・バニングスと浜面仕上を追いかけていた月村すずか。

アリサと仕上を発見したすずか。

すずか「アリサちゃん…浜面君…！」

仕上「何だよ…」

アリサ「何よ…」

すずか「何で怒ってるのかなんとなく分かるけど…駄目だよ…」

アリサ「悩んでるのも困ってるのも丸分かりじゃない！！大丈夫って言ってるけど嘘じゃない！！」

仕上「友達じゃねえのかよ！！」

すずか「どんなに仲良しの友達でも言えない事もあるよ…」

アリサ「だからそれがむかつくのよ！！」



仕上「辛い時があるなら支え合っのが友達だろっが!!」

すずか「二人とも…上条君やなのはちゃんが好きなんだね…」

仕上「当たり前だろ!」

アリサ「そうよ!」

大切な友達だからこそ、抱え込んでいる悩みを打ち明けてくれない上条当麻と高町なのはに対して、怒っていた浜面仕上とアリサ・バニングス。

アリサ「なのはが居たから私は一人ぼっちじゃなくなったのに…」

すずか「私もだよ…」

仕上「一人で全部抱えてんじゃねえよ…馬鹿野郎…」

放課後を迎えてバラバラに帰る一同。

なのは「一人で帰るのって…久しぶりかな…」

気が沈んでいる高町なのはは寄り道して帰ることに決めた。

車に乗って稽古に向かっていたアリサ・バニングスと月村すずか。

すずか「初めて会った時は…私…今よりずっと気が弱くて…誰に何を言われても反論出来なくて…」

アリサ「私は我ながら最低な人間だったっけね…自信家で強がりで

我侂で…心が弱かったからね…」

すずか「私も…弱かったから…何も言えなかった…」

アリサ「やめなよって言われても聞かなかった。他人の言う事を聞いていたら何かに負けちゃうって思ってたから…」

昔を思い出す少女達。

我侂放題だったアリサの頬を引つ叩いたなのは。

すずか「あの時、なのはちゃん…何て言ってたっけ？」

アリサ「『痛い？でも、大事な物を取られちゃった人の心はもつともつと痛いんだよ？』…って」

すずか「アリサちゃんとなのはちゃんがその後、大喧嘩しちゃったっけ？」

アリサ「それを止めてくれたのがあんだだったなんてね…」

すずか「あ…あの時は…だって…必死だったんだよ…」

アリサ「それから少しづつ話をするようになったっけ…」

高町なのはと親しくなった切っ掛けを思い出すアリサ・バニングス。

アリサ「浜面には三カ月後に会ったんだっけ？」

すずか「うん…」

アリサ「意地の悪い男子がよくからかってきた時に『やめるよ!』  
って言ってたわよね」

すずか「そうだったね」

アリサ「男子の中にも良い奴がいるんだって思ってさ…」

すずか「うん」

アリサ「それで今年には上条に出会った」

すずか「転校したばかりなのに一緒に猫を探してくれて…」

アリサ「上条となのはが私達を心配させたくないのは分かってる。  
それに…私達じゃ上条となのはの助けにはならない…待っててあげ  
ることしか出来ないなら…」

すずか「…」

アリサ「じゃあ!私はずっと怒ってる!気持ちを分け合えない寂し  
さと!親友の力になれない自分に!」

すずか「意地っ張り…」

アリサ「フンだ!」

少し前、高町なのはは公園のベンチに座っていた。

なのは「(アリサちゃんと喧嘩しちゃった…)」

彼女達をジユエルシードの問題に巻き込みたくない故の行動が、逆に彼女達を心配させてしまっていたことに心を痛める少女。

「なのは「（怒らせちゃったな…ごめんね…アリサちゃん…浜面君…）」

ベンチに座り込んでいた高町なのはだったが、そこで…

当麻「…僕のせいで…」

なのは「!?!」

上条当麻の声が聞こえて動揺する高町なのは。急いで周囲を見る少女。

どうやら、ある程度離れたベンチに少年が座っていた。どうやら、少年は少女に気付いていないようだった。

当麻「やっぱり僕は…疫病神なのかな…」

なのは「（疫病神?）」

疫病神という言葉に違和感を覚える高町なのは。

そのまま少年はベンチから立ち上がりその場から立ち去る。

上条当麻も高町なのはと同じ様に、自分一人で全てを抱え込む性質だからこそ、少年も同じ様に浜面仕上と喧嘩してしまったのだろう。似た様な状況に置かれた高町なのはと上条当麻。

なのは「…上条君…」

『マンシヨン』

アルフ「ん〜 トウマの料理も美味しいけどこれもやっぱり美味しいね〜」

ドッグフードを笑顔で食べるアルフ。

基本的な食事は上条当麻が作るのだが、おやつとしてドッグフードを食べるアルフだった。

アルフ「さって…うちのお姫様はっ」と…」

フェイトが居る場所まで移動するアルフ。

少女はベッドにうつ伏せになっていた。

フェイトの背中には傷が刻まれていた。

その姿を見て表情が暗くなるアルフ。

アルフ「フェイト…」

フェイト「そろそろ行こうか。当麻はまだ帰ってきてないけど…次のジュエルシードの大まかな位置特定は出来ているし…あまりお母さんを待たせたくないし…」

アルフ「そりゃあまあ…フェイトはあたしのご主人様で、あたしはフェイトの使い魔だから、行こうって言われりゃ行くけどさ…」

ジュエルシードの搜索にあまり乗り気でないアルフ。

フェイト「それ…食べ終わってからもいいから」

ドッグフード片手にフェイトに話しかけていたアルフは、慌ててドッグフードを手放す。

アルフ「そうじゃないよ！あたしはフェイトが心配なの！広域探索の魔法はかなりの体力を使うのに…フェイトってば休まないし…その傷だって軽くは無いんだよ！？トウマだって心配するよ！？」

フェイト「平気だよ…私は強いから…」

アルフ「…」

フェイト「さあ行こう？お母さんが待ってる」

ジュエルシードの搜索に向かおうとしているフェイト。

当麻「遅くなってごめん！」

そこでフェイトの部屋に上条当麻が入ってくる。

フェイト「と…当麻！？」

アルフ「トウマ！？」

先程帰宅したばかりの少年に驚きを隠せない二人。

当麻「ごめん！すぐ準備…を…」

少年の動きが止まる。

当麻の言葉が詰まった事に疑問を感じるフェイトとアルフ。

当麻「フェイト…その傷…」

フェイト&アルフ「!?!」

背中に刻まれた傷を少年に見られた事に気付く二人。

フェイト「こ…これは…」

当麻「ちょっと待ってて!?!」

急いで部屋から出て行く上条当麻。

恐らく薬を買う為に出て行ったのだろう。

フェイト「当麻には悪いけど…このまま行こう…」

アルフ「うん…」

少年を待たずにジュエルシードの搜索に繰り出すフェイト・テスト  
ロッサとアルフだった。

『高町家』

ユーノ「そうか…喧嘩しちゃったんだ…」

なのは「違うよ。私がぼくっとしてたからアリサちゃんに怒られた  
だけ」

ユーノ「親友…なんだよね?」

なのは「うん。入学してからずっとね」

ユーノにたい焼きを渡すなのは。

なのは「今日は塾もないし、晩御飯の時までゆっくりジュエルシー  
ド探しが出来るよ。頑張ろう?。」

ユーノ「うん…頑張ろう…」

ジュエルシードを探す為に行動を開始する高町なのはとユーノ・ス  
クライアだった。



## 第19話 少女の想い

アリサ「…はあ」

稽古の休憩時間にコンビニを訪れていたアリサ・バニングス。

アリサ「すずかにはああ言ったけど…どうしたらいいんだろ…」

月村すずかの前では強がっていたが、アリサ自身はなのはと仲直りしたいという気持ちが強かった。

しかし、人前で素直になれない少女にとってこの問題は簡単に解決できるようなものではない。

アリサ「うーん…」

深く考え込んでいる少女だったが…

ウィーン!!

コンビニに入ってきた人物により思考が中断される。

当麻「バ…バニングスさん？」

アリサ「上条？」

アリサも当麻も予想外の出会いに動揺していた。

アリサは休憩も兼ねてコンビニに買い物に来ており、当麻は傷薬を買う為にコンビニを訪れていた。

アリサ「何やってんのよアンタ…」

当麻「ちよつと友達が怪我しちゃってね…バニングスさんは？」

アリサ「何だっついていいでしょ…」

当麻「ごめんね…」

アリサ「何で謝るのよ？」

当麻「皆に迷惑掛けたから…」

上条当麻は親友の月村すずかより気が弱いのではないかと思うアリサ。

アリサ「はあ…」

当麻「バニングスさん？」

アリサ「別に謝らなくてもいいわよ。こっちも大人げなかったし」

当麻「で…でも…」

アリサ「本当に悪いって思うなら、悩み事はちゃんと相談しなさい」

当麻「え？」

アリサ「私達じゃ手助け出来ないかも知れないけど…」

当麻「そんなことないよ」

アリサ「え？」

アリサの言葉を否定する当麻。

当麻「僕はバニングスさん達に十分助けてもらったんだ」

今まで同年代の人間から陰湿な苛めを受け続けた少年に、手を差し伸べてくれた大切な友達。

人生に希望を抱けなかった少年に、希望を与えてくれた掛け替えの無い存在。

当麻「バニングスさん達が居たから僕は友達が出来たんだ」

アリサ「…」

当麻「だから、何も手助け出来てない事なんてないんだよ」

アリサ「…あんたって馬鹿ね…」

当麻「…え？」

アリサ「何かアンタと話していると悩んでるのが馬鹿らしくなっちゃった…」

当麻「そうかな？」

アリサ「そうよ。浜面とすずかも心配してたんだから謝っておきなさいよ」

当麻「うん」

アリサ「よろしい…ってもう休憩時間が過ぎてるじゃない!？」

コンビニの時計を見て慌てるアリサ・バニングス。

急いで品物をカゴに入れるアリサ。

当麻も傷薬を買わなければいけないことを思い出して、急いで商品をカゴに入れる。

店員「ありがとうございます!」

急いで店を出るアリサと当麻。

アリサ「それじゃあね!」

当麻「また明日!」

アリサは稽古場に、当麻はマンションに向かおうとしていたが…

当麻&アリサ「え?」

アリサ・バニングスの目の前には刃物を持った男が居た。

アリサ「きゃああ!」

刃物をアリサに向ける不審者。

当麻「くっ…」

グイ!!

アリサの手を引く当麻。

少女に向けられた刃物が少女に突き立てられることはなかった。

アリサ「きゃ……」

当麻「大丈夫!？」

アリサ「う……うん」

当麻「走れる!？」

アリサ「だ……駄目……腰が抜けて……」

いきなり不審者に刃物を向けられて怯まない人間の方が珍しいだろう。

アリサ・バニングスの前に立ち、不審者を睨みつけて拳を構える上条当麻。

アリサ「む……無理よ!」

当麻「大丈夫」

アリサ・バニングスにそう告げた上条当麻。容赦なく少年を刃物で切りつける不審者。少年はその攻撃をギリギリで避ける。

アリサは恐怖で目を開ける事が出来なかった。

当麻「くっ……」

上条当麻の頬が切り裂かれる。  
しかし、それでも少年は怯む事無く不審者に立ち向かう。  
不審者の懐に入った少年は、渾身の一撃を腹部に叩き込む。  
その攻撃に堪らず膝をつく男。  
恐る恐る目を開けるアリサ。

当麻「バニングスさん!! 逃げるよ!!」

アリサ「う…うん!!」

少女の手を引いてその場から逃げる少年。  
逃げる場所を探している二人だったが、アリサの提案により稽古場  
に行くことに決めた。  
稽古場に辿り着いた上条当麻とアリサ・バニングスは月村すずかに  
出会った。

すずか「アリサちゃんに上条君!?! どうしたの?」

アリサ「すずか!! 大変なの!!」

すずかに先程の出来事を語るアリサ。

二人が話している隙を突いて、稽古場から出て行く当麻。

すずか「上条君は?」

アリサ「え?」

少年がその場から忽然と居なくなっていた事に気付く二人。

アリサ「一体何処に!?!」

すずか「これって…」

アリサ「どうしたの!？」

月村すずかは地面に落ちている赤い液体を発見した。

それが一体何を意味するのか理解するのに、ある程度の時間を必要とする二人だった。

当麻「早く…帰らなきゃ…」

マンションに向けて歩みを進める上条当麻。

彼の背中からは赤い液体が滴り落ちていた。

恐らく、先程の不審者との戦いで受けた傷だろう。

当麻「フェイトと…アルフが…待ってる…」

覚束ない足取りでマンションに向かう少年。

何とかフェイトの居る部屋まで来れた少年はドアを開ける。

しかし…

当麻「い…ない…?」

彼女の部屋には誰も居なかった。

一方その頃、高町なのはとユーノ・スクライアはジュエルシードの搜索を行っていた。

なのは「見つからないね…そろそろ帰らないと…」

本日はいつもよりジュエルシードを搜索する時間が取れたのだが、結局ジュエルシードを見つけられることは出来なかった。

ユーノ「大丈夫だよ。僕がもう少し探しておくから」

なのは「ユーノ君…大丈夫？」

ユーノ「大丈夫だよ。だから晩御飯取っておいてね」

なのは「うん」

ユーノと分かれて自宅に向かうのは。

なのは「（アリサちゃんとすずかちゃん。そろそろ稽古が終わる頃かな？）」

その頃、フェイトとアルフはビルの屋上に居た。

アルフ「トウマには何も言わないで来ちゃったけど…悪いことしちゃったね…」

フェイト「…うん」

上条当麻に何も告げずにジュエルシードの搜索を行っているフェイト・テストアロツサとアルフ。

アルフ「まあでも…今更マンションに帰るわけにはいかないけどね…フェイト…ジュエルシードの位置は？」

フェイト「大体この辺りだと思うんだけど…大まかな位置しか分か



らないんだ」

アルフ「まあ…これだけ混雑していると探すのも一苦労だよな」

フェイト「ちよつと乱暴だけど…周辺に魔力流を打ち込んで強制発動させるよ」

アルフ「ちよい待ち！それアタシがやる！」

フェイト「大丈夫？結構疲れるよ？」

アルフ「このアタシを一体誰の使い魔だと？」

アルフの言葉を聞いたフェイトは軽く微笑んだ。

フェイト「じゃあお願い」

アルフ「そんじゃあ！！」

周辺に魔力流を打ち込むアルフ。膨大な魔力が周囲に迸る。異変に気付いたなのはとユーノ。

ユーノ「こんな街中で強制発動！？広域結界！間に合え！」

慌てて結界を展開するユーノ。

なのは「レイジングハート！！お願い！！」

バリアジャケットに着替える高町なのは。

アルフの魔力を受けたジュエルシールドが姿を現した。

フェイト「見つけた！」

アルフ「けど…あっちも近くに居るみたいだね…」

フェイト「早く片付けよう…バルディッシュ！」

『Sealing Form・Setup』

ジュエルシールドを封印する態勢を取るフェイト。

ユーノ「なのは！発動したジュエルシールドが見える！？」

なのは「うん！！直ぐ近くだよ」

ユーノ「あの子達が近くにいるんだ！あの子達より早く封印して！」

なのは「分かった！！」

『Sealing Mode・Setup』

『レイジングハート』と『バルディッシュ』から放たれた光がジュエルシールドに直撃する。

予想外の出来事に同様する高町なのはとフェイト・テストアロッサだったが、ジュエルシールドの封印を続ける二人。

なのは「リリカル！！マジカル！！」

フェイト「ジュエルシールド、シリアル19封印！！」

二つのデバイスから放たれる光が輝きを増して、ジュエルシールドは封印された。

『Device Mode』

封印されたジュエルシールドに近付きながら、アリサ・バニングスと喧嘩した当時の出来事を思い出す高町なのは。

なのは「（アリサちゃんやすすかちゃんとも、始めて会った時は友達じゃなかった。話を出来なかったから。分かり合えなかったから。アリサちゃんを怒らせちゃったのも…私が本当の気持ちを伝えられなかったから）」

ユーノ「やった！なのは！早く確保を！」

アルフ「そうはさせるかい！」

なのはに襲い掛かるアルフの攻撃を結界を用いて防ぐユーノ。

なのは「（目的がある同士だからぶつかりあうのは仕方ない…だけど…知りたいんだ…上条君が協力する理由を…貴女が何の為にジュエルシールドを求めているのか…）」

なのは「この間は自己紹介できなかったけど…私なのは！高町なのは！私立聖祥大附属小学校三年生！」

『Scythe Form』

フェイトの瞳を見たなのは。

なのは「（どうして…上条君と同じ様な…寂しい目をしているの…）」

なのはに襲い掛かるフェイト。

『Flier Finn』

辛うじてフェイトの攻撃を避けるなのは。

その頃、アリサ・バニングスと月村すずかは…

アリサ「どうしたらいいのよ!？」

すずか「お…落ち着いて…」

現状が飲み込めないアリサと彼女を落ち着かせるすずか。

地面に落ちていた赤い液体は上条当麻の血であることを理解した二人は、酷く動揺していた。

彼を探しに外出しようとしたが、先程襲われた不審者の件もあり、外出することは固く禁じられていた。

身動きの全く取れない二人。

アリサ「（なのは…上条…浜面…）」

すずか「なのはちゃん…上条君…浜面君…」

二人に出来ることは友達の無事を祈ることだけだった。

結界内での激闘を繰り広げる二人。

後方から凄まじい速度で迫り来るフェイト。

『Flash Move』

高町なのは足元に生えているピンク色の羽が動いて、フェイトの背後を取ることに成功する。

『Divine Shooter』

『Defencer』

魔力で出来た障壁を作り出して攻撃を防ぐフェイト。

なのは「フェイトちゃん!!」

フェイト「!?!」

戦闘中に高町なのはに話し掛けられて戸惑うフェイト・テストタロツサ。

なのは「話し合うだけじゃ…言葉だけじゃ…何も変わらないって言ったけど…!」  
「話さないと言葉にしないと伝わらないこともきつとあるよ」

フェイト「…」

なのは「ぶつかり合ったり競い合うことは仕方ないけど…何も分からないままぶつかりあうのは嫌だよ!」

なのはの言葉を聞くフェイト。

なのは「私がジュエルシードを集める理由はユーノ君の探し物だから、ジュエルシードを見つけたのはユーノ君だから…ユーノ君はそれを元通りにしなくちゃいけないから…」

自身がジュエルシードを集める目的を語る高町なのは。

なのは「私は偶然ユーノ君に出会って、その手伝いとしてジュエルシードを集めてたけど…今は自分の意思でジュエルシードを集めるんだ。自分の暮らしている町や周りの人に危険が降りかかるのは嫌だから…これが…私がジュエルシードを集める理由！」

フェイト「私は…」

なのはがジュエルシードを集める目的を聞いたフェイトは、自分がジュエルシードを集める目的を語ろうとしたが…

アルフ「フェイト！！答えなくていい！！」

アルフがフェイトに呼び掛ける。

なのは&フェイト「!?!」

アルフ「優しくしてくれる人達の下で、暮らしている様なガキンチヨには何も教えなくて…」

アルフの言葉が止まり疑問を感じる高町なのはとフェイト・テストアロツサとユーノ・スクライア。

何かを凝視しているアルフを見た一同は、アルフが見ている先を見た。

そこには…一人の少年が倒れていた。

この場に居る全員はその人物に見覚えがあった。

フェイト「当…麻…？」

なのは「上条…君？」

何故少年が倒れているのか理解できていない少女達だったが、少年の背中を見て一気に現実呼び戻される。

少年の服は赤く染まっていた。

上条当麻が着ている服を染めている物が、血であることを認識することに然程時間は掛からなかった。

なのは「上…」

フェイト「当麻…！」

戦闘を放棄して少年の下に向かうフェイト・テストアロツサ。

フェイト「当麻…！しっかりして…！」

アルフ「フェイト…！あまり動かしちゃ駄目だ…！」

フェイト「でも…！」

アルフ「アタシがトウマを病院に連れて行く…！だからフェイトはジュエルシードを…！」

アルフは少年を連れてその場から去って行った。

フェイトはジュエルシードを見つめる。

彼女の目には涙が溜まっていた。

『バルディツシュ』を構えてジュエルシードを回収するために動き始めるフェイト。

ユーノ「なのは……今はジュエルシードを……！」

なのは「!?」

異常な事態に混乱している高町なのはだったが、ユーノの言葉で我に帰る。

ジュエルシードに向けて特攻するフェイト・テストロッサと高町なのは。

しかし……

ガギーン……!

ビシビシ……!

『レイジングハート』と『バルディツシュ』が激突して亀裂が入り、ジュエルシードが凄まじい魔力を放出した。



## 第20話 少年の決意

ジュエルシードが凄まじい魔力を放出している頃、浜面仕上は海鳴市の公園のベンチに座っていた。

仕上「流石に言い過ぎたかな…」

仕上は昼休憩に高町なのはと上条当麻に投げ掛けた言葉について軽く後悔していた。

仕上「いやでも…あいつらだって困ったことがあるなら相談すればいいのに…ん？」

二人と喧嘩したことについて考え込んでいる浜面仕上は、近くに刃物を所持した不審者を見つける。

仕上「あれって…まさか…」

嫌な予感がした少年だったが、時既に遅く…不審者と目が合ってしまった。

ザッ！

刃物を持った男が仕上の下まで近付いてくる。嫌な汗が止まらない浜面仕上は…

仕上「ちくしょう…不幸だあああ…！」

ダツ!!

不審者から全力で逃走した。  
不審者も少年を追い駆ける。

浜面仕上は私立聖祥大附属小学校の中でも頭は非常に悪い方だが、  
運動神経は非常に高い。

しかし、大人相手では分が悪く、長い間不審者から逃げ続ける少年  
だった。

一方その頃…

ユーノ「デバイスが!?!」

デバイスに亀裂が入り動揺するユーノ。  
凄まじい魔力の奔流が三人を包む。

ユーノ「なのは!?!」

フェイトは亀裂の入ったバルディッシュを見る。

フェイト「大丈夫?戻って…バルディッシュ…」

『Yes sir』

宝石の形態に戻るバルディッシュ。

魔力を放出し続けるジュエルシードの下まで近付いて、そのまま両  
手で握る少女。

彼女の行いを止めるアルフと上条当麻はその場に居ない。

フェイトはジュエルシードの暴走を無理やり抑えようとするが、莫  
大な魔力がジュエルシードから放出される。

フェイト「止まれ…！止まって…止まれ…！」

ブシュユ！！

フェイトの両手から噴出す血液。

フェイトの想いを嘲笑うかのようにエネルギーの放出を続けるジュエルシード。  
しかし…

『Absorb』

なのは「え！？」

ユーノ「この声は…まさか…」

突然、その場は無機質な声が響き渡る。

ジュエルシードから放出される魔力が徐々に減少していく。  
その隙を見逃さなかったフェイトは、そのままジュエルシードの魔力の放出を抑えることに成功する。

フェイト「はあ…はあ…」

満身創痍のフェイト・テスタロッサ。

彼女は再び立ち上がり、高町なのはとユーノ・スクライアの前から立ち去って行った。

そんな彼女を呆然と見ることにしか出来なかった二人だった。

彼女達から少し離れた場所で、デバイスを展開していた結標真紀。

真紀「凄まじい魔力ね…確かに厄介だわ…」

彼女が所持しているデバイスが不気味な光を放っていた。

シュー…

溜まり過ぎた魔力を放出する『フェンリル』

真紀「そろそろ動き始めますか…」

ヒュン！！

その頃、浜面仕上は不審者に追い駆けられたままだった。

仕上「ちくしょう…まだ追ってきやがる…」

私立聖祥大附属小学校の中で最も高い体力を誇る仕上も所詮は只の少年であり、そろそろ限界を迎えていた。

仕上「はあ…はあ…流石にもう無理だ…」

限界を迎えた少年はその場にへたり込む。

仕上「俺…死ぬのかな…」

小学三年生で生命の危機に晒されると思っていなかった少年。こんなことなら喧嘩しなきゃよかったと後悔する。

浜面仕上に迫り来る不審者。

しかし、少年に近付くのは不審者だけではなかったらしく…

士郎「仕上君じゃないか？どうしたんだこんな所で？」

不審者とは反対方向から、高町なのはの父親である高町士郎が現われた。

仕上「おっちゃん！！変な奴が！！」

少年の話している言葉が理解できない士郎だったが、少年の背後から刃物を持った男が現われる。

一瞬で状況を理解した高町士郎。

刃物を持って浜面仕上に襲い掛かる不審者。

しかし、目にも止まらぬ速度で不審者の懐に飛び込んだ高町士郎が一撃をお見舞いする。

ズドン！！

ドサ！！

一撃で倒れる不審者。

一瞬の出来事に何が起きているのか全く分からなかった浜面仕上。

高町士郎は少年の下に近付いて頭を撫でた。

士郎「良く頑張ったね」

その後、自宅まで送ってもらった少年。

仕上「（かつけえ…）」

両親に怒られている最中、少年は高町士郎の姿を思い出していた。

アルフ「フェイト…フェイト！？その怪我は！？」

海鳴市にある大学病院で合流したフェイト・テストロツサとアルフ。フェイトの手の怪我を見たアルフは酷くうるたえていた。

フェイト「大丈夫だよ…それより当麻は…」

アルフ「緊急手術が終わって今は容態が安定しているらしいけど…出血多量で死んでたかもしれないって…」

フェイト「そう…」

アルフ「フェイトは手を診てもらいなよ！ここは病院だし…」

フェイト「うん…」

そんなやり取りをしている二人の下に一人の女性が近付いてくる。

石田「どうしたの？」

アルフ「先生…」

アルフが医者と思わしき人物に声を掛ける。

フェイトも女性の方を向いて軽く挨拶する。

石田「貴女…」

両手から血が流れている所を見られて、慌てて両手を隠すフェイト。

アルフ「フェイトを診てやっておくれよ！」

石田「言われなくてもそのつもりよ」

石田とアルフに連れられて処置室に連れて行かれるフェイト。  
簡単な処置を終えて安堵するアルフ。

石田「これで終わりね。少し染みるかもしれないけど…」

フェイト「ありがとうございます」

石田「緊急事態だったから聞き忘れていたけど…貴女達は上条君とはどういう関係なの？」

アルフ「隣の部屋に住んでるんだけど…」

石田「そう…」

少しばかり神妙な顔をする石田に違和感を覚えるフェイト。

フェイト「あの…何かあったんですか？」

石田「こんなことを聞くのはあれだけど…上条君は虐待されているのかしら？」

フェイト「…え？」

予想外の答えに動揺を隠せないフェイト。

アルフ「虐待？」

石田「彼の身体には無数の痣があつてね…それに刃物で突き刺された傷跡もあったのよ…それも何箇所も…死んでもおかしくないほどの怪我を負っていて…今回の怪我は比較的マシな方だったのよ」

フェイト「う…そ…」

アルフ「…何だよ…それ…」

石田「…彼のご両親は？」

アルフ「…居ないって言ってたけど…トウマは一人暮らしだし…」

石田「そう…」

フェイト「…」

石田「とにかく…もうこんな時間だし…ベッドを用意するから」

フェイトとアルフのベッドを確保するためにその場から立ち去る石田。

衝撃的な事実には愕然とするフェイト・テストロッサ。

アルフ「サイアイに連絡しとかないと…」

携帯電話を取り出してマンションに居る絹旗最愛に連絡するアルフ。連絡が終わるアルフ。

アルフ「フェイト…」

フェイト「…」



上条当麻の両親がどんな人物か全く知らない二人。  
だからこそ、少年の過去に何があったのかも知る手段がない。  
それから少し時間が経って、二人の下に石田が戻ってくる。

石田「ベッドは上条君が寝ている病室に置いたけど、大丈夫かしら？」

フェイト「はい……」

上条当麻が眠っている病室に入るフェイト・テストロツサとアルフ。  
少年は静かに寝息を立てていた。  
少年が寝ているベッドの隣に置いてある椅子に座るフェイト。

フェイト「当麻……」

少年の手を握るフェイト。

アルフ「……」

黙ってその様子を見ているアルフ。  
少年の手を離す少女。

フェイト「アルフ……寝よう?」

アルフ「……うん」

病室に運び込まれたベッドに入り眠りにつくフェイトとアルフだった。

その頃、高町なのはとユーノ・スクライアは自宅に帰っていた。  
破損した『レイジングハート』を見るユーノ。

ユーノ「（レイジングハートはかなりの大出力にも耐え得るデバイスなのに…それを一撃で…ここまで破損させるなんて…あの子となのはの魔力の衝突…いや…やっぱり説明がつかない…あれはやっぱりジュエルシードの…）」

『レイジングハート』が破損した理由について考えるユーノだったが…

コンコン…ガチャ！

ドアを叩く音が聞こえて一旦、思考を中断する。

なのは「ユーノ君…レイジングハート…大丈夫？」

ユーノ「かなり破損は大きいけど…きっと大丈夫。今は自動修復機能をフル稼働させてるから明日には回復すると思うよ」

なのは「うん…」

ユーノ「なのは…大丈夫？」

なのは「うん…レイジングハートが守ってくれたから」

ユーノ「そう…」

なのは「ユーノ君…上条君のことなんだけど…」

少女が思い出すのは血塗れで倒れている少年の姿。その事を思い出すたびに身体が震える高町なのは。

ユーノ「あの子が運んで行ったみたいだけど…何処にいるのかは分からない…」

なのは「上条君…大丈夫かな…」

ユーノ「…」

当麻の容態が気になるのはだが、少年が何処にいるのか全く見当も付かない。

ユーノ「当麻君の事も気になるけど…あの子がジュエルシードを掴んでいたときに聞こえた声は…」

なのは「やっぱり…デバイスなの？」

ユーノ「多分…」

あの場に響き渡った声がデバイスならば、彼女達の近くには三人目の魔導師が居たことを意味する。

三人目の魔導師の目的は十中八九ジュエルシードだろうと推測するユーノ。

翌朝

当麻「う…う…うは…？」

一夜明けて目覚める上条当麻。

当麻「確か…フェイトとアルフを探してて…途中で眠くなって…」  
外で気を失ったことを思い出す少年。

しかし、彼が居る場所は屋内で、一体あれから何があったのかわからない。

顔を上げて周囲を見渡す上条当麻。

その部屋にはベッドが二つ置いてあり、そこでフェイト・テストアロツサとアルフが静かな寝息を立てていた。

当麻「フェイト…アルフ…」

フェイト「うっ…ん…」

少年の声に反応して目を覚ますフェイト。  
寝惚け眼で周囲を見る少女。

フェイト「当…麻…？」

当麻「おはよう」

少年の言葉を聞いた少女は…

フェイト「当麻…！」

当麻「ちょ…フェイト…！？」

突然抱きつかれて混乱する上条当麻。

フェイト「心配…したんだから…！…！」

涙を流して少年に語りかける少女。

フェイト・テストロッサが涙を流す姿を始めて見た上条当麻。

当麻「…ごめんなさい」

フェイト「でも…良かった…当麻が目を覚ましてくれて…」

また迷惑を掛けてしまったと罪悪感に苛まれる少年。

フェイト「何があったの？」

上条当麻が背中から血を流していた原因を尋ねるフェイト・テストロッサ。

当麻「実は…」

昨日の出来事を包み隠さず話した少年。

フェイト「そうだったんだ…ごめんね…勝手にジュエルシードの捜索に出掛けて…」

当麻「気にしないで…」

沈黙が病室を包む。

アルフは依然、熟睡したままだった。

少し時間が経って、フェイト・テストロッサが口を開く。

フェイト「昨日…あの子と戦ったんだ…」

当麻「高町さんど？」

フェイト「うん…」

昨日の出来事を少年に全て語る少女。

フェイト「当麻は…あの子がジュエルシードを集める目的を知っていたの？」

当麻「…うん」

フェイト「…話し合ったほうがいいのか？それとも…このまま戦ったほうが…」

当麻「僕は…話し合った方がいいと思う」

フェイト「…」

当麻「確かにフェイトの言う事も一理あると思う。話し合ったとしても戦う事が避けられないかもしれない」

フェイトは少年の言葉を黙って聞く。

当麻「だけど…何も分かり合えないまま戦うのは辛いことだから…」

そう語ったときの少年の瞳は悲しげだった。

フェイト「分かった。今度出会った時は私も話し合ってみようと思う」

当麻「ありがとう…フェイト」

感謝の言葉を聞いて頬が赤くなるフェイト。

アルフ「ううん…」

ようやく目の覚めたアルフが周囲を見渡す。

アルフ「トウマ！！目が覚めたんだね！！」

当麻「うん。心配かけてごめんね…」

アルフ「何言ってるんだい！」

アルフの喜ぶ姿を見て自然と表情が緩む当麻とフェイト。

フェイト「今から売店に行って何か買ってくるけど、何か欲しいものある？」

アルフ「鮭弁でお願い！」

当麻「僕は何でもいいよ」

フェイト「分かったよ」

そう言っただけで病室から出て行くフェイト。

現在病室に居るのは、上条当麻とアルフの二人だけだった。

アルフ「それにしてもトウマの目が覚めてよかったよ」

当麻「あの…アルフ。ちょっと聞きたい事があるんだけど…」

アルフ「ん？なんだい？」

当麻「フェイトの背中への傷の事なんだけど…」

ピクー！！

アルフの動きが硬直する。

当麻「あの傷はジュエルシールド集めでついたものなの？」

アルフ「違うよ…」

当麻「え？」

アルフ「あの傷は…フェイトの母親に…つけられたんだよ…！」ギリ

静かに拳に力を入れるアルフ。

ポタ…

力を入れ過ぎたせいで彼女の拳からは血が滴り落ちていた。  
衝撃的な事実少年は驚愕する。

当麻「どうして…」

アルフ「アタシにも分かんないよ…でも…あの人はフェイトを愛していない…それだけは確かなんだ…」



当麻「そんな…」

アルフ「トウマ…話の腰を折って悪いけど…アンタの傷は誰につけられたものなんだい？」

当麻「え？これは…不審者に…」

アルフ「昨日の話じゃない。他の傷の話さ」

ビクー！！

当麻「これは…」

アルフ「もしかして…アンタも…親に「ただいま」！？」

突然フェイトの声が聞こえて会話を中断する二人。

フェイト「どうしたの？二人とも…」

当麻「な…何でもないよ…ねえアルフ…」

アルフ「そ…そうだよ」

フェイト「？」

あからさまに態度のおかしい当麻とアルフに疑問を感じたフェイトだったが、その事について言及するような真似はしなかった。

フェイト「当麻には悪いんだけど、今日は私達二人で行動させて欲しいんだ」

当麻「どうしたの?」

フェイト「今日は母さんにジュエルシードの搜索状況について報告をしなくちゃいけないんだ」

当麻「フェイトのお母さんに…」

アルフからフェイトの母親の行いを聞いた少年は心中穏やかではなかった。

フェイト「だから…悪いけど」「フェイト」「え?」

当麻「僕もついて行っていいかな?」

フェイト「いいけど…」

当麻「ありがとう」

アルフ「全く…報告だけなら、アタシが行って来れたらいいんだけどね…」

フェイト「母さんはあまりアルフの言う事をあんまり聞いてくれないもんね…」

当麻「…」

フェイトの身を心配する少年。

アルフ「ま…まあ今日は大丈夫だよ!短期間でジュエルシードを五

つも集めたし、褒められるかはともかく、叱られるようなことは絶対ないよー!」

フェイト「うん…そうだね」

フェイトとアルフが話している最中、上条当麻は右手を強く握り締めていた。

フェイトを理不尽な暴力から守る為に。

その頃、高町なのはは実家にある道場で、姉である高町美由紀の鍛錬を眺めていた。

ユーノ「(なのは?)」

なのは「(ユーノ君?)」

ユーノ「(どうしたの?こんな朝早くから…)」

なのは「(ちょっと目が覚めちゃってね…)」

なのは「それでね…ユーノ君。私…考えたんだけど…上条君とフェイトちゃんのが気になるの…」

ユーノ「気になる?」

なのは「うん。上条君は魔法みたいな力も無いのに…困っている人を助けるのに全力で戦ってた…だけど…何だか凄く無理してるよ…うだった…」

ユーノ「…」

なのは「フェイトちゃんは…凄く強くて…冷たい感じもするの…  
だけど…綺麗で優しい瞳をしていた…なのに何だか凄く悲しそう…」  
黙って少女の話を聞くユーノ・スクライア。

なのは「きつと理由があると思うんだ…ジュエルシードを集めてる  
理由…だから私…あの二人と話をしたい。だからその為に…」

高町なのはは一つの決心をする。

その頃、上条当麻とフェイト・テストロッサとアルフは病院の屋上  
に移動していた。

フェイトはケーキを片手に持っていた。

当麻は右手用の手袋をはめていた。

フェイト「お土産はこれでよし…」と

アルフ「甘いお菓子…ねえ…こんなの…あの人は喜ぶのかね？」

フェイト「分からないけど…こういうのは気持ちだから」

当麻「…」

アルフ「ふん」

フェイト「次元転移…次元座標 8 7 6 C 4 4 1 9 3 3 1 2  
D 6 9 9 3 5 8 3 A 1 4 6 0 7 7 9 F 3 1 2 5」

フェイト「開け…誘いの扉。時の庭園…テストロッサの主の元へ！」

???

???'「上の許可も取れたしそろそろ行動に移るわよ」

???'「前回の小規模次元震以来、特に目立った動きは無いようですが…二組の探索者が再び衝突する可能性は高いですね」

???'「そうね…小規模とはいえ次元震の発生はちよつと厄介だものね…彼女が居るとはいえ…早めに何とかしないといけないわよね…」

???'「大丈夫…分かっていますよ…僕はその為にここにいるんですから」

## 第21話 三人目の魔導師

『私立聖祥大附属小学校』

教室に集まった四人の少年少女達。

仕上「高町…昨日は言い過ぎた…ごめんな…」

アリサ「なのは…ごめん…」

なのは「ううん…私がちゃんとお話を聞いてなかったから…」

一日足らずで仲直りした一同。

すずか「良かった…」

色々な出来事が同時に発生した為、喧嘩している場合ではなくなつたのだらう。

アリサ「なのは…あの…」

なのは「どうしたのアリサちゃん？」

アリサ「上条を見てない？」

なのは「上条君を？」

アリサ「昨日、刃物を持った不審者に襲われて上条に助けてもらったんだけど…」

すずか「上条君がアリサちゃんと一緒に稽古場に来ただけど、何  
時の間にか居なくなってる…学校にも来ていないし…」

そう言っつて月村すずかは上条当麻の席を見る。

なのは「そう…だったんだ…ごめん…私も見てないや…」

昨日の出来事を包み隠さず話すわけにはいかない少女は、少女達に  
嘘をついた。

アリサ「そう…」

仕上「お前等も不審者に襲われたのかよ!？」

「「「え?」「」」

予想外の言葉に軽く動揺する少女達。

アリサ「アンタも襲われたの!？」

仕上「昨日公園に居た時に襲われてな…」

なのは「大丈夫だったの?」

仕上「大丈夫じゃねえと此処にいねえだろ…高町のおっちゃんが助  
けてくれたんだよ」

なのは「お父さんが?」

仕上「こう…一撃で不審者を倒してさ…すっげえかつこよかったぜ  
！」

すずか「なのはちゃんのお父さんは凄いね」

なのは「にゃはは…」

アリサ「でも…上条は一体何処に行ったんだろっね…」

なのは「（上条君…）」

上条当麻の安否を心配する高町なのは。

『時の庭園』

一方その頃、上条当麻はフェイト・テストロッサとアルフの二人と  
フェイトの母親である人物が居ると思われる場所を訪れていた。

当麻「ここに…フェイトのお母さんが…」

フェイト「当麻？どうしたの？」

当麻「何でも無いよ」「ニ」

アルフ「…」

フェイト「じゃあ…私はお母さんに報告をしに行くから…」

当麻「ちよっと待って」



フェイト「どうしたの？」

当麻「その前にフェイトのお母さんにあってもいいかな？」

フェイト「いいと思うけど…」

当麻「直ぐ済むから…」

ギギイ！！

そのままフェイトとアルフを残して、先に進む少年。

フェイト「一体どうしたんだろう？」

アルフ「…」

時の庭園内をある程度進んだ少年は、一人の女性を見つける。

プレシア「貴方は一体何者かしら？」

女性が当麻に声を掛ける。

当麻「貴女が…フェイトの…母親ですか？」

プレシア「質問に質問で返すのは感心しないわね…」

当麻「答えて下さい」

少年の態度に溜息をついた女性は…

プレシア「ええそうよ。私は大魔導師プレシア・テストロッサ。フ  
ェイト・テストロッサの母親よ」

当麻「…」

静かに拳を握り締める少年。

プレシア「貴方はフェイトの知り合いかしら？」

当麻「お願いがあります」

プレシア「生憎私は忙しいの。子供の戯言に付き合っている暇は…」

当麻「もう…これ以上…フェイトを傷付けないで下さい」

普通の彼からは想像も出来ないほど、鋭い目つきでプレシア・テス  
タロッサを睨みつける上条当麻。

プレシア「何かと思えばそんなことか…アルフにでも頼まれたのか  
しら？」

当麻「フェイトを傷付けないでください」

彼女の言葉を無視して、フェイトを傷付けるなど語りかける少年。

プレシア「自分の娘をどう扱おうが、赤の他人に口を出す権利があ  
ると思ってるの？」

当麻「貴方は…自分の娘を何だと思ってるんだ！」

プレシア「うるさいわねえ…人形に配慮なんて要ると思ってるのかしら?」

当麻「フェイトは…フェイトは…人形なんかじゃない!」

我慢の限界を迎えた上条当麻はプレシア・テストロッサに向かって全力疾走する。

プレシア「全く…」

プレシアから放たれる紫色の閃光。

牽制のつもりで放った攻撃だが、少年は全く臆する事無く突っ込んでいく。

牽制が意味ないと理解した彼女は、少年に向かって容赦なく攻撃をする。

大魔導師という言葉は決して飾りではなく、見た目だけで相当高い威力を持っていることが分かる。

少年は閃光に向かって右手をかざす。

何をしているのか全く理解できないプレシア・テストロッサだったが…

バキン!!

少年の右手が閃光に触れた途端、ガラスが割れる様な音が周囲に響き渡り、閃光は跡形も無く消滅した。

プレシア「なっ!?!」

当麻「うおお!!」

プレシア「くっ…」

ビュン!!

上条当麻の拳が空を切る。

一旦、距離を取るプレシア・テストロッサ。

フェイトやアルフが只の人間をこの様な所に連れてくるなど、ありえないと考えていた彼女だった。

せいぜい、目の前の少年は単なる魔導師ではないかと考えていたが…

プレシア「（一体何が…防御したわけでは無く…あの右手に触れた瞬間に…消えた…？）」

あまりにも異質な力を奮う少年。

プレシア「貴方は一体何者なのかしら？」

当麻「只の小学生だよ」

プレシア「笑えない冗談ね…」

プレシアの持っている杖が鞭に姿を変化する。

上条当麻に向かって鞭を奮うプレシア・テストロッサ。

プレシア「はあ!!」

ビュン!

当麻「くっ…!!」

紙一重で攻撃を避ける少年。

フェイトとアルフの特訓の成果もあり、攻撃を喰らう心配は無いと思われたが…

ズキッ！

当麻「痛うー！！」

痛み上がりで激しい動きをした為に、少年の背中に激痛が走る。

バシン！！

当麻「ぐあ…」

鞭が少年の身体に直撃して、閉じていた傷が再び開いた。

ポタポタ…

当麻の背中から滴り落ちる血液。

苦痛に顔を歪める少年。

プレシア「痛み上がりで私に挑むなんてね…そんなにあの人形が大切かしら？」

当麻「フェイトは…人形なんかじゃ…」

プレシア「いいえ…人形よ…」

少年の言葉を容赦なく切り捨てるプレシア・テストロッサ。

プレシア「フェイトは私の大事な娘であるアリシアの代用品よ」

当麻「え？」

プレシア「所詮、偽者は本物にはなれないのよ」

当麻「関係ない……」

プレシア「…何ですって？」

当麻「フェイトはフェイトだ…この世に一人しか居ないんだ…偽者なんかじゃない…!」

グゲグ

再び立ち上がり、プレシアに立ち向かう当麻。

しかし…

バシン!!

当麻「あぐっ…」

プレシア「そんな身体で何ができるって言うの？それに、何故フェイトの為にそこまでするのかしら？」

馬鹿の一つ覚えみたいに立ち向かってくる少年に呆れたように話しかけるプレシア。

当麻「フェイトは…僕の大切な…友達だ…」

プレシア「友達…ねえ…なら…貴方がフェイトの代わりに罰を受けるって言うのかしら？」

当麻「フェイトに…手を出さないなら…」

プレシア「分かったわ…ならば今日の所は帰りなさい…それと今まで集めたジュエルシードの数は？」

当麻「五個…だ…」

プレシア「全然足りないわね…」

バシン！！

当麻「ぐ…」

鞭で当麻を叩くプレシア。

プレシア「次に報告に来る時に、この調子だったらこの程度じゃ済まないわよ？」

そう言つてその場から立ち去るプレシア。

その場に残された上条当麻。

所々服は擦り切れ、背中からは血が流れていた。

当麻「早く戻らなきゃ…フェイトとアルフが…待ってる…」

ギュー！！

包帯をきつく締め、無理やり流れる血を止める少年。

その頃、フェイトとアルフは…

フェイト「遅いね当麻…」

アルフ「うん…」

早く戻ってくると話していた少年が戻って来なくて、若干の不安を感じる二人。

ギギイ…

扉が開く音がする。

そこから、上条当麻が出てくる。  
意外と遅かったけど一体何があったのか当麻に聞こうと思っていたフェイトとアルフだったが…

当麻「ただ…いま…」

所々服が擦り切れ、今にも倒れそうな姿に動揺する二人。

フェイト「当麻!？」

アルフ「どうしたんだい!？」

当麻「何でも…ないよ…」

アルフ「何でも無いって事ないだろ!？まさか…」



当麻「大丈夫だよ…アルフ…フェイト…」

フェイト「でも…」

今にも泣き出しそうなフェイトの姿を見た当麻は、彼女の頭を撫でながら…

当麻「帰ろう?」

フェイト「…うん」

アルフ「…ああ」

その頃、時の庭園内の最深部では…

プレシア「（魔法を完全に無効化する力…詳しい情報は無いけど…ジュエルシードの制御に…使えるかもしれないわね）」

プレシア・テストロッサが思い出すのは先程の少年が発揮した謎の力。

あれが一体どういうものなのか全く見当も付かない彼女だったが…

プレシア「（アルハザードに行く事さえ出来れば…私は…アリシアと…）」

上条当麻とプレシア・テストロッサとの戦いから数時間後、海鳴市でジュエルシードの探索をするフェイトとアルフと当麻。

フェイトとアルフは当麻を休ませようとしたが、少年が二人の言葉を聞く事は無かった。

フェイト「バルディッシュ…どう？」

『バルディッシュ』に話しかけるフェイト。

『Recovery complete』

フェイト「そう…頑張ったね…偉いよ」

アルフ「ジュエルシードの反応を感じるね…アタシにも分かる」

フェイト「もうすぐジュエルシードが発動しそうだね」

顔色の悪い上条当麻の姿を見たフェイトとアルフが声を掛ける。

フェイト「当麻…大丈夫？」

アルフ「無理しなくていいんだよ？」

当麻「大丈夫だよ…」

自宅へ帰る途中に、ユーノ・スクライアと合流する高町なのは。  
ユーノに『レイジングハート』を渡された少女。

なのは「レイジングハート…治ったんだね…良かった…」

『Condition green』

なのは「また…一緒に頑張ってくれる？」

『All right, My master』

なのは「ありがとう…」

それから、少しの時間が経過した。

ジュエルシードを取り込んだ樹木が怪物化した。

ユーノ「封時結界！展開！」

公園がユーノ・スクライアによって作られた結界に包まれる。

遠距離から魔力弾を射出するフェイト。

怪物に向かって射出される魔力弾だったが、怪物が発生させたバリアによって防がれた。

アルフ「おお！生意気に…バリアまで張るのかい？」

フェイト「今までより…強いね。それに…あの子もいる…」

当麻「フェイト…」

フェイト「分かってるよ当麻」

当麻「バリアは僕に任せて…」

フェイト「無理しないでね？」

当麻「…うん」

行動を開始する三人。

高町なのはとユーノ・スクライアに襲い掛かる怪物。

なのは「ユーノ君！逃げて！」

怪物から距離を取るユーノ。

『Flier Fin』

なのはの足元に展開される桃色の羽根。  
怪物の攻撃を避ける少女。

なのは「飛んでレイジングハート！もつと高く！」

『All right』

上空に移動する高町なのは。

バルディッシュを構えるフェイト・テストロッサ。

フェイト「アークセイバー！行くよ…バルディッシュ！」

『Arc Saber』

バルディッシュから展開される金色の魔力刃。

『レイジングハート』を怪物に向ける高町なのは。

『Shooting mode』

射撃に特化した形態に変化する『レイジングハート』

なのは「行くよ！レイジングハート！」

フェイトが放った斬撃が怪物の根を切り裂くが、本体はバリアで防がれた。

なのは「打ち抜いて！」

『レイジングハート』の先端に収束されるエネルギー！。

なのは「デイバイン…バスター！」

フェイト「貫け豪雷！！！」

『Thunder Smasher』

デイバインバスターとサンダースマッシャーをバリアで防ぐ怪物だったが、戦闘の最中で怪物に近付いていた上条当麻が怪物のバリアに右手で触れる。

バキン！！

いとも容易くバリアは破壊されて、怪物に二人の少女の攻撃が直撃する。

怪物の身体からジュエルシードが出現する。

『Sealing mode, Setup』

『Sealing form, Setup』

なのは「ジュエルシード…シリアル7！！！」

フェイト「…封印！！！」

ジュエルシードの封印に成功する高町なのはとフェイト・テストロツサ。

上条当麻の姿を確認するのは。

少しばかり顔色の悪い少年を心配する少女。

なのは「（上条君…大丈夫かな？）」

お互いに向かい合うフェイトとなのは。

フェイト「ジュエルシードには…衝撃を与えたらいけないみたいだ…」

なのは「うん。昨夜みたいな事になったら…私のレイジングハートもフェイトちゃんのバルディッシュも可哀想だもんね…」

フェイト「…貴女のジュエルシードを集める目的だけ聞いて、私が話さないのはフェアじゃないから…」

なのは「え？」

フェイト・テストロツサ予想外の言葉に軽く動揺する高町なのは。

フェイト「私は…お母さんの為に…ジュエルシードを集めている…これが私の目的…」

アルフ「フェイト!？」

フェイトの行動に驚きを隠せないアルフ。

フエイト「…だからこそ…ジュエルシードを譲るわけにはいかない」

『D e v i c e f o r m』

なのは「私は…もつとフエイトちゃんと話がしたい!!」

『D e v i c e m o d e』

なのは「私が勝ったら…只の甘ったれた子じゃないって分かっても  
らえたら…お話…もつと出来ないかな？」

お互いにデバイスを構えて戦いを始めようとした時、彼女達の正面  
に魔法陣が展開された。

???「ストップだ!!ここでの戦闘は危険すぎる!!」

突然の来訪者に呆然とする一同。

???「時空管理局執務官…クロノ・ハラオウンだ!!詳しい事情  
を聞かせてもらおうか…」

## 第22話 時空管理局（前書き）

少しばかり遅くなってしまう申し訳ありません。  
それでは投下させていただきます。



## 第22話 時空管理局

クロノ・ハラオウンが公園に転移する少し前…

『アースラ』

モニターには、ジュエルシードの暴走によって生み出された怪物と、戦闘行動を行っている少年少女達が映し出されていた。

リンディ・ハラオウンが注目しているのは、ツンツン頭の少年。

リンディ「（右手で触れただけで…バリアを破壊した？）」

デバイスの様な力を持っていない単なる少年が行使した謎の力。

リンディ「（この世界特有の力…かしらね…？）」

局員「現地では既に二人の魔導師による戦闘が開始されている模様です」

局員がリンディに告げる。

リンディ「そっ…」

局員「中心となっているロストロギアのクラスはA+…動作は不安定ですが、無差別攻撃の特性を見せています」

リンディ「次元干渉型の禁忌物品…回収を急がないといけないわね…」

一拍子置いてからリンディはクロノに話しかける。

リンディ「クロノ・ハラオウン執務官…出られるかしら？」

クロノ「転移座標の特定は出来ています。命令があればいつでも」

リンディ「それじゃ…クロノ。これより、現地での戦闘行動の停止とロストロギアの回収、戦闘を行っている両名からの事情聴取をお願いね」

クロノ「了解です艦長」

魔法陣を展開するクロノ・ハラオウン。

リンディ「気をつけてね」

クロノに手を振るリンディ。

クロノ「はい…はい…言って来ます…」

魔法陣が発動してその場から消え去るクロノ・ハラオウン。

リンディ「（出来ることなら…クロノには行って欲しくなかったんだけど…）」

クロノが向かった世界は決して安全な世界ではない。

リンディ「（クロノをお願いね…真紀…）」

フェイト・テストロッサと高町なのはの間に割り込むように現われ

たクロノ・ハラウン。

ユーノ「時空管理局…」

当麻「時空管理局？」

なのは「それって一体…」

時空管理局という言葉に全く聞き覚えの無い上条当麻と高町なのは。

アルフは苦虫を噛み潰した様な表情をしていた。

アルフ「まずは二人とも…武器を引くんだ」

クロノの言葉に従ったフェイトとなのは。

一旦、地面に着地する少女達。

クロノ「このまま戦闘行為を続けるなら…」

ドオン！！

突如、上空からクロノ・ハラウンに向けて魔力弾が発射される。

バリアを張ってその攻撃を防ぐクロノ。

アルフ「フェイト！トウマ！助太刀するよ！ここから離れて！」

この場から逃げ出すことを二人に促すアルフ。

クロノに背を向けてジュエルシードを回収しようとするフェイト。

その隙を見逃さなかったクロノは、フェイトに向けて魔力弾を放った。

アルフ「フェイト!!」

フェイト「え？」

咄嗟に後ろを振り向くが、少女には障壁を展開する間も無かった。

当麻「フェイト!!」

しかし、上条当麻が間に割り込み右手を魔力弾に向けた。

本来なら、右手が魔力弾に触れるだけで簡単に打ち消せるのだが…

フラ…

当麻「やば…」

態勢を崩してしまう上条当麻。

プレシア・テストアロツサとの戦いが響いたのだろう。

魔力弾は少年の右手に触れる事無く、少年の身体に直撃した。

クロノ「なっ!?!」

フェイト「当麻!!」

アルフ「トウマ!!」

なのは「上条君!!」

その場に倒れる上条当麻。

クロノの一撃で背中中の傷が再び開いたらしく、少年の背中は徐々に

赤く染まっただけだった。  
想定外の出来事により動揺するクロノ。

アルフ「フェイトはトウマを……ここはアタシが……！」

フェイト「分かった……！」

アルフがクロノを牽制して、フェイトは当麻をこの場から逃がそうとしていたが……

ヒュン……！

ユーノ「消えた……？」

なのは「フェイトちゃん……？」

一瞬でその場から消えたフェイト・テストアツサとアルフ。  
状況が全く理解できないクロノ・ハラオウンとユーノ・スクライア。

クロノ「何が起きているんだ……！」

高町なのはも何が起きているのか理解出来ていなかったが、血を流して倒れている上条当麻の下に駆け寄って、声を掛け続けた。

なのは「上条君！上条君……！」

少女の呼びかけに応えない少年。  
突如、現場に謎の映像が出現する。

リンディ「クロノ！彼はこちらで治療するから、彼女達の誘導をお

願い！」

クロノ「了解しました！」

リンディ・ハラウンに話し掛けられたクロノ・ハラウンは転送専用の魔法陣をその場に展開する。

クロノ「彼をこの魔法陣に！」

当麻を魔法陣に移動させるように促したクロノ。

なのは「上条君！しっかりして！」

しかし、クロノの言葉を無視して少年に話しかけるなのは。彼女自身、血を流して倒れている人間を見慣れていないことから、軽いパニックに陥っていた。

ユーノ「なのは！当麻君を魔法陣に！」

ユーノもなのはに話し掛けるが、彼の声が彼女に届くことはなかった。

このままでは埒が明かないと考えていた二人の下に、一人の少女が近付いてきた。

真紀「何やら大変なことになってるみたいね……」

ユーノ「！？」

突然の人物の来訪に動揺するユーノ。

ジュエルシードの探索中に一度だけ出会った一般人。

背中から血を流して倒れている少年を見ても、全く取り乱していない少女にユーノは一種の不気味さを感じていた。  
結標真紀は高町なのはの下に近付いて…

真紀「落ち着いて…今治療すれば…彼を助けられるから」

真紀の言葉で落ち着きを取り戻したなのは。

真紀「だから…冷静になって…ね？」

なのは「…はい」

真紀「クロノ…上条君をお願い」

クロノ「…了解」

クロノ・ハラオウンは上条当麻の手を取り、魔法陣に向けて移動しようとしていたが…

ビリィ！！

クロノ「ん？」

なのは「え？」

真紀「あらら…」

ユーノ「え…」

リンディ「まあ…」

少年の右手に偶然、クロノのバリアジャケットが触れてしまい全て破れてしまった。

強制的に裸にされてしまったクロノ・ハラオウン。

クロノ「うわああああああああ！！」

なのは「きゃあああああ！！」

結界内に少年と少女の悲鳴が響き渡った。

封印されたジュエルシードを回収する結標真紀。

クロノは真紀から渡された上着を着て、その場に蹲っていた。

その頃、現場からある程度離れた場所に飛ばされていたフェイト・テスタロッサとアルフ。

フェイト「当麻を助けなきゃ！！」

アルフ「駄目だよ！！今出て行っても捕まるだけだ！！」

フェイト「でも！！」

アルフ「トウマが何の為にフェイトをアイツの攻撃から庇ったと思ってるんだい！！」

フェイト「でも……」

アルフ「だから今は一旦退却して、トウマを連中から助ける手段を考えなきゃ……」

フェイト「……うん。ごめんね……アルフ……」



アルフ「(トウマ…無事でいておくれよ…)」

アルフ「(当麻…)」

それから少し時間が経過して、時空管理局に移動した一同。

上条当麻は右手のせいで、移動する事が不可能と思われたが、少年の服から落ちた手袋を発見した結標真紀により、魔法陣による転送を可能としたのであった。

早速医務室に運ばれる上条当麻。

リンディ・ハラオウンは高町なのはとユーノ・スクライアに事情を話してもらおうとしていたが…

真紀「リンディさん。上条君が目を覚ますまで待つてあげたほうがいいんじゃないかしら？」

リンディ「それもそうね。彼女達をお願いね」

真紀「了解」

ブリッジに移動するリンディとクロノ。

なのはとユーノに飲み物を渡す結標真紀。

真紀「大丈夫？」

なのは「はい…ありがとうございます…」

ユーノ「貴方は…」

真紀「この前出会った時は自己紹介していなかったわね。結標真紀

よ

なのは「高町なのはです…」

ユーノ「ユーノ・スクライアと言います」

真紀「なのはちゃんにユーノ君ね」

なのは「あの…上条君は…大丈夫なんですか？」

真紀「ここの医療スタッフは優秀だから大丈夫よ」

そう言つて真紀はなのはの頭を優しく撫でた。

ユーノ「貴方は時空管理局の人なんですか？」

真紀「一応ね」

なのは「ユーノ君。時空管理局って？」

ユーノ「え〜っと…」

真紀「貴方達が暮らしている世界のほかにも幾つもの世界があつて、それぞれの世界に干渉しあうような出来事を管理しているのが時空管理局って言えばいいのかしら？それで、今私達が居るのが数多くある次元世界を自由に移動するその為の船。通称、次元航行船よ」

なのは「？」

真紀の話している内容が殆ど理解出来ないなのは。

真紀「言葉足らずでごめんね」

なのは「い…いえ…そんなことは…」

真紀「まあ…色々あって疲れてるでしょうし…治療が終わるまで休  
みましようか？」

なのは「はい…」

ブリッジに移動した後、医務室に向かったリンディ・ハラウン。  
上条当麻の身体を見るリンディ。

リンディ「(酷いわね…)」

少年の身体には、無数の痣や刃物で刺した傷跡、鞭で叩かれた跡な  
どがあった。

リンディ「(クロノの攻撃から身を挺して守っていたことから、こ  
の子は金髪の女の子と関係がある。それに…この子が右手で触った  
ら…バリアは簡単に破壊されたし…クロノのバリアジャケットも破  
かれた…真紀は何か知っているのかしら?)」

医務室から出て行くリンディ・ハラウン。

リンディ「(何にせよ…まずはあの子達から事情を聞くのが先ね…)」

治療を終えた上条当麻の病室に移動する三人。

なのは「上条君…」

少年の手を握る少女。

心電図を確認するユーノ。

ユーノ「良かった…容態は安定しているみたいだ…」

真紀「ごめんなさいね」

真紀に謝られてどう反応すればいいのか困っているユーノ。

当麻「う…あ…れ？高町さん？」

なのは「良かった…」

うつすらと目に涙を浮かべているなのはを見て、動揺する当麻。  
そんな少年を見て微笑む真紀とユーノ。

当麻「何で結標さんが？それにここは？」

真紀「その事については追々説明させてもらおうわね」

端末を取り出して連絡を取る結標真紀。

真紀「うちの艦長がお話を伺いたいって言うてるけど、大丈夫かしら？」

なのは「大丈夫です」

ユーノ「はい」

真紀「それじゃあ行きましようか。上条君はここで大人しくしててね」

当麻「あの…僕もついていっていいですか？」

真紀「別に構わないと思うけど…大丈夫なの？」

なのは「上条君…無理しないほうが…」

ユ一ノ「二人の言う通りだよ」

当麻「大丈夫だよ」

真紀「…分かったわ。でも、具合が悪くなったら直ぐに言ってね？」

当麻「はい。ありがとうございます」

医務室を出る少年少女達。

上条当麻に時空管理局と自分が此処に居る理由について簡単な説明を行う結標真紀。

途中でクロノ・ハラオウンに合流する一同。

上条当麻から数メートル離れて移動するクロノ。

そんな彼を見て苦笑いする一同。

クロノのバリアジャケットが破れたのは当麻が気を失っている時だった為に、何のことだか全く分からない少年だった。

クロノ「身体は痛むかい？」

当麻「い…いえ。それより…すみませんでした」

クロノ「気にしなくていい。事故とはいえ…僕にも民間人に手を出した責任がある」

当麻「ありがとうございます」

クロノ「ああ…そういえば…いつまでもその格好というのは窮屈だろう。バリアジャケットは解除しても平気だよ」

ここに来てバリアジャケットを解除していないことに気付く高町なのは。

クロノに言われて普段の服装に戻した少女。

クロノ「君も元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」

クロノの言葉が理解できずに首を傾げる当麻となのは。

ユーノ「ああ…そう言えば…そうですね。ずっとこの姿でいたから忘れてました」

ユーノの姿がフェレットから人間の姿に変化する。

ユーノ「はあ…なのはと当麻君にこの姿を見せるのは、久しぶりになるのかな？」

目の前の出来事を受け入れる事が出来ない二人。  
高町なのはは数秒間硬直していて、上条当麻は自分の頬を抓っていた。

真紀「あらら…」



急いでなのはに頭を下げるユーノ。

なのは「でも…ユーノ君が…あう／＼／」

都合の悪いことでも思い出したのか真つ赤になる少女。  
混乱する少女を心配した少年が声を掛ける。

当麻「た…高町さん？大丈夫？」

なのは「か…上条君…何でもないよ／＼／」

当麻「ならいいけど…」

真紀「何かあったのかしら？」

なのは「な…何でもないです！」

真紀「そう？」

事情を知らないメンバーは、高町なのはがここまで慌てる理由が全く分からなかった。

クロノ「その…君達の事情はよく知らないが、艦長を待たせているので、出来れば早めに話を聞きたいんだけど…」

真紀「そう言えばそうね」

ユーノ「あ…は…はい」

当麻「すみません…」



なのは「ごめんなさい…」

クロノ「では…こちらへ」

クロノ・ハラオウンに案内された一同。

ウィーン！

艦長が居ると思われる一室に入る少年少女達。

クロノ「艦長！来てもらいました！」

リンディ「ああ…お疲れ様。まあ…三人とも…どうぞどうぞ…楽しんで？」

当麻「は…はい」

なのは「失礼します」

リンディ・ハラオウンの居る部屋に入る少年少女達。

彼女が居た部屋には、間違った日本文化を彷彿とさせる品々が溢れていた。

当麻「何でししおどしが室内に…」

なのは「にゃはは…」

リンディ「そう言えば…上条君は大丈夫なのかしら？」

当麻「は…はい…大丈夫です」

リンディ「具合が悪くなったら直ぐに言ってね？」

当麻「ありがとうございます」

リンディ「早速だけど…貴方達がロストロギアを集める目的を聞かせて貰ってもいいかしら？」

ユーノ「あ…はい」

リンディに事情を説明するユーノ。

リンディ「なるほど…そうですね。あのロストロギア…ジュエルシードを発掘したのは貴方だったんですね」

ユーノ「それで…僕が回収しよう」と…」

リンディ「立派だわ」

クロノ「だけど…同時に無謀でもある」

なのは「あの…ロストロギアって…何なんですか？」

ロストロギアという単語に聞き覚えの無い高町なのはが質問する。

リンディ「ああ…遺失世界の遺産と言っても分からないわね。えっと…次元世界の中には幾つもの世界があるの…それぞれに生まれ育っていく世界」

当麻「次元世界…」

リンディ「それでね…その次元世界の中で極端に進化しすぎる世界があるの」

なのは「進化しすぎる世界…ですか？」

リンディ「ええ。技術や科学…進化しすぎたそれらが自分達の世界を滅ぼしてしまつて、その後に取り残された失われた世界の危険な技術の遺産…それらを総称して、ロストロギアと呼ぶのよ」

なのは「なるほど…」

当麻「あの…崩壊した世界に住んでいた人は？」

リンディ「残念だけど…」

当麻「そう…ですか」

なのは「上条君…」

クロノ「ロストロギアの使用方法は不明だが、使い方によっては、世界どこるか次元世界さえ滅ぼすほどの力を持つ事もある危険な技術なんだ。だからこそ、然るべき手持きを持って、然るべきに保管されていなければいけない品物なんだ」

リンディ「貴方達が探しているロストロギア…ジュエルシードは次元干渉型のエネルギー結晶体。幾つか集めて特定の方法で起動させれば空間内に次元震を引き起こし、最悪の場合、次元断層さえ巻き起こす危険物…」

クロノ「君とあの黒衣の魔導師が戦っていた時に発生した振動と爆発。あれが次元震だよ」

当麻「…」

なのは「…」

クロノ「たった一つのジュエルシードで、全威力の何万分の一の発動でもあれだけの影響があるんだ。複数個集まった時の影響は計り知れない」

ユーノ「聞いたことあります。旧暦462年の次元断層が起こった時の事を…」

クロノ「ああ…あれは酷いものだった…隣接する平行世界が幾つも崩壊した…歴史に残る悲劇」

リンディ「繰り返しちゃいけないわ…所で上条君？」

当麻「はい？」

リンディ「金髪の子がジュエルシードを集める目的について何か知っていることは？」

当麻「え？」

アースラのモニターで一部始終を見ていたリンディは、少年が黒衣の魔導師と何らかの関わりを持っていることを知っていた。

リンディ「彼女達が戦っていることから、金髪の少女がジュエルシールドを集める目的は、高町さん達とは決定的に異なっているのではないかしら？」

当麻「それは…言えません」

クロノ「君は事の重大さが分かっているのか!？」

上条当麻の胸倉を掴むクロノ・ハラオウン。

予想外の事態に慌てる高町なのはとユーノ・スクライア。

リンディ「上条君…先程も説明した通り、ジュエルシールドは非常に危険な代物なの。だから…もし彼女がジュエルシールドの悪用を考えているのならば、私達は彼女を捕らえなければならぬのよ?」

当麻「フェイトは…ジュエルシールドの悪用なんか考えていません」

リンディ「そうは言ってもね…」

真紀「まあまあ…ここは上条君の言葉を信じましょうよ」

クロノ「真紀さん!？」

リンディ「真紀?」

真紀「それに上条君は病み上がりだから、あまり問い詰めないほうがいいと思いますけど」

リンディ「そう…ね」

クロノ「しかし…!!」

真紀「それに…何かあったら私がなんとかするから…ね？」

クロノ「…分かりました」

結標真紀の言葉を聞いて渋々引き下がったクロノ・ハラオウン。

リンディ「病み上がりなのにごめんなさいね」

当麻「いえ。悪いのは僕ですから…」

リンディ「お話はこんなところね」

そう言っつてリンディ・ハラオウンは、用意していた抹茶の中に砂糖を入れて掻き混ぜた。

当麻&なのは「え？」

リンディ「どうかしたのかしら二人とも？」

当麻「抹茶は砂糖を入れるものじゃないんですけど…」

リンディ「そうなの？でも、美味しいわよ？」

なのは「そうなんですか？」

リンディ「ええ」

真紀「まあ…それが普通の反応よね…」

当麻となのはの態度を見て苦笑する真紀。  
抹茶を飲み終えたリンディ・ハラオウン。

リンディ「これより、ロストログリア…ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

クロノ「君達は今回の事件を忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

なのは「でも…そんな…」

リンディ「上条君も金髪の子に言っておいてね？」

当麻「…はい」

クロノ「これは次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入してもらうレベルの話じゃない」

ユーノ「でも！」

リンディ「まあ…急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう？今夜一晩ゆっくり考えて、貴方達で話し合ってそれから決めましょうっ？」

クロノ「送って行こう。元の場所でもいいね？」

なのは「はい…」

クロノ・ハラオウンに連れられて部屋から出て行く三人。

部屋に残っているのはリンディと真紀の二人だけだった。

リンディ「どうしてあの子を逃がしたの？」

真紀「まあ…気まぐれもあるけど…本音を言えばあまり時間を取らなくなかったんでね」

リンディ「何かあったのかしら？」

真紀「学園都市の暗部が動き出したのよ」

リンディ「学園都市が…」

真紀「目的はおそらくジュエルシードと私の処分」

リンディ「彼等はロストロギアの危険性を認識していないの？」

真紀「認識はしてるでしょう。でも、それくらいで立ち止まる様なまともな人間は少ないのよ…それに…」

リンディ「それに？」

真紀「この世界の人間が『魔法』という力を手に入れた。本来、この世界に存在する筈のない力を」

リンディ「それってつまり…」

真紀「ええ…高町さんの存在が知られたら、彼女が狙われるかもしれない」



リンディ「でも時空管理局の上層部が学園都市の上層部と交渉を…」

真紀「表向きは安全でしょうけど、彼女の安全が保証されるわけじゃない」

リンディ「全く…この世界は本当に危険ね…クロノにはあんまり関わって欲しくなかったんだけど…」

真紀「そのためにも、出来るだけ早めにこの問題は解決しなければいけない」

リンディ「そうね…真紀…聞きたい事があるんだけど…」

真紀「何かしら？」

リンディ「上条君の謎の力についてなんだけど…」

真紀「あれって多分…原石じゃないかしら？」

リンディ「原石？」

真紀「能力者についての説明はしたわよね？」

リンディ「ええ」

真紀「原石って言うのは、人工じゃなくて天然の能力者なのよ」

リンディ「脳の開発を必要としないということかしら？」

真紀「私も詳しいことは分からないんだけどね…それに、上条君の

力は魔術かもしれない」

リンディ「魔術…」

真紀「一度しか見たこと無いから、なんともいえないんだけどね…」

リンディ「問題が山積みで頭が痛いわね…」

真紀「本当にね…」

その頃、クロノに公園まで送ってもらった少年少女達。

なのは「色々な事があったね…」

当麻「うん」

ユーノ「二人の前ですっとフェレットだったことを忘れていたよ…  
二人とも…やっぱり怒ってたりするかな？」

なのは「怒ってないよ」

当麻「そんなことないよ」

ユーノ「ありがとう」

当麻「えっと…同じ年くらい？」

ユーノ「うん」

なのは「とりあえず帰ろうか？」

当麻「そうだね」

ユーノ「このままの姿じゃ色々問題だから、フェレットになっておくね」

フェレットに変化したユーノは、なのはの肩に乗った。

なのは「それじゃあ上条君…またね」

当麻「うん…あれ？」

突如、視界が歪んだ上条当麻はそのまま地面に倒れこんだ。

ユーノ「当麻君!？」

少年の額を触る少女。

なのは「凄い熱…ユーノ君!！」

ユーノ「なのはの家には運ぼう!！」

なのは「うん!！」

## 第23話 それぞれの決意

『高町家』

上条当麻を自宅まで運んだ高町なのはとユーノ・スクライア。  
客間に少年を運んだ少女。

家族に事情を説明することになったなのは。

士郎「そうだったのか…」

恭也「公園を歩いていたなのはが、彼が倒れていたのを発見したと…」

美由紀「大丈夫なのかしら…」

桃子「今は落ち着いているわよ」

なのは「良かった…」

桃子「この前も怪我していたし、上条君も大変ね…」

なのは「うん…」

士郎「浜面君も不審者に襲われていたし…ここのところ色々変な事が起きているね…」

美由紀「なのは。上条君を見てきたらどう?」

桃子「美由紀の言う通りね」

なのは「うん」

客間に移動したなのは。

なのは「（上条君…どうして…こんなになるまで無茶してたの？）」「  
熱で倒れるまで、フェイト・テストロッサのジュエルシードの搜索  
を手伝っていた上条当麻。  
少年が寝言で何か言っている事に気付いたなのはは耳を傾ける。

当麻「父さん…母さん…」

なのは「（そう言えば…上条君の…お父さんとお母さんは…）」

上条当麻は両親を事故で失っている事を思い出す高町なのは。  
もし、彼に両親が居たならばここまでの無茶は許さなかっただろう。

当麻「う…ん？」

なのは「気が付いた？」

当麻「あれ…ここって…」

なのは「私の家だよ」

当麻「また…迷惑を掛けちゃったんだ…」

なのは「そんなことないよ」

当麻「でも…」

なのは「無理しないで…」

当麻の言葉を遮るなのは。

当麻「…」

なのは「上条君…フェイトちゃんの事なんだけど…」

当麻「どうしたの?」

なのは「フェイトちゃんはお母さんの為にジュエルシードを集めてるって…」

当麻「…うん」

なのは「上条君はフェイトちゃんのお母さんがジュエルシードを集める目的って知ってるの?」

当麻「僕もそのことについては…」

なのは「そう…でも…何で…」

何故、フェイトはあそこまで悲しい表情をするのか。

何故、彼女の母親がジュエルシードの搜索を直接行わないのか。

少女の疑問は消えることが無かった。

当麻「フェイトは…ジュエルシードの悪用なんか考えていない…それだけは確かだよ」

なのは「うん…」

ドアの隙間から客間に入ってくるユーノ・スクライア。

ユーノ「目が覚めたんだね」

当麻「ユーノ君もごめんね…迷惑掛けて…」

ユーノ「僕はここの家の人じゃないから何とも言えないけど…気にしないで…」

当麻「…ありがとう」

ユーノ「それで…時空管理局についての話なんだけど…」

なのは「私は…協力したいと思う。もう…民間人とかじゃなくて…私は自分の意思でジュエルシードを回収したいから…」

ユーノ「…分かったよ。それで…当麻君は？」

当麻「僕は…フェイトを放っておくなんて出来ない。だから…高町さん達には悪いけど…」

なのは「大丈夫だよ」

ユーノ「当麻君はそう言うと思っていたよ」

当麻「二人とも…」

なのは「だけど…上条君は無理しちゃ駄目だからね」

ユーノ「君はなのはと違って魔法の力は持ってないからね」

当麻「うん」

桃子「なのは〜!」

なのは「は〜い!ちょっと待っててね!」

ユーノ「僕も時空管理局に連絡するから一旦、なのはの部屋に戻るよ」

上条当麻だけになった客間。

少年はポケットから一つの写真を取り出す。

当麻「父さん…母さん…」

『アースラ』

先程の高町なのはとフェイト・テストアロツサの戦闘映像を眺めていたエイミー。

エイミー「凄いや!どっちもトリプルAクラスの魔導師だよ!」

クロノ「ああ…」

エイミー「こっちの白い服の子は、クロノ君の好みっぽい可愛い子だし〜」



クロノ「エ…エイミイ！そんな事はどうでもいいんだよ！」

エイミイ「魔力の平均値を見てもこの子で127万。黒い服の子で143万。最大発揮時は更にその3倍以上！…クロノ君より魔力だけなら上回っちゃってるね」

クロノ「魔法は魔力値の大きさだけじゃない。状況に合わせた応用力と的確に使用できる判断力だろ？真紀さんが良い例じゃないか」

エイミイ「確かに…クロノ君の方が魔力量が多いのに、クロノ君が模擬戦でボロ負けしちゃったからね」

クロノ「それを言うなよ…」

エイミイ「まあ…それはともかく、クロノ君を信用してるよ？何たってアースラの切り札なんだから」

クロノ「切り札は真紀さんだろう…」

エイミイ「それにしても…」

不満げな顔をする彼女に疑問を感じたクロノ。

クロノ「どうした？」

エイミイ「上条君の事なんだけど…」

クロノ「彼がどうかしたのか？」

エイミイ「彼…一般人の筈なのよね？」

クロノ「そうだが？」

エイミィ「明らかに一般人とは異なる反応が見られるんだけど…魔導師の様な反応でもないし…」

クロノ「どういう反応なんだ？」

エイミィ「何も計測出来ないと言えばいいのかしら？魔法を用いたから、計測できない筈はないんだけど…」

クロノ「…」

上条当麻が自身のバリアジャケットに触れた際に、魔力で構成されたバリアジャケットが破かれた事を思い出すクロノ。

クロノ「一体何者なんだ？」

エイミィ「さあ…」

ブリッジで話しているクロノとエイミィだったが、その最中でリンディが入室してきた。

エイミィ「あ…艦長！」

リンディ「ああ…二人のデータね？」

エイミィ「はい」

握っている椅子に少しばかり力を込めるリンディ・ハラウン。

リンディ「(学園都市の暗部と出会わなければいいんだけど...)」

エイミィ「艦長?」

リンディ「何でもないわ。それにしても…凄い子達ね」

クロノ「これだけの魔力がロストログアに注ぎ込まれれば次元震が起きるのも頷ける」

リンディ「あの子達…なのはさんとユーノ君がジュエルシードを集めている理由は分かったけど、こっちの黒い服の子は何が目的なのかしらね?」

クロノ「随分と必死な様子だった。何か余程強い目的があるのか…やはり…彼から話を聞いた方が…」

リンディ「彼が素直に話してくれるとは思えないわ」

エイミィ「そうですね…」

リンディ「目的ね…(まだ小さな子なのに…普通に育っていればまだ母親に甘えていた年頃でしょうに…)」

上条当麻の身体に刻まれた無数の傷を思い出すリンディ・ハラオウン。

リンディ「(きっと…普通では…ないのよね…)」

クロノ「上条当麻が黒衣の魔導師と関わりがあるのは確かなんだ。

エイミィ、彼について調べておいてくれ」

エイミィ「了解」

『マンション』

フェイト・テスタロッサとアルフはマンションに帰宅していた。ちなみに絹旗最愛はフェイト達が忙しいので、八神はやての家にお世話になっていた。

アルフ「駄目だよ…時空管理局まで出てきたんじゃ…もうどうにもならないよ！逃げようよ…三人で…どこかにさ…」

フェイト「それは…駄目だよ」

アルフ「だって！雑魚クラスならともかくアイツラは一流の魔導師だ！トウマだって捕まえられたままだし、本気で捜査されたらここだって…何時までバレずにいられるか…あの鬼婆…あんたの母さんだって訳分かんない事言うし、フェイトとトウマに酷いことするし…」

フェイト「母さんの事…悪く言わないで…」

アルフ「言うよ！だってアタシ…フェイトの事が心配なんだ！フェイトが悲しんでいると、アタシの胸も千切れそうに痛いんだよ！フェイトが泣きそうだと、アタシも目と鼻の奥がツンとして、どうしようもなくなるんだ！フェイトが泣くのも悲しむのも…アタシ…嫌なんだよ…！」

フェイト「私とアルフは、少しだけ精神リンクしてるからね…」

めんね。アルフが痛いなら…私もう悲しまないし、泣かないよ…」

アルフ「アタシはフェイトに笑って、幸せになってもらいたいだけなんだ！何で、何で分かってくれないんだよ！！トウマの気持ちはどうするんだよ！！」

フェイト「ッ…」

アルフ「トウマだって、フェイトの事を心配してるんだよ！！アイツの攻撃からフェイトを身を挺して庇ったり、どんなに酷い怪我しても他人の事を優先して…だから、フェイトが無茶したらトウマは自分を責めるじゃないか！」

他人の痛みを自分の痛みとして受け取る少年。

上条当麻と過ごしてきたフェイト・テストロツサとアルフは少年の本質を理解していた。

フェイト「ありがとうアルフ…でもね…私…母さんの願いを叶えてあげたいの。母さんの為だけじゃない…きっと…自分の為…だからもう少し…後もう少しだから…私と一緒に頑張ってくれる？」

アルフ「約束して。絶対に無茶しないって、そしてあの人のいいなりじゃなくて、フェイトはフェイトの為に、自分の為に頑張るって…！そしたら、アタシは必ずフェイトを守るから…！」

フェイト「うん…」

アルフ「そのためにも、トウマは時空管理局から連れ戻さなくちゃ！」

フェイト「(当麻…お願い…どうか無事で居て…)」

上条当麻を時空管理局から連れ戻すために作戦を練るフェイトとアルフだった。

『高町家』

ユーノ「だから、僕もなのはもそちらに協力させて頂きたいと…」

クロノ「協力ねえ…」

ユーノ「僕はともかく…なのはの魔力はそちらにとっても有効な戦力だと思います。ジュエルシードの回収、あの子達との戦闘、どちらにしてもそちらとしては便利に使える筈です」

リンディ「うん…中々考えてますね。まあ…それならいいでしょう」

クロノ「か…かあさ…艦長!？」

リンディ「手伝ってもらいましょう。こちらとしても切り札は温存したいもの。ね…クロノ執務官?」

クロノ「…はい」

リンディ「条件は二つよ」

ユーノ「条件とは?」

リンディ「両名とも身柄を一時、時空管理局の預かりとすること。

それから、指示を必ず守ること。よくって?」

ユーノ「分かりました」

クロノ「上条当麻の返答は?」

ユーノ「彼はこのまま普段の生活に戻るそうです」

正直に金髪の少女に協力すると言うことを話せば、最悪、上条当麻が捕まってしまう危険性があるため、ユーノ・スクライアは嘘をつくことに決めた。

リンディ「そう...」

ユーノが時空管理局に連絡を行っている頃、高町なのはは母親である高町桃子の食器片付けの手伝いを行っていた。片付けの最中に念話をするなのはとユーノ。

ユーノ「(なのは。決まったよ)」

なのは「(うん。ありがとうユーノ君)」

なのはがユーノと念話をしている最中に裏山に出掛けた高町士郎と高町恭也、そして高町美由紀も二人の見学として彼等と一緒に出掛けた。

桃子「なのは。上条君は目を覚ましたかしら?」

なのは「うん」

桃子「良かったわね…何だか凄く辛そうだから」

なのは「辛そう?」

桃子「一人で全て抱え込んでいそうだから」

なのは「抱え込む…」

桃子「何かがなのはに似ているのかしらね?」

なのは「そうかな?」

桃子「何だか保護欲を掻き立てられる所も似ているかな?」

なのは「お母さん…ちょっと話があるけどいいかな?」

桃子「?」

食器片づけが終わり、ソファーに座るのはと桃子。

これまでの出来事を語るなのは。

ユーノ・スクライアからの出会いから今まで起きた出来事を、そして家を空けなければいけないということ。

もちろん、魔法やユーノの正体について明かす訳にはいかなかったので、そこは内緒にしていたが…

なのは「もしかしたら…危ないことなのかも知れないけど…大切な友達と一緒に始めたこと、最後までやり通したいの」

桃子「そのやりたいことには上条君も関わっているのね?」



なのは「うん…心配掛けちゃうかもしれないけど…」

桃子「それはもう…何時だって心配よ？お母さんはお母さんだから、なのはの事が凄く心配。ただどね、なのはがどっちにするかまだ迷ってるなら、危ないことは駄目よって言うと思っけど、でも…もう決めちゃってるんでしょ？」

なのは「うん…」

桃子「友達と始めた事、最後までちゃんとやり通すって、なのはが出会ったその女の子ともう一度話してみたいって…」

なのは「うん」

桃子「じゃあ…いつてらっしやい。後悔しないように。お父さんとお兄ちゃんはお母さんがちゃんと説得してあげる」

なのは「うん。ありがとうお母さん！」

桃子「でも、出発するのは明日にしておきなさいね？上条君も居るんだし」

なのは「にやはは…そうだね」

客間に移動するなのは。

部屋に入る前に、高町なのはは上条当麻が何かを見ていることに気付く。

なのは「（あれって…写真…なのかな？）」

客間に入るなのはに少しばかり動揺する当麻。  
慌てて写真を隠そうとする少年。  
普段はあまり見られない姿に思わず顔が緩む少女。

なのは「上条君。何を見てたの?」

当麻「えっと…これは…その…」

なのは「見せてもらってもいいかな?」

当麻「…うん」

若干照れながら少女に写真を渡す少年。

渡された写真を見る高町なのは。

その写真に写っていたのは、優しい笑顔浮かべる男性と綺麗な笑顔の女性、今では考えられないほどの笑顔を浮かべている上条当麻の姿だった。

なのは「これって…上条君のお父さんと…お母さん…なの?」

当麻「…うん」

頭を掻きながらなのはの問いに答える当麻。

なのは「とても優しいそうだね」

当麻「あ…ありがとう／＼」

なのは「はい。ありがとね上条君」

当麻「うん」

なのは「あのね…さっきユーノ君から連絡があったんだけど…時空管理局の人達が協力することを認めてくれたって」

当麻「そうなんだ」

なのは「でも…何だか私とユーノ君は一時的に時空管理局に行かなくちゃ行けないんだ」

当麻「大丈夫？」

なのは「大丈夫だよ」

当麻「無理しないでね…」

なのは「上条君がそれを言っっちゃ駄目だよ」

当麻「そんなことないと思うけど…」

なのは「そうだよ」クスクス

当麻「ははは…」

なのは「明日から時空管理局に行かなきゃいけないんだ」

当麻「そっか…気をつけてね」

なのは「うん…それじゃあ上条君…おやすみ」

当麻「おやすみなさい」

それぞれの物語を進める為に眠りにつく上条当麻と高町なのはだっ  
た。

『時の庭園内』

空中に浮いている5個のジュエルシードを眺めるプレシア・テスト  
ロツサ。

プレシア「早く…早くなさい…フェイト…！約束の地が…アルハザ  
ードが待ってるの…私の…私達の救いの地が…」

## 第24話 緊急事態

翌日、高町なのはとユーノ・スクライアは時空管理局へ向かい、上条当麻はマンションに帰宅した。

『マンション』

アルフ「突入方法は危険だけど…それしか手段が無いか…」

フェイト「うん…だけど…当麻が待ってる」

アルフ「それじゃ行こうか!！」

上条当麻を時空管理局から連れ戻す計画を練ったフェイトとアルフは今すぐ行動を起こそうとしていた。

ピンポーン!

アルフ「何だ?」

フェイト「もしかして…時空管理局が…」

アルフ「幾らなんでも早過ぎると思うけど…とにかくアタシが出るよ」

フェイト「アルフ…気をつけてね」

恐る恐るドアノブを捻ってドアの前に居る人物を確認するアルフ。そこに居たのは…

アルフ「トウ…マ？」

当麻「遅くなつてごめん」

フェイト「当麻なの？」

時空管理局に拘束されている筈の少年がこの場に居る事に動揺を隠せないフェイトとアルフ。

当麻「うん」

アルフ「どうやって逃げ出してきたんだい！？」

当麻「話を聞かただけで捕まった訳じゃないから…」

フェイト「良かった…」

アルフ「何だよそれ…」

力が抜けてフェイトとアルフはその場にへたり込んだ。

当麻「ど…どうしたの二人とも！？」

フェイト「ちょっとね…」

アルフ「トウマを助ける為にフェイトと色々な作戦を練って、今から行動に移すつもりだったんだよ」

当麻「…ごめんなさい」

フェイト「全く…当麻は心配ばかり掛けて…でも無事だったんだから良かったよ」

当麻「ありがとうフェイト」

嬉しそうな表情を見せるフェイトとアルフに釣られて自然と笑顔になる当麻。

アルフ「トウマ…その手に持つてるのは何だい？」

当麻「ここ最近色々忙しかったからね…今日はハンバーグを作ろうかなって…」

アルフ「ヨッシャアアア!!」

フェイト「ア…アルフ!？」

当麻「どうしたの!？」

アルフ「これが喜ばずにいられるかい!!ハンバーグが食べれるんだからさ!!!」

上条当麻が二人に料理を振舞っていた時期に、アルフは少年の作ったハンバーグが一番のお気に入りとなっていた。

当麻「それと…翠屋のケーキを貰ったんだけど…」

アルフ「それって…あの滅茶苦茶美味いやつかい!？」

当麻「そつだよ」

フェイト「少しは落ち着いてアルフ…」

テンションが非常に上がっているアルフを苦笑いしながら落ち着かせるフェイト。

当麻「それじゃあ早速作り始めるよ」

アルフ「はい！」

フェイト「あの…当麻。ちょっといいかな？」

当麻「どうしたの？」

フェイト「今度私に料理を教えて貰いたいんだけど…」

当麻「僕でよければ」

フェイト「ありがとう」

上条当麻が作り終えたハンバーグを、凄まじい速度で食べるアルフとそんな彼女を微笑みながら見るフェイト。

当麻「（フェイトは何を言ったってジュエルシードを集めることをやめないけど…プレシアはフェイトの事を…）」

フェイト・テストロッサは母親であるプレシア・テストロッサの為にジュエルシードを集めている。

しかし、フェイトの想いとは裏腹にプレシアは彼女の事を欠片たり



とも愛していない。

そのことについて考えていた上条当麻。

怪訝な表情をしている少年を不思議に思った少女。

フェイト「どうしたの当麻。もしかして…焼けてなかったの？」

アルフ「それならアタシが食べようか!？」

当麻「違つよ…」

彼女の笑顔を守る為に静かに拳を握る上条当麻だった。

『八神家』

一方その頃、絹旗最愛は八神はやての自宅にて昼食を取っていた。

最愛「これは超美味しいですよ!!」

はやて「超美味しいなんて嬉しいこと言ってくれるな」

年下の少女とは思えないほどの速度で料理を食べ進める最愛の姿に、豪快な食べっぷりだと感心していたはやて。

最愛「ご馳走様でした!!」

はやて「喜んでくれたようで何よりや」「ニ」

最愛「でも…迷惑じゃなつたですか？」

はやて「そんなことないで?最愛ちゃんが出来てから私も楽しんどる

からな」

最愛「ありがとうございます」

はやて「それにしても…上条君とフェイちゃんとアルフは今頃何を  
しとるんやろな？」

最愛「何だか色々忙しいとか言っていましたけど…」

はやて「うん…」

最愛「もしかして…デートですかね？」

はやて「!？」

最愛「あの二人は年も近いみたいですし…」

はやて「…そうなんかな？」

最愛「それは分かりませんが…」

はやて「もしそうやったら…ふふふ…」

いきなりドス黒いオーラを放ち始めた八神はやてに恐怖を覚える絹  
旗最愛だった。

『アースラ』

リンディ「というわけで…本日0時を以って、本艦全クルーの任は、  
ロストロギア…ジュエルシードの搜索と回収に変更されます。また、

本件においては特例として問題のロストログアの発見者であり結果魔導師でもあるこちら……」

ユーノ「はい！ユーノ・スクライアです！」

リンディ「それから……彼の協力者でもある現地の魔導師さん」

なのは「た……高町なのはです」

リンディ「以上2名が臨時局員の扱いで事態に当たってくれます」

なのは&ユーノ「よろしくお願いします」

クロノ・ハラオウンが自分を見ている事に気付いた高町なのは。軽く会釈するなのは。

クロノの頬が赤く染まり軽く慌てる。

真紀「（なるほど……青春ねえ……）」「ニヤニヤ

ユーノ「む……」

クロノの態度に若干不機嫌になるユーノ。

リンディ「（あらあら……）」「ニヤニヤ

簡単な自己紹介が終了してブリッジに呼び出されたユーノとなのは。

リンディ「じゃあここからは、ジュエルシードの位置特定はこちらですわ。場所が分かったら現地に向かってもらいます」

なのは「&ユーノ」「はい!!」

エイミー「艦長。お茶です」

リンディ「ありがとう」

エイミーから渡されたお茶の中に大量の砂糖とシロップを入れるリンディ。

その姿を見てドン引きする高町なのは。

リンディ「ん〜美味しいわね〜 そう言えばなのはさん。学校の方は大丈夫なのかしら?」

なのは「あ…はい。家族と友達には説明してありますので…」

リンディ「そう…」

真紀「なのはちゃん。ちょっといいかな?」

ブリッジに居た結標真紀が声を掛ける。

なのは「は…はい」

真紀「エイミーも大丈夫?」

エイミー「ええつと…」

リンディ「大丈夫よエイミー。真紀についていってあげなさい」

エイミー「は…はい」

真紀「ありがとございませう艦長」ニコニコ

リンディ「行ってらっしゃい」ニコニコ

真紀が考えていることを察したリンディが笑顔で少女達を見送った。

二人に連れられてブリッジから出て行く高町なのは。

ユーノ「僕はついて行った方がいいのかな？」

リンディ「野暮な真似はしちゃ駄目よ」

ユーノ「？」

リンディの言った言葉の意味が分からず首を傾げるユーノ・スクラ  
イアだった。

アースラの休憩室と思われる場所に来ていた少女達。

なのは「それで…お話って？」

真紀「いや、なのはちゃんがどんな経緯で魔法に関わるようになったのか詳しく知りたくてね」

エイミィ「あ…それ私も気になる」

目を輝かせて少女に質問する真紀とエイミィ。

なのは「え…と…その…」

戸惑いながらもユーノと出会った経緯を語る高町なのは。

なのは「それで…ジュエルシードの暴走によって生まれた怪物に襲われた時に上条君に助けてもらって…／＼／」

真紀「ほほう…」「ニヤニヤ

エイミィ「なるほどなるほど…」「ニヤニヤ

なのは「この前だって…同じ年位の男の子と女の子がジュエルシードの暴走によって巻き込まれた時も…全力で怪物に立ち向かって…ヒーローみたいで…／＼／」

ユーノと出会った経緯ではなく、上条当麻についての話をする少女。

真紀「ありがとうね高町さん」「ニコニコ

エイミィ「（クロノ君…上条君は強敵だよ…）」

なのは「は…はい…」

真紀「ということとはつまり…なのはちゃんは上条君が気になってるってことね?」

なのは「ええっと…その…あう…／＼／」

真紀「青春してるわねえ…」「ニコニコ

『私立聖祥大附属小学校』

子萌「…そういうわけで、高町ちゃんはご家庭の事情で何日か学校をお休みするそうなのですよ」

アリサ「…」

子萌「でも、病気や怪我や不幸な事があってお休みするというわけではないとの事ですから、心配しなくても大丈夫なのですよ」

仕上「先生、上条は？」

子萌「それが…上条ちゃんは全く連絡が無いんですよ…どうしたらいいんでしょうかね」

無断で小学校を休んだ上条当麻を心配する月詠子萌。

子萌「…とにかく、高町ちゃんがお休みの間…ノートとプリントは…」

アリサ「私が届けます!」

子萌「アリサちゃん…それじゃあよろしくなのですよ」

アリサ「はい!」

子萌「上条ちゃんは」と…」

仕上「それなら俺がやるぜ」

子萌「お願いしますね浜面ちゃん。さて!それじゃあホームルーム

を始めましょう!」

すずか「(なのはちゃんと上条君…元気にいるかなあ…)」

小学校に来ていない二人を心配する月村すずかだった。

高町なのはとユーノ・スクライアが時空管理局に来てから数日が過ぎた。

ジュエルシードの暴走によって生み出された怪物と戦う二人。

ユーノ「捕まえた!なのは!」

なのは「うん!」

『Sealing mode・Set up.』

『Stand by・Ready.』

なのは「リリカル!マジカル!ジュエルシード!シリアル8!封印!」

『Sealing』

封印されたジュエルシードを回収するのは。

『Received Number 8』

局長「終了です。ジュエルシードナンバー8を無事確保、おつかれさま…なのはちゃんにユーノ君」



なのは「はい」

局長「ゲートを作るね。そこで待ってて」

二人の戦闘の様子をアースラのモニターを通して見ていたリンディ・ハラオウン。

リンディ「ん〜…二人とも中々優秀だね。このままうちに欲しいくらいかも…」

その頃、エイミイはフェイト・テストロッサについて調べていた。

エイミイ「この黒い服の子…フェイトって言ってたっけ？」

クロノ「フェイト・テストロッサ…かつての大魔導師と同じファミリーネームだ」

エイミイ「え？そうなの？」

クロノ「大分前の話だよ。ミッドチルダの中央都市で、魔法実験の最中に次元干渉事故を起こして追放されてしまった大魔導師…」

エイミイ「その人の関係者？」

クロノ「さあね…本名とは限らない。それよりエイミイ…上条当麻については…」

エイミイ「彼について分かった情報は、何の変哲もない民間人ということだけかしら。それと…半年前に両親を事故で失っているわね…」

クロノ「そうか…しかし…」

魔法をいとも簡単に打ち破る右手。

そのような力を持つている少年が只の一般人であるなどクロノは信じていることが出来なかった。

クロノ「黒衣の魔導師は見つけられたか？」

エイミィ「あゝあゝやっぱり駄目だ…見つからない。フェイトちゃんてば…よっぽど高性能のジャマー結界を使っているみたい…」

クロノ「上条当麻の身柄を確保して話を伺いたい所だが、彼の右手の特性上、恐らく居場所を特定することが出来ないからね…」

そう言ってクロノはモニターに映し出された狼形態のアルフの姿を見る。

クロノ「使い魔の犬…多分…コイツがサポートしているんだ」

エイミィ「おかげでもう…2個もこっちが発見したジュエルシールドを奪われちゃってる…」

クロノ「しっかし探して捕捉してくれ。頼りにしてるんだから」

エイミィ「はいはい…」

アースラの廊下を移動しているのはとユーノ。

なのは「フェイトちゃん達現われないね…」

ユーノ「うん…」つちとは別にジュエルシードを集めていつている  
みたいけど…」

なのは「うん…」

その頃、何処かの湖らしき場所にフェイト・テストロッサ達は居た。

アルフ「フェイト…トウマ…駄目だ…空振りみたいだ…」

フェイト「そう…当麻？」

顔色の優れない少年を心配した少女が声を掛ける。

当麻「何でもないよ」

アルフ「(トウマ…)」

アルフが思い出すのは数日前の出来事。

上条当麻がプレシア・テストロッサに用があるとアルフに話して、  
フェイトに無断で向かった時の事。

何の用事があるのか全く分からないアルフだったが、ボロボロにな  
って出て来た少年の姿を見たアルフは、再びプレシアが少年を傷付  
けたことを理解する。

プレシアに少年を傷付けた理由について問い詰めたアルフは、少年  
が少女の代わりにお仕置きを受けているという事実を知ってしまう。

アルフ「トウマ…どうしてそんなことを…」

当麻「フェイトには内緒にしておいてね…フェイトがこのことを知

「つたらきつと自分を責めるから…」

アルフ「でもアンタはどうするんだい!？」

当麻「大丈夫だよ…慣れてるから…」

アルフ「慣れてるって…!」

当麻「僕は…大丈夫だから…」

アルフ「(このままじゃ…いけない…トウマもフェイトも…あの人の道具じゃないんだ…!)」「ギリ

フェイト「当麻…あまり無理しないでね?」

当麻「うん…ありがとうフェイト」

アルフ「…やっぱ…向こうに見つからないように…隠れて探すのは中々難しいよ」

フェイト「うん…でも…もう少し頑張ろう?」

『アースラ』

高町なのはとユーノ・スクライアがアースラに移ってから10日が経った。

なのは達が手に入れたジュエルシードはシリアル8とシリアル12の計2個。

フェイト達が手に入れたのがシリアル2とシリアル5の計2個。ブリッジで話していたクロノとリンディ。

クロノ「あと6個か…」

リンディ「残り6個…見当たらないわね」

クロノ「搜索範囲を地上以外まで広げています。海が近いので、もしかするとその中かも…例の黒い服の子と合わせてエイミィが搜索してくれています」

リンディ「そう…」

高町なのはに用意されていた部屋で話しているのはとユーノ。

なのは「今日も空振りだったね」

ユーノ「うん…もしかしたら結構長く掛かるかもね…なのは…ごめんね…寂しくない？」

なのは「別に…ちつとも寂しくないよ。ユーノ君と一緒にだし、一人ぼっちでも結構平気」

ユーノ「…」

なのは「小さい頃はよく一人だったから、私がまだ小さい頃にね、お父さんが仕事で大怪我しちゃって、暫くベッドから動けなかったことがあるの…」

ユーノ「そうだったんだ…」

なのは「喫茶店も始めたばかりで今ほど人気が無かったから、お母

さんとお兄ちゃんはいつもずっと忙しくて、お姉ちゃんはずっとお父さんの看病で、だから…結構慣れてるの…」

ユーノ「そっか…」

なのは「そう言えば私…ユーノ君の家族の事とかあんまり知らないね」

ユーノ「ああ…僕は元々一人だったから」

なのは「そっなの？」

ユーノ「両親は居なかったんだけど、部族の皆に育ててもらったから、だからスクライアの一族皆が僕に家族なんだ」

なのは「そっか…ユーノ君…色々片付けたらもっと沢山…色んなお話ししようね？」

ユーノ「うん。色々片付いたらね…」

なのは「フェイトちゃんや上条君と一緒に皆でね」

ユーノ「そっだね」

なのは（色々片付いたら…ジュエルシードの問題が片付いたら…きつと私達は…）

ビー！！ビー！！

アースラ内に突如、響き渡る警告音。

局員「エマージェンシー！ 捜査区域の海上にて大型の魔力反応を感じ！」

海上のモニターを見ていたエイミィ。

エイミィ「な…なんてことしてるのあの子達!？」

海上で大規模な魔法陣を展開するフェイトと彼女をサポートするアルフと当麻。

フェイト「アルカス…クルタス…エイギアス…煌めきたる天神よ、今導きの元、降り来たれ。バルエル…ザルエル…ブラウゼル」

魔法陣から大量の雷が放出されていた。

アルフ（ジュエルシードは多分…海の中にあるから、海に電気の魔力流を叩き込んで強制発動させる。

そして位置を特定する。アタシもサポートしてるけど…そのプランは間違つてないけど…でも…フェイト!）

当麻「フェイト…」

フェイト「撃つは雷、響くは豪雷。アルカス…クルタス…エイギアス…!」

フェイトの頭上に巨大な眼が出現する。

そして、彼女の周囲に大量の眼が現われる。

フェイト「はあああ!」

彼女の周囲の眼から大量の雷が海に降り注ぐ。  
海に打ち込まれた魔力流に反応したジユエルシードがその場に出現した。

フェイト「はあ…はあ…」

アルフの手助けがあったとはいえ相当消耗しているフェイト。

フェイト「見つけた…残り6個…！」

アルフ（こんだけの魔力を打ち込んで…更に全てを封印して…こんな…アタシがサポートしても…フェイトの魔力でも絶対に限界を超える！）

フェイト「アルフ！空間結界を！当麻はサポートをお願いします！」

アルフ「ああ！任せといて！」

当麻「分かった！」

アルフは上条当麻とフェイト・テストロッサの姿を見る。

アルフ（だから…誰が来ようが…何が起きようが…アタシが絶対…フェイトとトウマを守ってやる…！）

フェイト「行くよ…バルディッシュ…頑張ろう…！」



## 第25話 造られた生命（前書き）

何とか年末に投下することが出来ました。  
来年もよろしくお願いします。

## 第25話 造られた生命

『アースラ』

ブリッジのモニターで海上の様子を眺めていたアースラのメンバー達。

モニターにはフェイト・テストロツサと彼女の使い魔であるアルフ、民間人である筈の上条当麻の姿があった。

エイミィ「どうして上条君が……」

クロノ「元の生活に戻ると言ったのは嘘だったんだろう……」

真紀「上条君については後回しでいいでしょ？それより今は……」

6個のジュエルシードを封印しようとしているフェイトに注目するスタッフ達。

リンディ「何とも呆れた無茶をする子だわ」

クロノ「無謀ですね……間違はなく自滅します。それに、あれは……個人の出せる魔力の限界を超えている」

真紀「いくらなんでも一気に6個は危険でしょうに……」

ブリッジに到着した高町なのはとユーノ・スクライア。

なのは「フェイトちゃんに上条君……！」

モニターの映像を見た少女は動揺していた。

なのは「あの！ 私急いで現場に！！！」

クロノ「その必要はないよ。放っておけばあの子は自滅する」

なのは「え…？」

クロノ「仮に彼女達が自滅しなかった所で、力を失った所を叩けばいい」

なのは「でも！」

クロノ「今の内に捕獲の準備を！」

局員「了解！」

海上ではフェイト達が暴走したジュエルシードの魔力流に襲われていた。

フェイト「く…！」

アルフ「フェイト！！」

魔力流に襲い掛かれて体力を消耗するフェイト。

当麻「アルフ！僕をフェイトの近くに！」

アルフ「分かった！！」

アルフに襲い掛かる魔力流を右手で打ち消しながら、上条当麻は少女の隣まで移動することに成功した。  
フェイトに襲い掛かる魔力流を右手で破壊する当麻。

当麻「フェイト…大丈夫？」

フェイト「なんとか…ありがとう当麻…」

アルフ「でも…このままじゃ…」

一時的に危機を脱した少年少女達だったが、危機的状況であることに変わりはない。

更に体力を消耗していた彼女達は徐々に動きが鈍くなっていた。

その様子をモニターから見ていたアースラのスタッフ達。

リンデイ「私達は常に最善の選択をしなければいけないの。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実…」

真紀「それが組織なのよ」

なのは「でも…」

ユーノ「(行って!)」

念話でユーノに話しかけられるなのは。

ユーノ「(なのは!行って!僕がゲートを開くから、行ってあの子達を!)」

なのは「(でもユーノ君!私はあの子と…フェイトちゃんと話をし

たいけどユーノ君とは…！」

ユーノ「（確かに関係ないかも知れない…だけど、僕はなのはが困ってるなら力になりたい。なのは達が僕にしてくれたみたいに…）」

ゲートが勝手に起動して同様を隠せないスタッフ達。

クロノ「君は！」

ゲートに向けて駆け出した高町なのは。

クロノがなのはを追い駆けるが、ユーノが両手を広げて少年の前に立ち塞がった。

二人の勝手な行いに怒りを露にするクロノ・ハラオウン。

転送用の魔法陣まで移動した彼女は…

なのは「ごめんなさい！高町なのは…指示を無視して勝手な行動をとります…！」

ユーノ「あの子の結界内へ…転送！」

フェイト達が居ると思わしき世界に転移した少女は上空に居た。

なのは「行くよ…レイジングハート」

待機状態の『レイジングハート』を取り出す少女。

なのは「風は空に…星は天に…輝く光はこの腕に…不屈の心はこの胸に…！レイジングハート！セットアップ！」

『Stand by・Ready.』

雲の下まで降りた彼女は、フェイト達を発見した。その場に高町なのはが現われた事に気付いた一同。

当麻「（高町さん…）」

なのは「（上条君…）」

少女の姿を確認したアルフは、当麻を背中に乗せたままなのはに襲い掛かった。

アルフ「フェイトの……邪魔をするなあああ!!」

当麻「待つてアルフ!!」

アルフ「当麻!？」

上条当麻に動きを止められて軽く動揺するアルフ。

アルフ「どうして止めるんだい!?!こいつらはフェイトの邪魔を…」

アルフと当麻の目の前に魔法陣が展開されて、そこからユーノ・スクライアが現れた。

ユーノ「違う!僕達は君達と戦いに来たんじゃない!」

当麻「ユーノ君…?」

アルフ「戯言を…」

当麻「駄目だ！」

ユーノに襲い掛かるうとしたアルフを必死に止める少年。  
彼等の様子を見ていたリンディ達。

クロノ「馬鹿な！何やってんだ君達は！？」

なのは「（ごめんなさい！命令無視はちゃんと謝ります！けど！放つておけないの！）」

ユーノ「まずはジュエルシールドを停止させないと…まずいことになる！だから今は封印のサポートを！」

魔力で編んだ鎖で魔力流を縛るユーノ。

彼の必死な姿を見たアルフと当麻。

当麻「アルフ！ユーノ君のサポートを！」

アルフ「…分かったよ」

ユーノのサポートを行うアルフ。

ユーノ「…ありがとう」

アルフ「別にお礼を言われるもんじゃないさ…」

当麻「ユーノ君…頑張ろう」

ユーノ「…うん！」

フエイト・テスタロッサの元へ移動する高町なのは。

なのは「フエイトちゃん！」

フエイト「…」

なのは「手伝って！ジュエルシードを止めよう！」

フエイト「え？」

自身の魔力をフエイトに与えたなのは。

そんな彼女にどう反応すればいいのか分からずに戸惑うフエイト。

『Power charge』

魔力を受け取った『バルディッシュ』が再び強い輝きを放つ。

『Supplying complete』

なのは「二人できっちり半分こ！」

アルフはユーノと協力して魔力流の動きを抑えていた。

上条当麻は空を飛ぶことが出来ない上、彼が乗っているアルフは魔力流に近付くことが出来ない。

しかし、彼はアルフの背中から魔力流に向かって飛び降りた。

アルフ「トウマ！？」

ユーノ「危険すぎる！…！」



当麻「おおおおおー!!」

バキン!!

魔力流に右手が触れて跡形も無く消滅した。  
落下していた少年をアルフが上手に捕まえた。

アルフ「全く…無茶してくれちゃって…」

ユーノ「本当だよ…」

当麻「う…ごめんなさい」

なのは「上条君とユーノ君とアルフさんが止めてくれてる!だから今の内に!二人でせうので一気に封印!」

未だに同様に隠せないフェイトは上条当麻の方向を向いた。

フェイト「(当麻…)」

当麻「(大丈夫だよ)」

言葉は交わさずとも眼で意思の疎通を行った二人。  
ジュエルシードの方向を向いたフェイト。

『Shooting mode』

『レイジングハート』を变形させて、魔力流を避けながら突き進む高町なのは。

なのは（一人ぼっちで寂しい時も…一番して欲しかったことは…大丈夫？って聞いてもらうことでも…優しくしてもらうことでもなくて…）

『Sealing form・Set up.』

フェイト「バルディッシュ…頑張ろう…！」

なのは「デイバインバスター…フルパワー…いけるね？」

『All right, my master.』

二人の少女の足元に魔法陣が展開される。

なのは「せうの…！」

フェイト「サンダー…！」

なのは「デイバイン…！」

フェイト「レイジ…！」

なのは「バスター…！」

桃色と金色の閃光がジュエルシールドに直撃する。

その直後に、凄まじい衝撃波が辺り一面に広がって行った。

局員「ジュエルシールド！6個全ての封印を確認しました！」

クロノ「な…なんて出鱈目な…！」

リンディ「でも凄いわ…」

クロノ「そう言えば真紀さんは何処へ？」

リンディ「え？」

この場に結標真紀が居ないことに気付いたリンディ・ハラウンだった。

封印された6個のジュエルシードが空中に漂っていた。

その場にいる一同はそれを呆然と眺めていた。

なのは「（同じ気持ちを分け合えること…寂しい気持ちも悲しい気持ちも半分こに出来ること。そうだ…やっと分かった。私…この子と分け合いたいんだ…）」

なのは「友達に…なりたいんだ…」

フェイト「え…？」

二人の少女のやり取りを眺めていたアルフとユーノと当麻。

当麻「（友達…か…）」

その頃、アースラ内では警告音が鳴り響いていた。

エイミイ「次元干渉！？別次元から本艦及び戦闘空域に向けて魔力攻撃来ます！あ…あと6秒！」

リンディ「な!?!」

紫色の閃光がアースラに直撃する。

エイミー「きゃあああ!!」

海上でも紫色の閃光が猛威を奮っていた。

フェイト「母さん!？」

その攻撃がプレシア・テストロッサからの攻撃だと知っている少女は困惑していた。

そして、紫色の閃光はフェイト・テストロッサではなく上条当麻を襲った。

当麻「ぐああああ!!」

フェイト「当麻!!」

なのは「上条君!!」

気絶してそのまま海上に落ちていく上条当麻。

アルフも少年よりダメージは受けていないが、今の攻撃で反応が遅れてしまった。

アルフ「まずい!!」

ユーノ「このままじゃ!!」

少年を助けようと急ぐ少女達だったが、思いの外体力の消耗が激しく、追いつくことは出来なかった。

そのまま海の中に落ちるかと思われたが…

真紀「おっと…」

ガシ！

海に落ちる直前の少年を結標真紀が助けた。

少年が助かったことに安堵する少女達だったが、助けたの人間が時空管理局の魔導師の格好をしている為、警戒しているフェイトとアルフだった。

訓練用のデバイスを片手にフェイト達に近づく真紀。

一定の距離に近付いた真紀の顔を見て驚きを隠せない二人の少女。

以前、買い物をしている最中に手伝ってくれた人間が、時空管理局の人間だったのだから。

動揺する二人を無視して真紀はアルフの正面に立った。

真紀「はい」

気絶した上条当麻をアルフの背中に乗せた。

フェイト「え？」

アルフ「どういっつもりだい？」

真紀「別に他意はないわよ」

アルフの元に近付いたフェイト。

フェイト「当麻は？」

アルフ「それほど酷い怪我してないけど…」

フェイト「私が当麻を連れて帰る。アルフは悪いけど…」

アルフ「分かってるよ。右手には気をつけてね」

フェイト「うん」

少年の右手に触れないようにその場から移動するフェイト。  
しかし…

クロノ「待て!!」

フェイトの前にクロノ・ハラウンが現われた。

ジュエルシードの封印で体力を消耗している上に、少年を抱えたままの少女に戦う術は無かった。

フェイト「く…」

アルフ「邪魔あ…するなあ！」

クロノ「ぐあ！」

アルフの一撃で海に落とされるクロノ。

ジュエルシードを回収してその場から離れようとしているアルフだったが…

アルフ「3個足りない!？」

真紀「ごめんなさいね」

半分のジュエルシードを回収した真紀に齒噛みするアルフ。

フェイト「アルフ…今は…」

アルフ「分かってるよ…フェイト」

魔力弾を海に向けて放つアルフ。

海水が打ち上げられて視界を遮られる高町なのは達。

打ち上げられた海水が収まった頃、その場にフェイト達の姿は無かった。

なのは「フェイトちゃん…上条君…」

『アースラ』

リンディ「逃走するわ！捕捉を！」

局員「駄目です！各部に異常が発生しました！」

局員「機能回復まで後25秒！追いきれません！」

リンディ「機能回復まで対魔力防御！次弾に備えて！」

局員「はい…」

リンディ「それから…なのはさんとユーノ君、クロノと真紀を回収します」

『時の庭園内』

海上での出会いから数時間後、上条当麻はプレシア・テストロッサにお仕置きを受けていた。

当麻「ぐ…」

プレシア「(どうして…ここまでするのかしら?)」

フェイト・テストロッサを守る為に、拷問に近いお仕置きを受け続けている少年。

決して折れる事無く、少女を守り続けている少年。

明らかに『普通』ではない。

お人好しの限度を超えている。

上条当麻の異常性を目の当たりにしたプレシア・テストロッサは、その事について疑問を感じていた。

当麻「はあ…はあ…」

プレシア「どうして…貴方はここまでするのかしら? あんな人形の為に…」

当麻「フェイトは…人形じゃ…」

プレシア「物の例えではなく、フェイト・テストロッサは『人形』なのよ」

当麻「それは…どういう…?」

プレシア「フェイト・テストロッサは私の娘であるアリシア・テストロッサのクローンなのよ」



当麻「な…」

プレシア「フェイトという名前は『プロジェクトF・A・T・E』の名残なのよ。貴方がこれまで一緒に暮らしてきたフェイトは、『人間』ですらないってことなのよ?」

当麻「…」

プレシア「そんな『人形』の為に貴方はこんな仕打ちを受けてるのよ?」

当麻「それがどうした…」

プレシア「何ですって?」

当麻「フェイトはフェイトだ。アリシアは一人しかいないし、フェイトも一人しかいない」

プレシア「黙りなさい…」

当麻「アンタがやってることは…アリシアに対してもフェイトに対しても…只の侮辱でしかない」

プレシア「黙れ!」

バシィー!!

当麻「ぐ…」

プレシア「何も知らない子供の分際で…分かったような口を…！」

何度も鞭で叩かれる上条当麻。

プレシア「はあ…はあ…」

当麻「失った人は…もう…帰ってこないんだ…」

少年の脳裏に蘇るのは優しかった父親と母親。

事故で亡くしてもう二度と会うことの出来ない人達。

だからこそ、少年はフェイトをアリシアの偽者として扱っているプレシアが許せなかった。

当麻「フェイトは…人形じゃなくて…人間だ…だから…」

プレシア「もういい加減に…」

再び少年を鞭で叩こうとするプレシアだったが…

プレシア「ゴホ…」

突如、その場で咳き込むプレシアに疑問を覚える当麻。

当麻「それって…」

抑えていた手に血が付着していた事に気付いた少年。

プレシア「く…」

その場から足早に立ち去るプレシア・テストロッサ。

少年は薄れ行く意識の中でその後ろ姿を眺めていた。  
自室に移動したプレシア・テストロッサ。

プレシア「もう…あまり時間がないわね…早く…アルハザードに…」

## 第26話 アルフの想い（前書き）

少しばかり遅くなってしまい申し訳ございません。  
それでは、第26話始めさせていただきます。

## 第26話 アルフの想い

海上に残されていた高町なのは達。

リンディ「4人とも戻ってきて…」

クロノ「了解…」

リンディ「それで…なのはさんとユーノ君と真紀には私直々のお叱りタイムです」

真紀「私も!？」

リンディ「当たり前です!勝手に抜け出しているから…」

真紀「はい…」

『アースラ』

アースラに戻ってきた高町なのはとユーノ・スクライアに結標真紀とクロノ・ハラオウン。

リンディ「指示や命令を守るのは、個人のみならず集団を守るためのルールです。勝手な判断や行動が貴方達だけではなく、周囲の人達をも危険に巻き込んだかもしれないということ。それは分かりますね?」

なのは&ユーノ「はい…」

真紀「すいませんでした」

リンディ「本来なら厳罰に処すところですが…結果として幾つか得る所がありました。よって、今回の事については不問とします。ただし…二度目はありませんよ？いいですね？」

なのは「はい…」

ユーノ「すみませんでした…」

真紀「以後気を付けます！」

リンディ「さて…問題はこれからね。クロノ、事件の大元について何か心当たりがあるのかしら？」

クロノ「はい。エイミィ…モニターに」

エイミィ「はいはい」

モニターに映し出されたのは一人の女性。

リンディ「あらー！」

真紀「誰かしら？」

クロノ「僕達と同じミッドチルダ出身の魔導師…プレシア・テストロッサ。専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な魔導師でありながら、違法研究と事故によって放逐された人物です。登録データと先程の攻撃の魔力反応も一致しています。そして…あの少女…フェ

イトは恐らく…」

なのは「（この人が…フェイトちゃんのお母さんなの？）」

ユーノ「（多分そうだと思うけど…）」

なのは「（フェイトちゃんはお母さんの為にジュエルシードを集めてるって言うてたけど…）」

ユーノ「（何の為にあの子にジュエルシードを集めさせているんだ…）」

なのは「（分からないけど…）」

何やら先程から深く考え込んでいる二人に声を掛ける真紀。

真紀「どうしたの二人とも？」

ユーノ「な…何でもないです」

真紀「同じ苗字だけど…」

なのは「フェイトちゃんが…あの時…お母さんって…」

海上でも出来事を思い出す高町なのは。

リンディ「親子…ね…」

真紀「そうみたいですな」

なのは「そ…その…驚いていたとかじゃなくて…何だか怖がっているみたいでした…」

真紀「怖がってる…ね」

リンディ「エイミー！プレシア女史について、もう少し詳しくオーダー出せる？放逐後の足取りや家族構成、その他何でも！」

エイミー「はいはい。直ぐに探します」

リンディ「なのはさんとユーノ君は少し休んでて頂戴」

なのは「はい」

ユーノ「失礼しました」

会議室から出て行く高町なのはとユーノ・スクライア。

クロノ「どうして無断で行動したんですか？」

真紀に詰め寄るクロノ。

真紀「何て言えばいいのかしら？強いて言えば…何となくかしら？」

クロノ「何となくで無断で行動しないで下さいよ…」

真紀「ごめんごめん。次からは勝手に行動しない様に気を付けるからさっ」

ガツクリと頂垂れるクロノに簡単な謝罪を行う真紀。



リンディ「(真紀…何かあったのかしら?)」

真紀「(出来るだけあの子達の近くに居たほうがいいでしょ?)」

リンディ「(不足の事態に備えるためにとって事かしら?)」

真紀「(この一件に暗部が絡んでいなかったら楽だったんだけどね…)」

以前、海鳴市で暗部の人間に襲われた事を思い出していた少女。

リンディ「(そこまで警戒する相手なの?)」

真紀「(正直な話。空を飛べるこっちが有利なのは確かなんだけど、相手は殺しに慣れてる連中よ。まだ小学生の子供達には荷が重いでしょ?)」

リンディ「(そうもそうね)」

真紀「(それに、学園都市の科学技術の進化の速度は異常よ。サンブルがあったとはいえ、フェンリルみたいなデバイスを造ったんだから…能力者の存在もあるし)」

リンディ「(急がないと危険ね…)」

真紀「(まあそこは…エイミィに期待しましょうか)」

リンディ「(そうね)」

エイミイがプレシア・テスタロッサについて調べ始めて数時間後、再び会議室に集合した一同。

エイミイ「プレシア・テスタロッサ…ミッドの歴史によると、26年前は中央技術開発局の第三局長でしたが、当時彼女個人が開発していた次元航行エネルギー駆動炉『ヒュードラ』使用の際、違法な材料を使用した実験を行い失敗。結果的に中規模次元震を起こしたのが元で、中央を追われて地方へと異動になりました。随分揉めたみたいです。失敗は結果に過ぎず実験材料にも違法性は無かったと。辺境に異動後も数年間は技術開発に携わっていました。暫く後行方不明になって…それつきりですね」

リンディ「家族と行方不明になるまでの行動は？」

エイミイ「その辺のデータは綺麗さっぱり抹消されちゃってます。今は本局に問い合わせ調べてもらっていますので…」

リンディ「時間はどれくらい？」

エイミイ「一両日中には…」

リンディ「ん…プレシア女史もフェイトちゃんも…あれだけの魔力を放出した直後では、そうそう動きは取れないでしょう。その間にアースラのシールド強化もしないといけないし…貴方達は一休みしておいた方がいいわね」

なのは「あ…でも…」

リンディ「特になのはさんは、あまり学校を長く休みっぱなしでも良くないでしょう？一時帰宅を許可します。ご家族と学校に少し顔

を見せておいたほうがいいわ」

なのは「はい…」

『時の庭園内』

上条当麻のお仕置きが終わって、アルフが少年の下に駆け寄る。

アルフ「トウマ…!!トウマ…!!」

気絶した少年に駆け寄るアルフ。

アルフ「トウマ…!!トウマ…!!」

意識の無い少年を抱き寄せた彼女、はプレシア・テストロッサが居ると思われる扉を睨みつけていた。

プレシア「たった9個…これでも次元震は起こせるけど…アルハザードには届かない…!!…ごほ…!!」

ドガアン…!!

扉が粉碎されて後ろを見るプレシア、そこにはアルフの姿があった。

アルフ「はあ…!!」

プレシアに攻撃を加えるアルフ。

ガギィ…!!

彼女の攻撃は障壁に阻まれていたが、何度も攻撃を行ったことにより障壁が破壊された。

そのままプレシアの胸倉を掴むアルフ。

アルフ「アンタは母親で！あの子はアンタの娘だろうが！あんなに頑張ってる子に！あんなに一生懸命な子に…！関係ないはずのトウマまで巻き込んで！何であんな酷い事が出来るんだよお…！」

プレシア「…」

全く動じていないプレシアはアルフの腹部に向けて魔力弾を放った。その一撃を喰らった彼女は遠くに吹き飛ばされていた。

プレシア「あの子は使い魔の作り方が下手ね…余分な感情が多すぎるわ…」

アルフ「フェイトは…アンタの娘は…アンタに笑って欲しくて…優しいアンタに戻って欲しくて…あんなに…！」

アルフの目の前に移動してデバイスを取り出したプレシア。

プレシア「邪魔よ…消えなさい…！」

強烈な一撃を放とうとしているプレシアに対して魔法陣を発生させるアルフ。

ドゴオン…！

時の庭園から弾き飛ばされたアルフ。

アルフ（どこでもいい…転移しなきゃ…ごめんフェイト…トウマ…  
少しだけ待ってて…）

プレシア「余計な時間を取られたわね」

上条当麻が気絶している部屋まで移動したプレシア。

「  
プレシア「あの使い魔はともかく…この子が反逆したら厄介ね…」

魔法の力ならば、どのような存在であろうとも破壊することが可能な  
謎の右手。

ジュエルシードの制御には使えそうもないが、もしアルフの様に牙  
を剥くのなら、ジュエルシードが破壊される危険性さえ有り得る。

プレシア「（対策が必要かもしれないわね…）」

魔法陣を展開して少年をマンションに送るプレシア・テストロッサ  
だった。

『高町家』

高町家にお邪魔していたリンディ・ハラオウン。

彼女は現在、高町桃子とお話をしている最中だった。

リンディ「…と、そんな感じの10日間だったんですよ」

桃子「あら〜そうなんですか〜」

なのは「（リンディさん…見事なごまかしというか真っ赤な嘘と言

うか…」

ユノ「（凄いね…）」

リンディ「（本当の事は言えないんですから…ご家族にご心配をお掛けしない為の気遣いと言って下さい）」

リンディ「でも、なのはさんは優秀なお子さんですし…もう本当に家の子にも見習わせたいくらいですわ」

桃子「あら～またまたそんな～」

リンディ「息子のクロノはどうも愛想がありませんで～」

美由紀「なのは…今日明日くらいはお家に居られるんでしょう？」

なのは「うん」

恭也「仕上もアリサもすずかちゃんも心配してたぞ。もう連絡はしたか？」

なのは「うん。さっきメールを出しといたよ」

自宅に向けて帰宅中のアリサ。

アリサ「それじゃあ送信っ」と

執事「アリサお嬢様。何か良いお知らせでも？」

車を運転している執事がアリサに質問する。

アリサ「別に普通メールよ…あれ？」

窓の外を向いて何かを発見したアリサ。

アリサ「ちょっと止めて！」

車を止めて外に出るアリサ。

アリサ「やっぱり…大型犬…」

その場にいたのは血を流して倒れているアルフだった。

執事「怪我をしていますな…かなり酷いようです…」

アリサ「でも…まだ生きてる…早くこの子を！」

執事「心得ております」

アルフ「（フェイト…トウマ…）」

## 第27話 物語を始める為に

『マンシヨン』

フェイト「アルフ…何処に行ったんだろう?」

当麻「それは分からないけど…早く探した方が…」

フェイト「そうだね。私はお母さんに話を聞いてみるよ」

当麻「僕は街中を探してくるよ」

フェイト「気を付けてね当麻」

当麻「うん」

部屋から出て行ったフェイト・テストロツサ。

自身も行動を開始しようとした上条当麻だったが…

当麻「痛てて…流石に少しきついかな…」

プレシアのお仕置きが想像以上に響いており、苦痛に顔を歪ませる少年。

当麻「だけど…アルフを探さなきゃ…」

痛む身体で街中に出掛ける少年。

アルフの好物であるドッグフードを片手に行動していた少年。

八神はやての家に世話になっているのかと考えたが、生憎アルフ



は居なかった。

当麻「一旦帰ろう…」

一旦マンションに戻ることに決めた上条当麻。  
帰宅した彼を待っていたのは、浮かない顔のフェイト・テストアロツサだった。

当麻「どうしたのフェイト？」

フェイト「お母さんにアルフを知らないって聞いたら、アルフは逃げだしたって言ってたんだ…」

当麻「そんなことは…」

フェイト「私もアルフが逃げ出したなんて思っていないよ…でも…それなら…どうして帰って来てくれないの？」

当麻「…」

アルフが誰よりも主人であるフェイトの事を想っているのは、少年も知っていることだった。

なのに何故、アルフが帰ってこないのか考える少年。

もしかして、プレシアが彼女に何かしたのではないかと疑う少年だったが、考えてもキリがないのでその事については保留にした。

当麻「とにかく…今日はこれくらいにして…明日も探そう？」

フェイト「うん…」

『バニングス邸』

アリサ・バニングスが傷を負っているアルフを、自宅に連れて帰って数時間が経過した。

その間に治療も終えたらしく、身体には包帯が巻いてあった。

アルフ「(う…)」

アリサ「あ！目が覚めた？」

アルフ「(あれ？このチビっ子…どっかで…)」

アリサ「アンタ…頑丈に出来てるのね。あんなに怪我してたのに命に別状は無いってさ。怪我が治るまでは家で面倒見てあげるからさ…」

そう言っただけでドッグフードを入れた皿をアルフに差し出すアリサ。

その際に頭に撫でた少女。

アリサ「安心していいよ」

アルフ「(あ…あの子の…友達なんだ…ってことはトウマの…知り合い…)」

アリサ「ほら。柔らかいドッグフードなんだけど…食べられる？」

差し出されたドッグフードを食べ進めるアルフ。

アリサ「そんなに食欲があるなら心配ないね。食べたらずっくり休んで、早く良くなりな…ね？」

『私立聖祥大附属小学校』

翌日、久々に小学校に来た高町なのは友達であるアリサ・バニン  
グスと月村すずか、浜面仕上に再開した。

すずか「なのはちゃん！良かった…元気で…」

仕上「何があつたか良く分わかんねえけど…まあ久しぶりだな」

アリサ「体調は壊してない？」

なのは「大丈夫だよ。ありがとう皆」

仕上「別にお礼を言われるじゃねえだろ」

なのは「にやはは…あれ？上条君は？」

アリサ「それが…なのはが学校を休んだ日以降、学校に来てないの  
よ…」

仕上「それも無断で休んでるんだぜ？」

すずか「上条君…大丈夫かな？」

なのは「そう…なんだ…」

上条当麻が小学校を無断で欠席する理由に心当たりがある高町なのは。

アリサ「元気だといけど…」

仕上「あいつは一人で何でも抱え込みそうだからな」

すずか「うん…」

なのは「あの…少し話があるんだけど…」

再び小学校を休まなければいけないことを、三人に伝える少女。

アリサ「そっか…また行かないといけないんだ…」

なのは「うん…」

すずか「大変だね…」

仕上「面倒な用事なのか？」

なのは「うん。でも…大丈夫！」

アリサ「放課後は？少しくらいなら一緒に遊べる？」

なのは「うん！大丈夫！」

アリサ「じゃあ…家に来る？新しいゲームもあるし…」

なのは「本当？」

仕上「新しいゲーム！？」

アリサ「そうよ」

すずか「楽しそうだね浜面君」

仕上「そりゃそうだろ！新作ゲームだぜ！？」

アリサ「浜面如きに攻略できるかしら？」

仕上「この俺を舐めんじゃねえよ」

なのは「にやはは…」

アリサ「あ…そう言えばね。夕べ怪我してる犬を拾ったの」

仕上「ユーノといい怪我している動物が多いな…」

すずか「犬？」

なのは「どういづ子なの？」

アリサ「うん。凄い大型で、毛並みがオレンジ色で、オデコにね、赤い宝石が付いてるの」

仕上「どんな犬だよ…」

なのは「（それって…）」

その特徴の当てはまる犬？に少女は心当たりがあった。

放課後、バニングス邸に来た少年少女達。

アリサが保護したのはなのはが考えていた通りの存在だった。

仕上「犬かコイツ？」

アリサ「どっからどうみても犬じゃない」

なのは「（やっぱり…アルフさん…）」

アルフ「（あんたか…）」

なのは「（その怪我…どうしたんですか？それに…フェイトちゃんと上条君は…）」

アルフ「…」

アリサ「あらあら…元気無くなっちゃった…どうした？大丈夫？」

すずか「傷が痛むのかも…そつとしいてあげようか…」

アリサ「うん…」

仕上「額に宝石を埋め込んだ犬種…うん…」

突然、すずかに抱かれていたユーノがアルフの目の前に移動した。

アリサ「ユーノ！危ないぞ？」

仕上「喰われてもしらねえぞ…」

なのは「大丈夫だよ。ユーノ君は…」

ユーノ「(なのは。彼女からは僕が話を聞いておくから…なのははアリサちゃん達と…)」

なのは「(うん)」

アリサ「それじゃあ…お茶にしない？美味しいお茶菓子があるの！」

なのは「うん！」

すずか「楽しみ〜！」

仕上「腹減った〜！」

ユーノ「(一体どうしたの？君達の間で一体何が？)」

アルフ「(アンタがここに居るって事は、管理局の連中も見てるんだろうね…)」

ユーノ「(うん…)」

クロノ「時空管理局…クロノ・ハラオウンだ。どうも事情が深そうだ…正直に話してくれば、悪いようにはしない。君の事も、君の主であるフェイト・テストロツサや上条当麻の事も」

アルフ「(話すよ…全部…だけど約束して…！フェイトとトウマを助けるって！あの子達は何も悪くないんだよ！)」

クロノ「約束する。エイミィ…記録を」

エイミィ「してるよ」

アルフ「(フェイトの母親…プレシア・テスタロッサが…全ての始まりなんだ。)」

フェイ・テスタロッサの事情についてアルフから話を伺うクロノ・ハラオウン。

クロノ「それで…上条当麻と君達はどういう関係なんだ？」

アルフ「(トウマは部屋が隣同士だけって関係さ…)」

クロノ「何？」

アルフ「(言葉通りの意味さ。トウマは正真正銘の魔法に関わりを持たない一般人さ)」

クロノ「そんな彼がどうして君達を行動を共にしている？」

アルフ「(ある日に、トウマにアタシ達が魔法を使う所を目撃されて、簡単な事情を話したら協力するって言い出して、何の関係も無かったのに…)」

クロノ「たったそれだけの理由で…」

アルフ「(何度も危険な目に遭って、怪我もしてるのに、それでも諦めなくて…フェイトに対するプレシアのお仕置きも肩代わりして…)」

クロノ「…」



アルフ「プレシアのお仕置きで、ジュエルシードの搜索中についた傷が開いて血を流して…このままじゃトウマが本当に死ぬかもしれないんだ…」

クロノ「…分かった」

その頃、新作のゲームで遊んでいた一同。  
高町なのはだけは廊下に移動していた。

ユーノ「（なのは…聞いたかい？）」

なのは「（うん…全部聞いた…）」

ユーノ「（どうしてそこまで…）」

なのは「（上条君がそんな事になってるなんて…）」

クロノ「君の話と現場の状況…そして彼女の使い魔アルフの証言と現状を見るに…子の話に嘘や矛盾は無いみたいだ…」

なのは「（どうなるのかな？）」

クロノ「プレシア・テスタロッサを捕縛する。アースラを攻撃した事実だけでも、逮捕の理由にはお釣りが来るからね。だから、僕達は艦長の命令次第で、任務をプレシアの逮捕に変更することになる。…君はどうする？高町なのは…」

なのは「（私は…私は…フェイトちゃんと上条君を助けたい！！アルフさんの想いとそれから私の意思、フェイトちゃんと上条君の悲しい顔は私もなんだか悲しいの…だから助けたいの！悲しいことか

ら。それに、友達になりたいって伝えただけど、その返事をまだ聞いてないしね)」

クロノ「分かった。こちらとしても君の魔力を使わせてもらうのは有り難い。フェイト・テスタロッサと上条当麻についてはなのはに任せる。それでいいか？」

アルフ「（うん。なのは…だったね？頼めた義理じゃないけど…だけど…お願い…フェイトとトウマを助けて…あの子達…本当に苦しんでるんだよ…）」

なのは「（うん。大丈夫。任せて！）」

アリサ達が居る部屋に戻る高町なのは。

アリサ「遅いよなのは！」

すずか「ほら。新しいダンジョンに入るの待ってたんだよ？」

仕上「早くやろうぜ！」

なのは「にはははは…ごめんごめん」

ゲームを再開する少年少女達。

念話でなのはに話しかけるクロノ。

なのは「予定通り。アースラへの帰還は明日の朝。それまでの間に君がフェイトと遭遇した場合は…」

なのは「（うん…大丈夫…）」

ゲームを終えて、ジュースを飲んでいた一同。

アリサ「なかなか燃えたわ〜」

仕上「楽しかったな〜」

すずか「やっぱりなのはちゃんか居たほうが楽しいよ〜」

なのは「ありがとう…」

仕上「上条も早く学校に来て欲しいもんだぜ」

アリサ「全くよ！こんなに人を心配させて！」

すずか「お…落ち着いて二人とも…」

怒り心頭の二人を宥めるなのはとすずか。

仕上「そっぴや、今度はいつ戻ってこれるんだ？」

なのは「多分…もう直ぐ全部終わるから…そしたらもう大丈夫だから…」

アリサ「なのは…何か少し吹っ切れた？」

なのは「え？あ…えっと…どうだろう？」

アリサ「心配してた。てか…アタシが怒ってたのはさ…なのはが隠し事をしてることで、考え事しているわけでもなくって…なのは

が不安そうだったり、迷ったりしてたこと…それで時々…もうあたし達の所に帰ってこないんじゃないかって思うような目をする事…」

なのは「…」

オロオロするすずかとジュースを飲んでいる仕上。

なのは「行かないよ…どこにも…友達だもん…どこにも行かないよ！」

アリサ「そっか…」

なのは「うん！」

仕上「…っーかそれは上条の奴に言ってやった方が良いんじゃないかねえのか？」

すずか「そうだね」

アリサ「放っておくと何処かに行っちゃいそうよね」

なのは「うん」

アリサ達と別れて自宅に向かう高町なのは。

なのは「（うん…何処にも行かない。私はちゃんと…ここに帰ってくる。只少しだけ…いつもと違う時を過ごすということ…それは…これから先…自分らしく真っ直ぐいる為、後悔しないようにする為の小さな旅…）」

高町家の道場に居た少女。

士郎「良い顔になったな」

なのは「あ……」

突然現われた高町士郎に軽く動揺する少女。

士郎「迷いは消えたのか？」

なのは「お父さん……なのはが迷ってたこと……知ってたの？」

士郎「そりゃあそうだ。お父さんはお父さんだからな。明日は朝早くからまた出掛けるんだろ？」

なのは「うん……ご心配をお掛けします」

士郎「まあ……なのはは強い子だからな。父さんはそれほど心配してないよ。頑張つて来い！しっかりな！」

なのは「うん！」

翌朝に、ユーノ・スクライアと共に家を出た高町なのは。

いつの間にか彼女達に併走していたアルフ。  
思わず頬が緩むなのは。

公園に辿り着いた一同。

なのは「ここなら……いいね……出てきて……フェイトちゃんに上条君！」

高町なのは声に応えるように、彼女達の近くに姿を現したフェイト・テストロツサと上条当麻。

当麻「アルフ…良かった…無事だったんだ」

フェイト「アルフ…良かった…」

アルフが無事で居た事に安堵する二人。

アルフ「トウマ…身体は大丈夫なのかい？」

当麻「大丈夫だよ。全然平気！」

ユーノ「君は…」

なのは「上条君…」

アルフ「…フェイト…トウマ…もう止めよう？あんな女の言う事もう聞いちゃ駄目だよ！フェイト…トウマ…このままじゃ不幸になるばかりじゃないか！だから2人とも！」

フェイト「だけど…それでも私は…あの人の娘だから…」

当麻「フェイト…」

悲しげな表情をする上条当麻。

実の母親から残酷な仕打ちを受け続けても、ジュエルシードを集め続ける少女に胸を痛める少年。

バリアジャケットに着替える高町なのは。

なのは「ただ捨てればいいってわけじゃないよね。逃げればいいってわけじゃもつとない。きっかけは…きつとジュエルシード。だから…賭けよう？お互いが持つてるジュエルシードを…全部のジュエルシードを！」

『Put out』

『Put out』

少女達が今まで集めたジュエルシードが彼女達の周囲に出現する。

なのは「それからだよ。全部…それから！」

フェイト「…」

デバイスを構える高町なのはとフェイト・テストロッサ。

なのは「私達の全てはまだ始まってもない…だから…本当の自分始める為に…始めよう…最初で最後の本気の勝負！」

## 第28話 最初で最後の本気の戦い

海鳴市の公園にて、高町なのはと対峙しているフェイト・テストロツサは過去の出来事を思い出していた。

彼女が思い出していたのは、遠い過去の話。

とある草原に居た少女と母親らしき人物。

少女の名前はフェイト・テストロツサ。

花冠を作っている女性の名前はプレシア・テストロツサ。

フェイト「(母さん…私の母さん…いつも優しくかった…私の母さん…私の名前を優しく呼んでくれた母さん…)」

花冠を作っているプレシア・テストロツサ。

現在では想像も出来ない程の、優しい笑顔を見せていた彼女。

プレシア「ね！とても綺麗でしょ？アリシア」

完成した花冠をフェイトに見せるプレシア。

フェイト「(アリシア？違うよ母さん…私はフェイトだよ？)」

自分の名前はフェイト・テストロツサであり、決して『アリシア』という名前ではない。

プレシア「さあ…いらっしやい…アリシア…」

アリシアと呼ばれることに違和感を感じていた少女だったが、プレシアに呼ばれて彼女の所へ向かった。



近付いて来たフェイトに花冠を被せるプレシア。

プレシア「ほら！可愛いわアリシア！」

花冠を被せられて照れるフェイトを抱きしめるプレシア。

フェイト「（まあ…いいのかな…）」

何故、自分が『フェイト』ではなく『アリシア』と呼ばれるのか、その事について疑問を感じていた少女だったが、現状に満足してた彼女はその事に関して疑問を感じることを止めたのだった。

『公園』

再び目を開けて、高町なのはと睨みあうフェイト・テストロッサ。

フェイト「（私は…優しい母さんが大好きだから…それに…ずっと手伝ってくれた当麻の為にも…負けられない…）」

プレシア・テストロッサに元の優しい母親に戻って貰うために、戦い続けていた少女。

そんな少女を身を挺して守り続けていた少年。

空中でデバイスを構える二人の少女。

そんな二人を見守る上条当麻とアルフとユーノ・スクライア。

当麻「…ゲホ…」

よろめく当麻を抱き止めるアルフ。

アルフ「もう…いいんだよ…これ以上…無茶しちゃ…」

当麻「アルフ…」

ユーノ「君達の事情については彼女から聞いている」

当麻「…フェイトには…」

ユーノ「大丈夫…彼女には言わないよ…でも…君は…」

様子のおかしい上条当麻を心配するユーノ・スクライア。

当麻「僕は…大丈夫だから…」

真紀「本当に大丈夫なの？」

突然聞こえてきた声に後ろを振り向く三人。

当麻「真紀…さん」

ユーノ「どうしてここに？」

真紀「まあ…見学って所かしら…」

アルフ「フェイトには…」

真紀を睨みつけるアルフ。

真紀「大丈夫よ。彼女に手出しする気なんてないわ」

そう言っつて結標真紀は空を飛んでいるフェイト・テストアロツサを見

た。

真紀「（彼女は…自分が『道具』として扱われている事に気付いているのかしら？…っといけない。フェンリル…広域サーチをお願い）」

『All right.』

『アースラ』

アースラのモニターで公園の様子を見ていたクロノ・ハラオウンとエイミイ。

エイミイ「戦闘開始みたいだね」

クロノ「ああ…」

エイミイ「上条君…顔色悪いみたいだけど…」

クロノ「馬鹿なことを…」

フェイト達の事情をアルフから聞いた際に、上条当麻についても聞いた二人。

エイミイは少年を心配して、クロノは心底呆れていた。

エイミイ「真紀さん…本当に良かったのかな？」

クロノ「艦長の命令だから従うしかないだろう。それにあの人なら…予想外の事態にも対応できるだろう」

エイミィ「でもクロノ君：真紀さんは訓練用のデバイスしか持つてないんじゃないの？」

クロノ「あ…」

厳密に言えば、結標真紀は専用のデバイスを所持しているのだが、その事を知っているのはアースラの艦長であるリンディ・ハラオウンのみである。

その為、アースラ内のメンバーは彼女が訓練用のデバイスしか持ち合わせていないと話されていた。

エイミィ「いくら真紀さんでも…訓練用じゃ荷が重いんじゃない？」

クロノ「ま…まあ…何も起きないことを祈るしかないだろう…」

高町なのはとフェイト・テストロッサが映し出されたモニターに注目する二人。

エイミィ「しつかし…ちょっと珍しいよね。クロノ君がこういうギャンブルを許可するなんて…」

クロノ「まあ…なのはが勝つに越したことは無いけど…あの二人の勝負自体は、どちらに転んでもあまり関係ないからね」

エイミィ「なのはちゃんが戦闘で時間を稼いでくれてる内に、あの子達の帰還先追跡の準備をしておく…ってね！」

クロノ「それより、頼りにしてるんだからね。逃がさないでよ」

エイミィ「おう！任せとけ！！」

ガッツポーズをするエイミーに少しだけ呆れるクロノ。

エイミー「でも……あのこと、なのはちゃんに伝えなくていいの？」

少しだけ雰囲気暗くなったエイミーがクロノに尋ねる。

エイミー「プレシア・テストロッサの家族と……あの事故のこと……」

クロノ「……勝つてくれるに越したことはないんだ。今は……なのはを迷わせたくないんだ」

エイミー「でも……あの時の真紀さんは……」

プレシア・テストロッサについて調査していたエイミーが掴んだ情報を、リンディとクロノと真紀に語った際に、真紀が見せた表情はあまりにも冷たかった。

普段の飄々とした態度からは想像も出来ない程の雰囲気を醸し出していた彼女。

クロノ「ああ……」

エイミー「凄く怖かった……」

クロノ「ああ……あんな姿を見るのは初めてだ……」

エイミー「良く考えたら……真紀さんについて何も知らないよ……」

クロノ「僕も同じだ……ただ……艦長がこの世界出身の協力者って言うていただけだ……」

エイミー「まあ…真紀さんは真紀さんだよ」

クロノ「そうだな…」

『公園』

戦いを開始した高町なのはとフェイト・テストロッサ。

『Photon Lancer』

『Divine Shooter』

フェイト「ファイア！」

なのは「シュート!!」

二人のデバイスから放たれる桃色の魔力弾と金色の魔力弾。

魔力弾同士が衝突する事は無く、そのままお互いに向かっていく。

金色の魔力弾を避けて進んでいく高町なのはと、桃色の魔力弾を障壁を張って防ぎきるフェイト・テストロッサ。

その隙を見逃さなかった少女は、再び魔力弾を発射した。

なのは「シュート!!」

少しばかり同様したフェイトだったが、咄嗟にバルディッシュを変形させた。

『Scythe Form』

一発の魔力弾を避けて、他の魔力弾を切り裂きつつ、なのはに迫り行くフェイト。

フェイトの攻撃に対してバリアを張った少女。

『Round Shield』

強烈な一撃だったが、攻撃を防ぐことに成功した高町なのは。

フェイトの一撃を受け止めている少女は、先程フェイトが見逃した魔力弾を誘導していた。

真紀「上手いわね……」

当麻「フェイト!！」

フェイト「く……」

背後に迫り来る魔力弾に気付いたフェイトはギリギリで障壁を張って、攻撃を防いだ。

急いで、高町なのはの方向を振り向いたが、その場には誰も居なかった。

フェイト「え？」

『Flash move』

突如、その場は無機質な音声が響き渡る。

慌てて上空を見上げるフェイト・テストロッサ。

そこにいたのは『レイジングハート』を構えて特攻してくる高町なのはだった。

なのは「せえええい!!」

ガギイン!!

『レイジングハート』と『バルディッシュ』が激突した。  
彼女達をデバイスの衝突によって発生した閃光が包む。

当麻「二人とも……」

『Scythe slash』

閃光の中でなのは目掛けて攻撃を加えるフェイト。  
間一髪で攻撃を避けた少女だったが、胸のリボンが切り裂かれてしまった。

一旦、その場から離脱しようとしていたが、彼女の背後には金色の魔力弾が待ち構えていた。

なのは「く……」

『Fire』

迫り来る魔力弾の軌道をバリアで無理やり変更した高町なのは。

ドオン!!

軌道を逸らされた魔力弾は、そのまま海の中に吸い込まれていった。

なのは「ハアハア……」

フェイト「ハアハア……」



ハイレベルな戦いを繰り広げて、予想以上に体力を消耗していた二人の少女。

フェイト「（初めて会った時は魔力が強いだけの素人だったのに…もう違う。速くて…強い！ 迷ってたら…やられる！」

初めて会ったときと比べて異常なまでの成長をしている少女を脅威と認識したフェイト。

『バルディッシュ』を構えるフェイト・テストロツサ。

そして、彼女の足元には巨大な魔法陣が現われた。

同時に、高町なのはの周囲に、魔法陣が現われては消えるといった現象が起きていた。

予測の出来ない行動に同様を見せる少女。

『Phalanx Shift』

フェイトの周囲に出現した大量の魔力弾。

警戒するのはだったが、突然、左手が金色の輪に拘束された。

その次に右手が拘束されて身動きが取れなくなってしまった。

アルフ「ライトニングバインド！？まずい！フェイトは本気だ！」

真紀「（私のバインドとは違うのかしら？）」

フェイトのバインドには、対象を攻撃する様な能力は付いていないが、それでも対象の動きを封じるには充分すぎる力を持っていた。

ユーノ「なのはは…！今サポートを！」

当麻「駄目だ!!」

なのはに加勢しようとしたユーノを当麻が止める。

ユーノ「どうして!?このままじゃなのはが!」

当麻「あの二人の戦いを邪魔をしちゃいけないんだ!!高町さんもそれを望んでない!!」

なのは「上条君の言う通りだよ!フェイトちゃんと全力全開の一騎打ちだから!!私とフェイトちゃんの勝負だから!!」

アルフ「でも!フェイトのそれは本当にまずいんだよ!!」

フェイト「テストロツサが高町なのはに放とうとしている技は、以前上条当麻の特訓で一度だけ使用されたことがある。

無数の魔力弾に圧倒されて、成す術も無く敗北した技。

更に今回は特訓ではなく全力の勝負な為、フェイトの本気の一撃である。

しかし、高町なのはは…

なのは「平気!!」

フェイト「アルカス…クルタス…エイギアス…疾風なりし天神よ…  
今導きの元に撃ちかけ。バリエル…ザリエル…ブラウゼル」

詠唱を進めるフェイト。

彼女の周囲にある魔力弾が大きさを増して行く。

フェイト「フォトランサー…ファランクスシフト」

二人の戦いを見守る一同。

フェイト「撃ち砕け、ファイア!!」

バインドによって身動きの取れない高町なのはに向かって放たれた雷を帯びた大量の魔力弾。

ドドドドド!!

少女に直撃する大量の魔力弾。

当麻「高町さん!!」

ユーノ「なのは!!」

アルフ「フェイト!!」

真紀「(どうなるのかしらね...)」

残った魔力弾を一つに収束させて警戒するフェイト・テストロッサ。煙が晴れた空には...

なのは「にやはは...撃ち終わると、バインドっていうのも解けちゃうんだね」

ピンピンしている高町なのはの姿があった。

ユーノ「す...凄い...」

アルフ「嘘だろ……」

当麻「良かった……」

真紀「攻撃が当たる直前に障壁を発動させた……か……」

フェイト「あの攻撃を凌ぐなんて……」

あれ程の攻撃を凌ぎ切った少女に同様に隠せないフェイト。

『レイジングハート』をフェイトに向けるなのは。

なのは「今度はこっちの……」

『Divine……』

なのは「番だよ……!」

『Buster!』

フェイトに向かって放たれた桃色の閃光。

咄嗟に金色の魔力弾を放つが、桃色の閃光にいと簡単に破壊される。

障壁を張って、閃光を受け止めるフェイト。

フェイト「(直撃!?) でも大丈夫……あの子だって耐えたんだから!  
!」

徐々に押されてバリアジャケットも破れていくが、何とか攻撃を防いだフェイト。

しかし、高町なのはの攻撃は終わっていないかった。

なのは「受けてみて！ディバインバスターのバリエーション！」

少女の正面に巨大な魔法陣が出現する。

『Starlight Breaker』

彼女達の周囲に充満していた魔力が魔法陣に集中していく。

真紀「あれは…」

攻撃の阻止を行おうとしたフェイトだったが…

フェイト「なっ…！？ バインド!？」

両手両足をバインドに拘束されて、身動きを取る事が出来なくなってしまう。

なのは「これが私の全力全開！スターライトオ…ブレイカー!!!」

今までとは比較出来ない程の桃色の閃光がフェイト・テストロッサを包んだ。

当麻「フェイト!!!」

真紀「大丈夫かしら？」

フェイトを包んだ閃光は、そのまま海に直撃して、大量の海水が上空に打ち上げられた。

『アースラ』

アースラのモニターで二人の少女の戦いを見学していたクロノとエイミー。

クロノ「な…なんつー馬鹿魔力！」

エイミー「うわ…フェイトちゃん…生きてるかな!？」

『公園』

なのは「はあ…はあ…はあ…」

相当体力を消耗している高町なのはと意識を失って海に向けて落下していたフェイト・テストロツサ。

アルフ「フェイト!!！」

なのは「フェイトちゃん!!！」

当麻「フェイト!!！」

そのまま海に落ちると思われたが…

真紀「よいしょっと…」

ガシ!!

上条当麻の時と同じ様にフェイトをキャッチした結標真紀。  
そのまま公園に運んだ真紀。

フェイト「う…」

当麻「フェイト！」

アルフ「フェイト！」

フェイト「当麻…アルフ…」

真紀「立てる？」

フェイト「はい…」

なのは「フェイトちゃん…ごめんね…大丈夫？」

フェイト「うん…」

なのは「私の…勝ちだよな？」

フェイト「そう…みたいだね…」

当麻「フェイト…」

フェイト「当麻…ごめんなさい…」

当麻「良かった…フェイトが無事で…」ギユ

フェイト「ととと…当麻！？／／／」

上条当麻に抱きしめられて動揺するフェイト。

なのは「…」「ゴゴゴ」

黒いオーラを噴出するなのは。

苦笑いするアルフと真紀に震えているユーノがその場に居た。

『Put out.』

『バルディツシュ』の周囲に、フェイトが集めた全てのジュエルシードが出現した。

クロノ「よし！なのは！ジュエルシードを確保して！それから彼女を…」

エイミー「いや…来た！」

クロノ「え？」

少女少女達が居る場所の天候が急変した。  
そして、上空から紫色の雷が降り注いだ。

当麻「うわああああ…！」

フェイト「当麻…！」

アルフ「トウマ…！」

なのは「上条君…！」

ユーノ「当麻君…！」



真紀「突然ね…この反応は!？」

上条当麻の足元に転移専用の魔法陣が出現して、少年の姿はその場から消えた。

フェイト「当麻ああ!！」

アルフ「アイツ!！」

なのは「上条君が…」

ユーノ「何が起きているんだ…」

真紀「（リンディさん…まずいわ…）」

リンディ・ハラオウン専用の秘匿回線で念話通信を行う結標真紀。

リンディ「（上条君については…）」

真紀「（そつちじゃない…見覚えのある反応があるわ。…しかも…この反応は…）」

リンディ「（こんな時に!？」）」

真紀「（彼女達を早くアースラに転移させて!）」

リンディ「（分かったわ!！」）」

リンディ「クロノ!!彼女達を早くアースラに!！」」

クロノ「了解!!」

突然の事態に動揺している少女達を、半ば強引にアースラに転移させる事に成功したクロノ・ハラオウン。

クロノ「何故真紀さんが居ないんだ!」

リンデイ「彼女には別の任務で動いてもらいます!」

クロノ「…分かりました!」

公園に一人残った結標真紀。

真紀「何とか…全員転移させられた…か…さて…」

彼女の周囲に現われた30体もの駆動鎧。

真紀「学園都市も本腰を入れたって事かしら…」

駆動鎧の1体が一つの機械を取り出した。

キイイイイン!!

その機械から謎の音が出ていた。

それは以前、彼女を苦しめた機械と同様の物だった。  
しかし…

真紀「同じ手を何度も喰らうほど馬鹿じゃないわよ。耳栓も意外と役に立つものね」

ヒュン！！

一瞬で背後にある木の上に移動した真紀。  
自分が戦う相手の数を確認する少女。

真紀「結構骨が折れそうね」

駆動鎧の1体が凄まじい速度で、真紀が乗っている木の根元に移動して、木を右手で殴りつけた。

ドガァン！！ミシミシミシ…バキ！！ズズウン！！

右手の一撃で容易く粉碎された樹木。

真紀「容赦ないわね」

地面に着地した彼女を取り囲んでいる駆動鎧達。

真紀「一気に殲滅させてもらっわよ」

小型の機械を取り出す結標真紀。

真紀「フェンリル…セットアップ！」

『Set up.』

赤い光が少女を包んだ。

そして、光が収まった場所にはバリアジャケットに着替えていた結標真紀の姿があった。

その姿は、魔法少女を彷彿とさせる姿ではなく、どことなく機械的な印象を与えていた。

真紀「目には目を…歯には歯を…駆動鎧には駆動鎧ってね…」

『Armored mode.』

先程とは異なり、漆黒が少女を包む。

そして、駆動鎧達の目の前に現われたのは、漆黒の駆動鎧だった。

真紀「フェンリル…ブレイドトンファーで行くわよ」

『All right.』

漆黒の駆動鎧の右腕に埋め込まれた赤い宝石が輝いた。

そして、光が収まった後、真紀の腕にはブレイドトンファーが握られていた。

そのトンファーには赤い色の魔力刃が迸っていた。

真紀「それじゃあ…行きますか！」

ズバア！！

圧倒的な速度で駆動鎧を切り裂いていく真紀。

並みの人間では歯が立たない駆動鎧を蹂躪する少女。

元々高い性能を誇る駆動鎧に、魔力という力が加わり、駆動鎧を圧倒する力を発揮していた。

その姿はまさに『怪物』という言葉が相応しかった。

ガシャン！！ドドドド！！

銃を構えた駆動鎧が真紀に向けて大量の弾丸を放つ。  
学園都市製の重火器であるために、並みの兵器よりも高い殺傷力を  
持っていた。

真紀「だけど無駄ね」

ヒュン！！

一瞬で駆動鎧の背後に移動した少女。

次々と駆動鎧を破壊していき、残りは僅か3体のみだった。

真紀「はい終了」

ズバア！！

駆動鎧との戦いを始めてから、1分弱で殲滅した結標真紀。

『Empty』

真紀「あらら…エネルギー切れか…まあ…あの子達が戦ってたから  
魔力は余ってるでしょうね…」

『Absorb mode』

駆動鎧から、バリアジャケットの姿に戻った真紀。

『Absorb』

二人の魔導師の戦いによって、この場所に残った魔力を吸収した。

フェンリル』

シューー！！

魔力が充分に供給されて、輝きを取り戻した『フェンリル』

真紀「うん…これで回復したわ…さて…私もとつと向かいますか…」

『アースラ』

エイミィ「ビンゴ！！尻尾掴んだ！！」

クロノ「よし！不用意な物質転送は命取りだ！座標を…」

エイミィ「もう割り出してる！送ってるよ！」

リンディ「武装局員！転送ポートから出動！任務はプレシア・テストロッサの身柄確保です！」

『時の庭園内』

吐血しているプレシア・テストロッサ。

プレシア「ゴホツ…次元魔法は…もう…体が持たないわ…それに…  
今ので…この場所も捕まれた…」

球状のモニターに映し出された海上の様子を一目見た。

プレシア「フェイト…あの子じゃもう…駄目だわ…」

傍らの気絶している上条当麻を見たプレシア。

プレシア「そろそろ…潮時かもね…」

## 第29話 残酷な真実

『アースラ』

アースラに移動した少年少女達。

アルフ「トウマを早く助けないと!!」

クロノ「プレシア・テストロッサが居る場所には、武装局員達を向かわせている。心配いらない」

フェイト「当麻…」

なのは「上条君…大丈夫かな…」

ユーノ「大勢が局員の人達が向かったから大丈夫だとは思っけど…」

アルフ「そうは言っても…」

クロノ「とにかく今はブリッジに行くよ!!」

少なからず動揺していた高町なのは達をブリッジまで案内するクロノ・ハラオウン。

フェイト・テストロッサは両手に手錠をされていた。

『時の庭園内』

庭園内の廊下と思われる場所に転移した武装局員達。彼等の前には、巨大な扉が見られた。



局員「第二小隊の転送完了しました！」

局員「第一小隊侵入開始！」

ブリッジに到着した一同。

リンディ「おつかれさま」

なのは「あの…上条君は…」

リンディ「もう大丈夫です。彼は私達が助け出しますから」

アルフ「…」

リンディ「それから…フェイトさん…始めまして」

フェイト「…」

リンディ・ハラオウンの呼びかけに応えないフェイト・テストロツサ。

リンディ「（母親が逮捕されるシーンを見るのは忍びないわね…それにしても…真紀はまだ戻ってこないのかしら…）」

公園に残った結標真紀の安否を心配するリンディ。

リンディ「（なのはさん…彼女を何処か別の部屋に…）」

なのは「（は…はい）」

念話で通信を行うリンディに伝えるのは。

なのは「フェイトちゃん…良かったら私の部屋に…」

突然、モニターに映し出された映像を見たフェイト。

局員「総員、玉座の間に侵入！目標を発見！」

ブリッジにモニターに映し出されていた映像には、プレシア・テストロッサと鎖に繋がれて、身体から血を流している上条当麻の姿があった。

フェイト「当麻…！」

アルフ「トウマ…！」

なのは「酷い…！」

ユーノ「何て事を…！」

リンディ「魔導師でもない子供に…！」ギリ

ショッキングな映像を見せられて動揺を隠せないメンバー。

局員「プレシア・テストロッサ！時空管理法違反及び管理局艦船への攻撃容疑で貴方を逮捕します。

武装を解除してこちらへ…それと…上条当麻の開放を…！」

プレシア・テストロッサを取り囲んだ武装管理局員達。

時の庭園内の搜索を始めた局員達。  
そこで彼等は隠し扉を発見した。

局員「こ…これは…」

隠し扉の中にあつた物を見て驚きを隠せない局員達。  
その映像はアースラのモニターにも映し出されていた。

なのは「え!?!」

驚愕する高町なのは。

何故なら、隠し扉の中には、液体で満たされたガラスケースの中に  
『フェイト・テストロツサ』の姿があつたからだ。

フェイト「あ…ああ…」

ドオン!!

局員「うわああ!!」

ガラスケースに近付いた局員を紫色の雷が襲つた。

プレシア「私のアリシアに…近寄らないで!!」

局員「撃てえ!!」

デバイスを構えた局員達がプレシアに向かって一斉に魔力弾を発射  
した。

しかし、放たれた魔力弾をいとも容易く防いだプレシア。

プレシア「うるさいわ…」

リンディ「危ない！！防いで！！」

危機を察知したリンディだったが、時既に遅く、時の庭園内に居た武装局員達を紫の雷が襲った。

ズガン！！

局員「うわあああ！！」

崩れ落ちる局員達。

プレシア「ふふふ…ふふふふ…ふふ…」

リンディ「いけない！局員達の送還を！！」

エイミイ「りょ…了解です！！」

フェイト「アリ…シア…？」

エイミイ「座標固定！0120 503！」

局員「固定！転送オペレーションスタンバイ！」

アリシアの入ったガラスケースを愛おしそうに触るプレシア。

プレシア「もう駄目ね…時間が無いわ。たった9個のロストログイアではアルハザードに辿り着けるかどうかは…分からないけど…でも…もういいわ。終わりにする…この子を亡くしてからの…暗鬱な時

間も…この子の身代わりの人形を娘扱いするの…」

なのは「…」

フェイト「…」

モニターの方向を向いて語りかけるプレシア・テストロッサ。

プレシア「聞いていて？貴方のことよフェイト。せつかくアリシアの記憶をあげたのに…そっくりなのは見た目だけ…役立たずでちつとも使えない…私のお人形…」

エイミイ「最初の事故の時にね…プレシアは実の娘…アリシア・テストロッサを亡くしているの。彼女が最後まで行っていた研究は…使い魔とは異なる…使い魔を超える人造生命の精製…」

なのは「え？」

エイミイ「そして、死者蘇生の秘術…『フェイト』って名前は…当時…彼女の研究に付けられた開発コードなの…」

プレシア「良く調べたわね。そうよ…その通り…それにしても…」

鎖に繋がれた状態の上条当麻を見るプレシア・テストロッサ。

プレシア「この子にはフェイトが『人形』であることも教えてあげたのに…それでもフェイトを庇うなんて…本当に愚かね…」

フェイト「当…麻…」

プレシア「貴方は知らなかったわよね？この子が貴方の身代わりにお仕置きを受けていた事を…」

フェイト「え…」

プレシア「本当に滑稽すぎて笑えるわ」

アルフ「黙れ！！」

なのは「上条君！目を覚まして！」

プレシア「無駄よ」

クロノ「一般人をここまで傷付けるなんて…」ギリ

プレシア「あら…一つ勘違いしてるみたいだけど…私はそれほどこの子を…傷付けていないわよ？」

クロノ「戯言を…」

リンディ「…」

プレシア「私がこの子に始めて出会った時から、この子は傷だらけだったわよ？」

クロノ「何を言って…」

プレシア「大方…その『右手』が原因と言った所かしら？」

リンディ「『右手』…ですって？」

プレシア「本来なら魔法が存在する筈の無い世界で、魔法を完全に否定する力を持った少年。あまりにも不気味でしょう?」

クロノ「だからといって…」

プレシア「貴方達はこの子の右手の力を、AMGの延長とでも考えられているかしら?」

リンディ「どういふことかしら?」

プレシア「こつこつとよ」

予備のデバイスを取り出したプレシアは、それを上条当麻の右手に触れさせた。

バキン!!

クロノ「な!?!」

リンディ「嘘!?!」

ガラスが割れる様な音が響き渡った瞬間、プレシアの持っていたデバイスが粉々に砕け散った。

リンディ「まさか…上条君を連れて行った理由は…」

プレシア「そう…この子に邪魔されたら何が起きるか分からないのよ…」

ユ一ノ「そんな理由で…」

プレシア「こんなデタラメな力を持っている子が、普通の人間と同じ様な人生を過ごせたとと思う？」

リンディ「まさか…」

プレシア「疫病神の様な扱いでも受けていたんじゃないかしら？」

なのは「上条…君…」

フェイト「そんな…」

プレシア「彼についてはこんな所かしら？それにしても…」

プレシアはモニター越しにフェイトの姿を見る。

プレシア「だけど駄目ね…『フェイト』は『アリシア』になれなかったわ。所詮作り物の生命は作り物。失った者の代わりにはならないわ…アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々我侂も言ったけど、私の言うことをとても良く聞いてくれた。」

なのは「やめて…」

プレシア「アリシアはいつでも私に優しくかった…」

ガラスケース越しのアリシアの頬を撫でるプレシア。

プレシア「フェイト…やっぱり貴方はアリシアの偽者よ。せつかくあげたアリシアの記憶も貴方じゃだめだった…」



なのは「やめて…やめてよ！」

プレシア「アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使うだけのお人形…だから貴方はもう要らないわ…何処へなりとも消えなさい！！」

なのは「お願い！！もうやめて！！」

高町なのはの悲痛な叫びを全く聞き入れないプレシア・テストロッサ。

プレシア「良い事を教えてあげるわフェイト…貴方を作り出してからずっとね…私は貴方のことが大嫌いだったのよ！」

そのまま意識を失ってしまったフェイト・テストロッサ。

なのは「フェイトちゃん！！」

ユーノ「フェイト…」

崩れ落ちる彼女を抱き止めるなのは。

局員「局員の回収、終了しました」

リンディ「…」

エイミイ「た、大変大変！！ちょっと見てください！！」

局員「庭園内に魔力反応多数！！」

クロノ「何だ！？何が起こってる！？」

局員「庭園敷地内に魔力反応！！いずれもAクラス！！総数60…  
80…まだ増えています！！」

リンディ「プレシア・テストロッサ…一体何をするつもり！？」

プレシア「私達の旅を…邪魔されたくないのよ…私達は旅立つの！」

プレシア・テストロッサの目の前に、フェイト・テストロッサが集めた9個のジュエルシールドが出現した。

プレシア「忘れられた都…アルハザードへ！！」

クロノ「まさか！！？」

プレシア「この力で旅立つて…取り戻すのよ…全てを！！」

9個のジュエルシールドが輝きを放ち始める。

局員「次元震です！中規模以上！！」

リンディ「振動防御！！ディストーションシールドを！！」

局員「ジュエルシールド9個発動！次元震、更に強くなります！！」

リンディ「転送可能距離を維持したまま、影響の薄い空域に移動を  
！！」

局員「りよ…了解です！」

エイミー「アル…ハザード…」

クロノ「馬鹿なことを…！」

エイミー「クロノ君!？」

クロノ「僕が止めてくる!!ゲート開いて!!」

ブリッジから出て行ったクロノ・ハラオウンは、アースラの廊下を全力疾走していた。

クロノ「(忘れられた都…アルハザード…もはや失われた禁断の秘術が眠る土地…そこで何をしようって言うんだ?自分が無くした過去を取り戻せるとでも思っているのか?)」

プレシア「はははは…ははは…はははははは!!」

狂ったように笑うプレシア・テストロッサ。

廊下を走りながらデバイスを取り出したクロノ。

クロノ「どんな魔法を使ったって…過去を取り戻す事なんか…出来るもんか…！」

リンディ「く…」

真紀「何やら凄い事になってるみたいだけど…」

リンディ「真紀…大丈夫だった?」

真紀「大丈夫じゃないとここにいないでしょ？状況は？」

リンディ「良くないわね……」

真紀「そう……」

なのは「……」

決意を秘めた眼でモニターを見つめる高町なのはだった。

プレシア「私とアリシアは……アルハザードで全ての過去を取り戻す  
！！！」

### 第30話 生きる意味

『アースラ』

局員「次元震発生！振動：徐々に増加しています」

局員「この速度で振動が増加していくと、次元断層の発生予測値まであと30分足らずです！」

エイミィ「あの庭園の駆動炉もジュエルシードと同型のロストロギアです！それを、暴走覚悟で発動させて、不足分を補っているんです！」

リンディ「…初めから片道の予定なのね…！」

意識の無いフェイト・テスタロッサを医務室に向けて搬送していた、高町なのはとユーノ・スクライアとアルフと結標真紀。  
ちなみに、フェイトはアルフが抱きかかえていた。

クロノ「あ…！」

なのは「え？」

医務室に向かう途中で、クロノ・ハラオウンに遭遇した一同。

なのは「クロノ君！？何処へ？」

クロノ「現地へ向かう！元凶を叩いて彼を助けないと…！」

アルフ「トウマ…」

なのは「私も行く!!」

ユ一ノ「僕も!!」

クロノ「…分かった!!」

真紀「彼女は私をアルフさんに任せて」

アルフ「え？」

なのは「お願いします!」

クロノ「真紀さん!？」

真紀「私も出来るだけ速く行くから」

クロノ「…了解です!」

真紀「速く行きましょう?」

アルフ「う…うん!」

そのまま分かれようとする一同だったが…

リンディ「クロノ、なのはさん、ユ一ノ君、私も現地に出ます!貴方達はプレシア・テストロツサの逮捕と上条君の救出を!」

なのは「はい！」

ユーノ「分かりました！」

クロノ「了解！」

リンディ「（真紀も出来る限り早く来て！）」

真紀「（任せといて）」

時の庭園内に向かったなのは達と医務室に向かったアルフと真紀。医務室に到着して、フェイトをベッドの上に移動させた二人。医務室内にあるモニターで庭園内の様子を見ていたアルフと真紀。

アルフ「トウマ……」

現在、プレシア・テストロッサに囚われたままの上条当麻を心配するアルフ。

真紀「大丈夫かしら？」

『時の庭園』

その頃、時の庭園内に到着したなのは達一行。転移を完了した彼等が発見した物は、鎧の集団だった。

ユーノ「一杯居るね……」

クロノ「まだ入り口だ……中にはもっというよ……」

なのは「クロノ君…この子達って…」

クロノ「近くの相手を攻撃するだけのただの機械だよ」

なのは「そっか…なら安心だ」

中に人間が入っていないことに安堵した少女。

そのまま、鎧に向けて『レイジングハート』を向けようとしたが、クロノが右手で動きを制した。

クロノ「この程度の相手に無駄弾は必要無いよ」

なのは「え？」

デバイスを鎧の集団に向けるクロノ。

『Stinger Snip』

デバイスから青色の魔力弾が発射される。

クロノ「はあ!!」

襲い掛かって来る鎧達を、容易く切り裂く魔力弾。

なのは「速い！」

クロノ「スナイプショット!!」

鎧を蹴散らしていくクロノ。

そして彼は、一際大きい鎧にデバイスを突き刺した。



『Break Impulse.』

内側から破壊されて爆発した鎧。

クロノ・ハラオウンの戦いを始めて見た高町なのはとユーノ・スクライアは、呆気に取られていた。

クロノ「ぼーっとしてないで！行くよ！！」

なのは&ユーノ「う…うん！！」

時の庭園内を進んで行く少年少女達。

所々、崩落した床に謎の空間の様な物が広がっていた。

クロノ「その穴、黒い空間がある場所は気をつけて！」

なのは「え？」

ユーノ「虚数空間。あらゆる魔法が一切発動しなくなる空間なんだ！」

なのは「そんな…」

クロノ「飛行魔法もデリートされる！もしも落ちたら、重力の底まで落下する！二度と上がって来れないよ！！」

なのは「き…気をつける！！」

そのまま先へ進んだ一同は、扉を発見して広場らしき場所に出た。その広場には、先程よりも大量の鎧が待ち構えていた。

更に、先へ進む道は二つに分かれていた。

クロノ「ここから二手に分かれる！」

なのは「あ…！」

クロノ「君達は最上階にある駆動炉の封印を！」

なのは「クロノ君は？」

クロノ「プレシアの元へ行く！それが僕の仕事だからね…今道を作るから！そしたら！」

なのは「うん！」

足元に桃色の羽を展開させて、ユーノの手を取るなのは。クロノのデバイスに巨大な球状の魔力弾が精製されていく。

『Blaze Cannon.』

デバイスから放たれた一撃は多くの鎧を破壊した。

なのは「クロノ君！気をつけてね！！！」

『アースラ』

リンデイ「私も出ます！庭園内でディストーションフィールドを展開して！次元震の進行を抑えます！！！」

医務室のモニターで様子を見ていた真紀とアルフ。

アルフ「トウマとあの子達が心配だから、アタシもちょっと手伝ってくるね?…フェイトをお願い」

真紀「分かったわ」

フェイトの頬を優しく撫でていたアルフ。

アルフ「直ぐ帰ってくるよ。…トウマと一緒に…そんで全部終わったら…ゆつくりでいいから…アタシの大好きな…本当のフェイトに戻ってね?これからは、フェイトの時間は全部フェイトが自由に使っていていいんだから…」

扉に向かうアルフはもう一度フェイトの顔を見て、医務室を出て行った。

真紀「…」

アルフが医務室を出て行ってから少しの時間が経過した。

フェイト「…う…」

真紀「気が付いた?」

フェイト「真紀…さん…」

真紀「皆が心配してたわよ?」

フェイト「すみません…」

真紀「謝って欲しいわけじゃないんだけどね…」

フェイト「あれは？」

モニターに映し出された映像を見るフェイト。

真紀「まあ…ちょっとね…」

真紀は説明することを渋ったが、映像を見たフェイトは何が起きているのかを理解した。

フェイト「母さんは…最後まで私に微笑んでくれなかった…」

真紀「…」

フェイト「私が生きていたかと思ってたのは…母さんに認めて欲しかったから…。どんなに足りないと言われても…どんなに酷いことをされても…だけ…笑って欲しかった…。あんなにハッキリと捨てられた今でも…私…まだ母さんに縋り付いてる…」

真紀「私は…フェイトちゃんみたいに親が居るわけじゃないから…残念ながら気持ちは分からないんだけどね…」

フェイト「え？」

真紀「物心付いた時には親がいなくてね…」

フェイト「そんな…」

真紀「正直に言って、昔の私は生きていたなんて微塵も考えた事

は無かった」

フェイト「……」

真紀「でもね…とあるきつかけで…生きたいと思った事があるの」

フェイト「え？」

真紀「結構前に出会った友達が居てね、その子と出会ってから生きてみたいって思ったのが最初かしらね…」

フェイト「あの…その人は…」

真紀「今はもう会えないって言えばいいのかしら…」

フェイト「!?!?…すみません」

真紀「別に気にしなくてもいいわよ。…フェイトちゃん…貴方にとつて本当に大切なのは、お母さんだけなのかしら?」

フェイト「それは…」

モニターを見るフェイト。

そこには、高町なのは達と合流していたアルフの姿があった。

フェイト「アルフ…ずっと傍に居てくれたアルフ…言う事を聞かない私に…きつと…随分と悲しんで…」

モニターに映されている高町なのはの姿を見る。

フェイト「何度もぶつかつた…真つ白な服の女の子…。当麻のクラスメート…当麻と同じ様に私と対等に真つ直ぐ向き合ってくれたあの子…何度も出会って…戦って…何度も私の名前を呼んでくれた何度も…何度も…」

プレシア・テストロッサに捕らえられている上条当麻の姿を思い出す。

フェイト「当麻…初めて会った時からずっと支えてくれた。辛い時や悲しい時にいつも助けてくれた。どんなに傷付いても大丈夫って言って…無茶し続けて…」

真紀「貴女にとって本当に大切なのはお母さんだけじゃないでしょう?」

フェイト「…」

真紀「貴女の為に怒って、笑って、泣いてくれる、本気で心配してくれる人達がこんなにも居るのよ?」ナデナデ

フェイト「私…は…」

真紀「確かに貴女は『アリシア・テストロッサ』のクローンとして生まれたのかもしれないけど、貴女は誰が何と言おうと『フェイト・テストロッサ』なのよ?そして、あの子達が望んでいるのは『アリシア』じゃなくて『フェイト』だから…」

フェイト「真紀…さん…」

真紀「貴女は決して『孤独』なんかじゃなかったのよ」ギョ

フェイト・テスタロッサを抱きしめる結標真紀。  
涙を堪え切れずに流したフェイト。

フェイト「生きていたと思ったのは…母さんに認めてもらいたいからだった…！それ以外に、生きる意味なんか無いと思ってた…！それが出来なきゃ…生きていけないんだと思ってた…！」

真紀「…うん」

海上での高町なのはとの全力の戦いを思い出していたフェイト。

フェイト「捨てれば良いってわけじゃない…逃げれば良いってわけじゃ…もつと…無い…」

再びモニターに視線を移したフェイト。

そこには、鎧と戦っているなのは達の姿があった。  
ベッドから立ち上がるフェイト。

真紀「もう大丈夫？」

フェイト「はい」

決意を秘めた表情で真紀の言葉に応えるフェイト。

フェイト「私の…私達の全ては…まだ始まってもない…」

『バルディッシュ』を取り出したフェイト・テスタロッサ。

フェイト「そうなのかな？『バルディッシュ』…私…まだ始まって

もいなかったのかな？」

真紀「それならこれから始めればいいのかよ」「ナデナデ

『Get Set』

真紀「この子も気合十分みたいね」

フェイトの言葉に呼応して、輝きを放ち始める『バルディッシュ』

フェイト「そうだよね…『バルディッシュ』も…ずっと私の傍に居てくれたんだよね…お前もこのまま終わるのなんて嫌だよね？」

『Yes, sir』

フェイト「上手く出来るか分からないけど…一緒に頑張ろう…私達の全ては…まだ始まってもない…」

真紀「手伝うわよフェイトちゃん」

フェイト「真紀さん…ありがとう」

真紀「どういたしまして」

バリアジャケットに着替えたフェイト。

フェイト「だから…本当の自分を…始める為に…！」

フェイト・テストロッサの足元に展開される転送用の魔法陣。



フェイト「今までの自分を…終わらせよう…！」

そして魔法陣が輝きを放ち、医務室からフェイト・テストロッサと結標真紀の姿が消えた。

『時の庭園』

広場を進んだ先で、鎧と戦っていたなのは達。  
次々と現われる敵に苦戦を強いられていた少女達。

アルフ「くそ！数が多い！！！」

なのは「このままじゃ…このお！！！」

ユーノ「なんとかしないと…！」

バキン…

ユーノ「あ…！」

鎧を魔力で編んだ鎖で拘束していたユーノだったが、鎧に鎖を引き千切られてしまった。

ユーノ「なのは！！！」

そのまま、鎧は高町なのはに向かって攻撃を加えようとした。

なのは「え？！」

ユーノ「なのはあ！！！」

反応の遅れた少女に鎧の攻撃が直撃する寸前で…

『Thunder Rage.』

突如、上空から迸った雷が鎧を攻撃する。

その衝撃で動きを封じられた鎧。

何が起きているの理解出来ず、上空を見上げた高町なのは。

其処に居たのは、フェイト・テストアロツサと結標真紀だった。

真紀「大丈夫だったかしら？」

ユーノ「真紀さん!？」

『Get Set.』

フェイト「サンダーレイジ!!」

『バルディッシュ』から放たれた黄金の閃光によって、打ち抜かれた鎧はその攻撃に耐え切れず爆発した。

アルフ「フェイト？」

ドガアン!!

医務室が意識の戻らなかつた少女がこの場に現われたことに、動揺を隠せないアルフだったが、壁を破壊して出てきた鎧によりその考えは中断された。

その鎧は、今まで戦ってきた鎧より遥かに巨大で、背中には砲台のような物が備え付けられていた。

真紀「邪魔しないの」

訓練用のデバイスで真紀が魔力弾を放つ。

しかし、訓練用である為に威力は弱くバリアによって簡単に防がれてしまった。

真紀「あらら…やっぱり訓練用じゃ効かないか…」

その様子を見ていたフェイトとなのは。

フェイト「大型だ…バリアが強い！」

なのは「うん！それにあの背中…」

巨大な鎧の背中に取り付けられた砲台が輝き始める。

フェイト「だけど…二人でなら…」

なのは「あ…うん！うん！うん！！」

予想外の申し出に少しばかり動揺する高町なのはだったが、直ぐに喜びを露にしていた。

フェイト「行くよ『バルディッシュ』！！」

『Get Set.』

なのは「こっちもだよ『レイジングハート』！！」

『Stand By, Ready』

二人の少女が攻撃の準備を行っているのに対して、巨大な鎧の背中の砲台に収束しつつある魔力。

真紀「（これが必要かしら？）」

『フェンリル』を取り出そうとする真紀だったが、その心配は無用だった。

フェイト「サンダー…バスター！！」

なのは「デイバイーン…バスター！！」

なのは&フェイト「せー…っの！！」

黄金と桃色の閃光が巨大な鎧を貫いた。

その高すぎる威力は、時の庭園を突き抜けるほどであった。

真紀「お見事」

ユーノ「す…凄い…」

アルフ「デタラメじゃないか…」

そして、その先に進もうとす一同だったが…

ドゴオンー！！

なのは「え…」

フェイト「まだ…こんなに…」

壁を破壊して現われたのは、先程の巨大な鎧と同型の物であった。

ユーノ「しかも…五体…」

アルフ「ちくしょう…」

真紀「はあ…極力『コレ』は使いたくなかったんだけどな」

一人だけ溜息をつく真紀。

真紀「ちよつとこれから見た物は時空管理局には内緒にしといても  
らえるかしら？」

なのは「え？」

フェイト「真紀さん？」

ユーノ「一体何を…」

アルフ「何考えてんだい？」

真紀「見れば分かるわよ」

懐から小型の機械を取り出した結標真紀。  
それが一体何なのか分からない一同。

真紀「フェンリル…セットアップ！」

『Set up.』

小型の機械から赤い光が放たれる。

そして、バリアジャケットに着替えた真紀。

その姿は、高町なのは達が知る魔導師の姿とは異なっていた。

ユイノ「デバイス…なのか？」

アルフ「見たこと無いけど…」

なのは「嘘…」

フェイト「貴女は一体…」

真紀「まあそれはいいじゃない…それより今は…」

メイスの形をした『フェンリル』を巨大な鎧の一体に向ける。

真紀「こいつらを潰すのが先よ!!」

『Occstan Launcher』

『フェンリル』から放たれる赤い閃光。

それはバリアさえも容易く貫いて巨大な鎧をいとも簡単に破壊した。

ドオン!!

フェイト「嘘…」

なのは「す…凄い…」

アルフ「何だよそれ…」

ユーノ「あの鎧をこんな簡単に…」

魔力を収束して攻撃を加えようとしていた巨大な鎧。

真紀「一気に叩き潰す!!」

『All right.』

『フェンリル』を赤い魔力が覆った。

真紀「はああ!!」

ベキベキベキ!!

メイスの状態で殴られた巨大な鎧は、成す術も無く粉碎されていく。そうして、残り三体の巨大な鎧を破壊した真紀。しかし、既に彼女達は大量の鎧に囲まれていた。

真紀「ここは私が引き受けるから皆はこの先へ!」

なのは「でも!」

真紀「上条君を助けるんでしょ!それに私なら大丈夫よ!」

フェイト「真紀さん…」

真紀「フェイトちゃん…頑張つてね」

フェイト「…はい」

真紀「さて…話も決まったことで…」

進路を塞ぐ鎧の集団に向けて『フェンリル』を向ける真紀。

『Ocstan Launcher』

ドオン!!

群がる敵を一掃して、その隙に先へ進んでいく一同。

なのは「（上条君…待っててね…）」

フェイト「（当麻…お母さん…）」

高町なのはとフェイト・テストロッサの攻撃で大きく揺れていた時の庭園。

プレシア・テストロッサの近くにはアリシア・テストロッサが入ったガラスケースと鎖に繋がれていた上条当麻の姿があった。

プレシア「…来たのね!? だけでもう間に合わないわ…ねえ…アリシア…ああ…アリシア…」



### 第31話 戦いの終わり

『時の庭園』

結標真紀に促されて、駆動炉に向けて移動していた高町なのは達。

アルフ「フェイト…良かった…」

移動しながら涙を流していたアルフ。

フェイト「アルフ…心配掛けてごめんね。ちゃんと自分で終わらせて…それから…始めるよ…本当の自分を…」

なのは「フェイトちゃん…」

吹っ切れた表情を見せていたフェイト・テストロッサに喜びを隠せない高町なのは。

なのは「でも…真紀さんは大丈夫かな？」

ユーノ「あんなに強いからきっと大丈夫だとは思っけど…」

フェイト「分からないけど…きっと…真紀さんなら大丈夫」

アルフ「足止めしてくれる真紀の為にも急がないとね!…」

フェイト「うん…」

なのは「そうだね…」

ユーノ「うん…」

なのは「どうしたのユーノ君？」

何やら思い悩んでいる様子のユーノ・スクライアに話しかける少女。

ユーノ「彼女のデバイス…何処かで見た様な気がするんだけど…」

なのは「そうなの？」

ユーノ「うん…5年前にミッドチルダで…あれに似た様な物を見た様な…」

アルフ「まあ…今はその事はいいでしょ…急いでトウマを助けないと！」

フエイト「急ごう…！」

一方その頃、鎧と交戦中の結標真紀。

真紀「はああ…！」

ベキベキ…！

『O c s t a n L a u n c h e r』

ドオン…！

襲ってくる鎧を順当に破壊していく真紀。

初めは100体居た鎧を30体ほど破壊した少女。

真紀「駆動鎧に比べたら弱いけど…こんなに数があると面倒ね…」

『Shooting mode』

メイスから銃の形に変形した『フェンリル』

真紀「消費が激しいけど…これで終わらせる!!」

『Ocstan Rifle』

トトトトトトトト!!

赤い魔力を帯びた弾丸が大量に発射される。

魔力により強化された弾丸が大量の鎧を易々と貫いていた。

70体の鎧を襲う弾丸の嵐。

あっといまに殲滅される鎧の集団。

高すぎる威力故に、この攻撃によって時の庭園の外壁には大量の穴が開けられていた。

真紀「ふう…何とかなつたか…」

少女達に合流するために移動を開始しようとしていた彼女だったが…

『Overheat』

真紀「何でこんな時に…ああもう!」

動作不良を起こした『フェンリル』を懐にしまって、訓練用のデバ

イスで先に進む真紀。

真紀「無事でいてよ…」

最下層に移動していたプレシア・テストロッサ。

彼女の眼前には9個のジュエルシードが宙に浮かんでおり、輝きを放っていた。

プレシア「後…もう少し…」

ズドオン！！

駆動炉に向けて移動していた少年少女達は、扉を破壊した。彼女達が入った部屋にはエレベーターらしき物体が見られた。

フェイト「あそこのエレベーターから駆動炉に向かえる」

なのは「うん！ありがとう！…フェイトちゃんは上条君とお母さんの所に…」

フェイト「…うん！」

なのは「私…その…上手く言えないけど…」

ギユ！

フェイト「え？」

フェイト・テストロッサの手を握った高町なのは。

突然の行動に、どう反応していいか分からず戸惑っていたフェイト。

なのは「頑張つて…」

フェイト「あ…」

少女の言葉を聞いて、なのはの手を握り返したフェイト。

フェイト「…ありがとう」

連絡を行っていたユーノが彼女達に話しかけた。

ユーノ「今はクロノが一人で向かってる！急がないと間に合わないかも…！このままじゃ当麻君が！」

アルフ「フェイト！」

フェイト「うん！」

高町なのはとユーノ・スクライアは駆動炉に、フェイト・テストロツサとアルフはプレシア・テストロツサが居ると思われる最下層に向けて移動を開始した。

クロノ「エイミー！！」

時の庭園内からアースラに向けて連絡を行っていたクロノ・ハラオウン。

エイミー「なのはちゃんとユーノ君…駆動炉へ突入！フェイトちゃんとアルフは最下層へ！大丈夫…いけるよきつと！」

クロノ「ああ！」

その頃、海鳴市では原因不明の地震が発生していた。

仕上「な…何だ！？地震か！？」

なのは「なのはちゃん…上条君…」

アリサ「なのは…上条…」

それぞれの自宅に居た少年と少女の友人達。

彼等は最近会う事の出来ない友人を心配していた。

海鳴市にあるビルの屋上に居た土御門元春。

土御門「にゃく…これがロストロギアの力って奴か…確かにヤバそうなんだぜい…」

『時の庭園』

エレベーターに乗り込んで、駆動炉がある場所まで移動したなのはとユーノ。

彼女達を待ち構えていた大量の鎧。

その数は真紀が戦っていた数より少なかったが、それでも相当の数だった。

ユーノ「防御は僕がやる！なのはは封印に集中して！」

なのは「うん！いつも通りだよね！ユーノ君…いつも私と一緒に居てくれて…守っててくれたよね？」

『Sealing Mode』

駆動炉を封印する為に変形する『レイジングハート』  
そして『レイジングハート』を構えた高町なのは。

なのは「だから戦えるんだよ。背中がいつも暖かいから！」

少女の足元に展開された桃色の魔法陣。

そして、彼女の周囲に魔力弾が出現した。

なのは「行くよ！ディバインシューター…！フルパワー…！シュー  
ト…！」

傍らに居る上条当麻の姿を見るプレシア・テストロッサ。

プレシア「…」

リンディ「プレシア・テストロッサ」

プレシア「!？」

突如聞こえてきた声に、慌てて周囲を見渡すプレシア。

彼女の近くには巨大な魔法陣を展開しているリンディ・ハラオウ  
ンの姿があった。

彼女の周囲に居た筈の鎧は全てが破壊されていた。

そして、リンディの背中には四枚の羽根が展開されていた。

リンディ「終わりですよ」

プレシア「何ですって？」

リンデイ「次元震は私が抑えています。駆動炉も時期に封印、貴女の元には執務官が向かっています。…忘れられし都…アルハザード…そして…そこに眠る秘術は存在するかどうか曖昧な…ただの伝説です！」

プレシア「違うわ…アルハザードへの道は次元の狭間にある！時間と空間が砕かれたとき…その狭間に滑落していく輝き…道は…確かにそこにある！」

リンデイ「随分と分の悪い賭けだわ…貴女は其処に行つて…何をするの？失つた時間と犯した過ちを取り戻す!？」

プレシア「そうよ…私は取り戻す！私とアリシアの…過去と未来を！取り戻すの…こんな筈じゃなかった…世界の全てを！」

ズドオン!!

プレシア「!？」

最下層の外壁が破壊される。

破壊された外壁から現われたのは、頭から血を流しているクロノ・ハラオウンだった。

クロノ「世界は…何時だつて…こんな筈じゃないことばかりだよ!! ずっと昔から…何時だつて誰だつてそうなんだ!!」

プレシア「…」

クロノに続いて、最下層に現われたフェイト・テスタロッサとアル



フ。

アルフ「トウマー!!」

未だに意識の戻らない上条当麻に声を掛けたアルフ。

フェイト「当麻…お母さん…」

当麻「…う…」ピク

フェイトとアルフの声で意識を戻した少年。

プレシア「起きたのね…」

クロノ「今助ける!!」

少年を救出するために動き始めたクロノ。  
しかし…

プレシア「止まりなさい!!」

ズガン!!

紫の雷がクロノを襲う。

クロノ「く…」

『Protection』

咄嗟にバリアを張って攻撃を防いだクロノ。

アルフ「アイツ…」ギリ

クロノ「彼をどうするつもりだ!？」

プレシア「別に何もしないわよ…貴方達が…私が…アルハザードに行くのを邪魔しなければね…」

アルハザードに異常なまでの執着を示すプレシアにクロノは怒りを露にする。

クロノ「こんな筈じゃない現実から、逃げるか、それとも立ち向かうかは個人の自由だ!だけど!自分の勝手な悲しみに無関係な人間まで巻き込んでいい権利は…何処の誰にもありはしない!！」

睨み合うクロノとプレシアだったが…

真紀「ごめん!遅くなった!」

フェイト「真紀さん!」

リンデイ「遅いわよ!」

真紀「上条君は任せて!」

訓練用のデバイスでプレシアの場所まで移動する真紀。

プレシア「させないわよ!」

先程、クロノ・ハラオウンに放った攻撃を真紀にも放つプレシア。

真紀「甘い！」

紙一重で攻撃を避けた真紀は、そのまま鎖に繋がれた少年の場所まで移動した。

そして、魔力弾を放ち鎖を破壊した。

真紀「アルフさん！！」

ブン！！

少年をアルフに向かって投げる真紀。

ドサ！！

少年を上手に受け止めたアルフ。

真紀「ナイスキャッチ！」

クロノ「凄い……」

リンディ「流石ね」

プレシア「よくも！」

ズドオン！

至近距離で真紀に向けて攻撃を放つプレシアだったが、それも避けられる。

距離を取ってリンディ達が居る場所まで移動した少女。

当麻「フェイト…アルフ…」

フェイト「良かった…当麻…」

アルフ「心配掛けて…」ギュー！

当麻「い…痛いよ…アルフ」

涙を浮かべるフェイトと、少年を思いっきり抱きしめるアルフ。

当麻「僕は…大丈夫だから…降ろして…」

アルフ「分かったよ。だけど無理しちゃ駄目だよ」

当麻「うん…」

プレシア「本当に頑丈ね…」

上条当麻を睨みつけるプレシア・テストロッサ。

当麻「…」

フェイト「…」

プレシア「本当に忌々しい…ゴホ！…ゲホ！」

フェイト「母さん！」

口から血を吐いたプレシアを心配して、彼女に近付いたフェイト。

プレシア「何をしにきたの？」

フェイト「あ…」

プレシア「消えなさい。もう貴女に用は無いわ」

少しばかり動揺していたフェイト・テストロッサだったが、真っ直ぐプレシア・テストロッサを見て…

フェイト「貴女に言いたい事があって来ました。私は…私は…『アリシア・テストロッサ』じゃありません！貴女が造った唯の人形なのかもしれません」

その頃、駆動炉の封印に成功した高町なのはとユーノ・スクライアは最下層に向けて移動をしていた。

なのは「（上条君…どうか無事で…）」

フェイト「だけど…私は…『フェイト・テストロッサ』は貴女に生み出してもらって…育ててもらった…貴女の娘です…！」

プレシア「ふ…ふふふ…あはははは…！！だから何！？今更貴女を娘とも思えと言つもの…！」

フェイト「貴女が…それを望むなら…」

自身の思いを必死で伝えるフェイト・テストロッサ。

フェイト「それを望むなら…私は世界中の誰からもどんな出来事か

らも…貴女を守る…」

プレシア「…」

フェイト「私は…貴女の娘だからじゃない…貴女が…私の母さんだから！」

プレシアに対して手を差し伸べるフェイト。  
しかし…

プレシア「くだらないわ…」

フェイト「え…」

フェイト・テストロッサの思いを拒絶したプレシア・テストロッサ。  
少女の瞳に涙が溜まる。

当麻「ふざけんじゃねえ…」

フェイト「当…麻…」

プレシア「何ですって？」

当麻「くだらねえだと…？馬鹿な事言っただけじゃねえよ！」

プレシア「馬鹿な事…ですって…？」

当麻「フェイトがどんな経緯で生まれたとしてもテメエの娘だろうが…！」

プレシア「黙りなさい!!」

ドッ!!

バキン!!

放たれた攻撃をボロボロの右手で打ち消した少年。

当麻「フェイトがどんな思いでジュエルシードを集めていたのか、  
メエは考えたことがあるのか!？」

プレシア「『人形』如きの考えなんて理解する必要なんてないのよ  
!!」

当麻「何が『人形』だ…小せえ事情に振り回されやがって…!!」

プレシア「小さい…ですって…」

当麻「元々『アリシア』も『フェイト』も一人しかいねえだろうが  
!!『フェイト』は道具でも玩具でもねえ…たった一人のメエの  
娘だろうが!!」

プレシア「黙れええええ!!」

容赦なく少年に向けて攻撃を放つプレシア。

しかし、それらの攻撃を全て打ち消した上条当麻。

遅れて、最下層に到着した高町なのはとユーノ・スクライア。

なのは「上条君…」

ユーノ「あんな状態で……」

当麻「どんなに辛くても！泣き叫んでも！誰かを恨んでも！亡くした人間は帰って来ねえんだよ！！だから！てめえは『アリシア』の思いを踏み躪ってんじゃねえよ！！」

プレシア「私が……『アリシア』の思いを……踏み躪ってる……？」

当麻「てめえが……いつまでも……そんなくだらねえ『幻想』に……縋っているんなら……」

血が吹き出る程に右拳を握り締める上条当麻。

当麻「まずは……そのふざけた『幻想』を……ぶち壊す……！！」

最下層に居る人間の中で、最も傷付いている少年だったが、プレシア・テストロッサに向かって全力で駆け出した。

少年の身体から流れ出している血液が床を濡らしていた。

プレシア「く……」

紫の閃光を少年に放つが、それらを右手で『破壊』する少年。

防げなかった閃光が、上条当麻の体を切り裂くが、それでも少年は止まらない。

プレシア・テストロッサの懐まで潜り込んだ上条当麻。

当麻「テメエが囚われている『幻想』は……俺が纏めてぶち壊す！！もう一度やり直して来い！！この大馬鹿野郎オオオオ！！！！」

ドゴオ！！



プレシア「が!?!」

プレシア・テストロッサの頬を全力で殴りつけた上条当麻。

なのは「上条君!?!」

フェイト「当麻!?!母さん!?!」

アルフ「トウマ!?!」

二人の元へ駆けつけたフェイト・テストロッサ。

ユーノ「す……凄い……」

クロノ「何て奴だ……」

リンディ「嘘でしょ……」

真紀「……」

何とか少年の攻撃を耐えたプレシア・テストロッサ。

しかし、彼女の頭の中には一つの考えが駆け巡っていた。

プレシア「(私が……プレシアを……弄んでいた?)」

プレシア「私は……」

当麻「はあ……ぜえ……ゲホ……」

満身創痍の状態で自分を睨みつける上条当麻。

そして、自分の近付いて来たフェイト・テストロッサ。自分の犯した過ちを自覚したプレシア・テストロッサ。

プレシア「ごめんなさい… フェイト… 本当に…ごめんなさい…」

その場に泣き崩れるプレシア。

フェイト「母さん…！」

プレシア「でも…私は…」

フェイト「もう…いいんだよ…母さん…」

プレシア「フェイト…」

自分の『娘』を抱きしめるプレシア・テストロッサ。

なのは「良かった…」

リンディ「ええ…早くここから脱出しなきゃ…」

戦闘の影響で所々崩落していた時の庭園。

クロノ「そうですね…」

クロノは全員を誘導しようとしたが、9個のジュエルシードが一際強い輝きを放ち始める。

クロノ「まずい…！」

ジュエルシードの暴走に合わせて崩壊を始めた時の庭園。

リンデイ「急がないと！」

アースラに居るエイミーが連絡を行う。

エイミー「艦長！駄目です！庭園が崩れます！戻ってください！この規模の崩壊なら次元断層は起こりませんから！クロノ君達も脱出して！崩壊までもう時間が無いの！！！」

クロノ「了解した！皆急ぐぞ！」

なのは「はい！」

フェイト「母さん…行こう？」

プレシア「ええ…」

移動を開始したフェイトとプレシア。

しかし、崩落した岩がプレシア・テストロッサの頭上目掛けて落ちてきている事には、誰一人、気が付かなかった。

上条当麻を除いて…

ドン…！

プレシア「え？」

突然、背中を押されて動揺するプレシア。

そして…

グシャ…

フェイト「え？」

なのは「…上…」

崩落した岩が上条当麻の右腕を押し潰した。

リンディ「う…そ…」

アルフ「トウ…」

真紀「く…」

ドゴオン！

少年を押し潰した岩を破壊する真紀。

プレシア「あ…あ…」

少年の身体を確認する一同。

右腕以外は特に崩落した岩の影響を受けていなかったが…

なのは「いや…」

フェイト「あ…」

少年の右腕は見るに耐えない姿となっていた。

右腕は有り得ない方向に折れ曲がっており、肉は避けて、何箇所か

骨が見えていた。

クロノ「う…」

執務官として経験を積んでいたクロノですら、このような惨状を見るのは初めてだった。

なのは「嫌…嫌だよ…」

フェイト「血が…止まらないよお…」

右腕から大量の血液が止め処なく流れ出ていた。

真紀「このままだと失血死も…」

アルフ「トウマ…!」

益々強い輝きを放つジュエルシード。

プレシア「く…」

上条当麻に回復魔法を施すプレシア・テストロッサ。  
しかし…

バキン!!

プレシア「そんな…」

回復魔法さえも破壊する右手。

リンディ「二人ともしっかりしなさい！」

リンディがなのはとフェイトの声を掛けるが…

なのは「上条君…嫌だよ…」

フェイト「当麻…目を…覚まして…」

錯乱している彼女達に、リンディの声は届かなかった。

エイミィ「お願い皆！脱出急いで！！」

必死で脱出を促すエイミィ。

崩壊が進む時の庭園。

それに合わせて『アリシア・テストロッサ』の入ったガラスケースが、虚数空間に落下して行った。

プレシア「（ごめんね…アリシア…）」

真紀「このままじゃ…」

ユーノ「もう…間に合わない…」

クロノ「くそお！！」

限界を超えて脱出すらも不可能になってしまった。

ジュエルシードが輝きを増して行く。

ただ『死』を待っただけだった一同だったが、予想だにしない出来事が発生した。

当麻「…」スッ

なのは「上条君!？」

フェイト「当麻!？」

アルフ「良かった…」

突然立ち上がった上条当麻に喜びを隠せない少女達。

真紀「嘘でしょ…本当に…人間なの…?」

クロノ「だが…このままじゃ…」

上条当麻が起きた所で、事態が解決するわけではない。

リンディ「どうして…意識があるの?」

しかし、少年や少女達は軽いパニックになっているから違和感には気付かなかったが、リンディは少年の意識が戻ったことが不可思議でならなかった。

当麻「…ク…ククク…」ニイ

なのは「上条…君?」

フェイト「当…麻?」

アルフ「どうしちゃったんだよ!？」

引き裂いた様な笑みを浮かべる少年。  
そして…

バキーン！！

世界が割れる様な音が周囲に響き渡る。

そして、輝きを放っていた9個のジュエルシールドがいとも容易く破壊された。

崩壊が止まった時の庭園。

リンディ「ジュエルシールドが…こんなに簡単に…」

真紀「信じられない…」

当麻「…」ドサ

なのは「上条君！！」

フェイト「当麻！！」

アルフ「くそ…！！」

クロノ「速く彼をアースラに！！」

ユーノ「急いで…！！」

重傷を負った上条当麻をアースラに運ぶ一同だった。



### 第32話 ヘヴンキャンセラー

上条当麻をアースラに向けて搬送していた一同。

その頃、海鳴市では先程発生した謎の地震が収まりつつあった。その様子を眺めていた金髪の少年。

土御門「時空管理局がなんとかしたか…全く…厄介な技術を持ち込んでくれたもんだにや〜」

『高町家』

美由紀「う〜」

地震に怯えていた高町美由紀。

恭也「地震…止まったみたいだな…」

美由紀「え？…本当だ！」

『アースラ』

アースラに辿り着いた一同と、重傷を負っている上条当麻を医務室まで運ぶ医療スタッフ。

プレシア・テストアロツサはそのまま護送室まで移送された。

リンディ「私はブリッジに向かいます！クロノと真紀は彼女達を！」

クロノ「了解！」

真紀「分かりました！」

なのは「ユーノ君…上条君は大丈夫かな？」

ユーノ「それは…」

フェイト「当麻…」

アルフ「クソ…」

高町なのはとフェイト・テストロツサは至近距離で少年の怪我を見ていた為に、身体の震えを抑える事が出来なかった。

クロノ「なのはとユーノは僕に付いて来て、真紀さんは彼女達を護送室をお願いします」

真紀「チョイ待ち…護送室に連れて行く前に治療させて欲しいのよ」

クロノ「…分かりました」

アースラの空いている部屋に向けて移動していた少年少女達。時の庭園内の戦闘で、怪我を負った武装局員が非常に多く、治療する為の場所が不足していた。

ブリッジに到着したリンディ・ハラウン。

局員「庭園の崩壊が完全に停止しました！」

局員「次元震…停止します。断層発生はありません！」

リンディ「了解…（上条君は大丈夫かしら？）」

局員「第三船速で離脱…巡航航路に戻ります」

アースラの一室まで移動した一同。

比較的軽症だったフェイト・テストロツサとアルフは手早く治療を終えて、結標真紀に護送室まで連れて行かれた。

頭の怪我の治療をしていたクロノ・ハラウンと擦り傷の治療を行っていた高町なのは。

なのは「…」

現在、緊急手術を行っている上条当麻を心配する少女。

クロノ「ちくしょう…何が執務官だ…」

もし、崩落した岩が少年の右手を押しつぶす前に、気付いていたら対処は出来ていた。

しかし、クロノはその事に気付くことが出来なかった。

その事実に対して、少年は自分自身を責めていた。

エイミー「クロノ君…」

クロノの頭に包帯を巻いていたエイミー。

なのは「フェイトちゃん…」

護送室に移送されたフェイト・テストロツサを心配する高町なのは。

クロノ「…彼女はこの事件の重要参考人だからね。申し訳ないが…  
暫く彼女は隔離されるだろう」

なのは「そ…そんな…痛たた…」

クロノ「なのは！じっとして！」

なのは「うん…」

クロノ「今回の事件は一步間違えれば、次元断層さえ引き起こしかねなかった。君と彼の活躍があったとはいえ、これは重大な事件なんだ！」

クロノの頭に包帯を巻いていたエイミィが、クロノの包帯をリボン状に巻いていた。

クロノ「時空管理局としては、関係者の処遇に慎重にならざるを得ない。それは分かるね？」

なのは「うん…」

クロノ「エイミィ…やり直り！」

エイミィ「え…」

その頃、護送室に運ばれていたフェイトとアルフ。ちなみにプレシアは別の部屋に移送されていた。

真紀「何処か痛む所はない？」

フェイト「はい…」

アルフ「トウマは大丈夫なのかい？」

真紀「何とも言えないわね…」

フェイト「そう…ですか」

真紀「手術が終わったら様子でも聞きに行く？」

アルフ「そんな事が出来るのかい!？」

真紀「ちょっと待ってね…」

念話でリンディ・ハラオウンに連絡を取る結標真紀。

真紀「…って訳なんだけど」

リンディ「(そうね…それくらいなら大丈夫でしょう…彼女が今回の事件の主犯じゃないからね)」

真紀「(ありがとね)」

リンディ「(それじゃあ切るわよ?)」

真紀「(了解)」

念話を終了した真紀。

真紀「艦長さんから許可を貰ったから大丈夫よ」

フェイト「…ありがとうございます」

真紀「でも…色々制限が付きそうだけどね…」

アルフ「それは仕方ないよ…」

真紀「ごめんね…」

フェイト「いえ…」

上条当麻の緊急手術が終了して、医務室に集まるメンバー。  
医療スタッフから少年の状態について話された少年少女達。

フェイト「う…そ…」

なのは「そん…な…」

アルフ「ふざけんじゃないよ…」

ユーノ「こんなのって…」

クロノ「…」ギリ

医療スタッフが話している内容を受け入れられない一同。  
話によると、右腕の骨は粉々に粉碎されて、神経は全てが千切れて  
おり、医療スタッフの見解ではもう二度と動かす事すら出来ない  
の事だった。

更にバイタルは安定しているが、スタッフから少年が目覚める気配  
は全く無いと言われた。

リンディ「何て事…」

エイミイ「酷い……」

真紀「……」

あまりにも残酷な現実には涙を流していた高町なのはとフェイト・テスタロッサ。

なのは「どうして……上条君が……」

フェイト「あ……ああ……」

ユーノ「なのは……」

アルフ「フェイト……」

リンディ「私は……プレシア・テスタロッサから事情聴取を行いますので……真紀は彼女達をお願い」

真紀「了解……」

錯乱している少女達を一旦休憩させた結標真紀。

それからある程度の時間が経過して、医務室に居た高町なのはが上条当麻の左手を握っていた。

少年の右手を見て少女の眼に涙が溜まる。

なのは「上条君……皆無事に戻ってこれたよ……後は上条君だけなんだよ?」

涙を堪えて当麻に話し掛けるなのは。

なのは「初めて…ジュエルシードの暴走によって生まれた怪物に襲われた時も…必死に助けにくれて…何度も傷付いて…皆を助けて…」  
ポタ…

少女の瞳から零れた涙が少年の右手に触れた。

なのは「そんな上条君は私の憧れで…とても優しくくて…暖かくて…」

上条当麻の左手から伝わる暖かさを実感する高町なのは。

なのは「私は…上条君が…ううん…当麻君が…」

その頃、護送室でプレシア・テストロッサに上条当麻の容態について説明していた。

プレシア「そう…」

リンディ「ええ…もう彼の右手は…二度と動かないのよ…」

プレシア「私は…ゴホ…ゲホ…！」

リンディ「貴女!？」

咳を手で押さえていたプレシア・テストロッサ。  
彼女の手には大量の血液が付着していた。

プレシア「全く…取り返しの付かない過ちを犯して…フェイトには何一つ母親らしい事を出来なくて…」



リンディ「それは…」

プレシア「私は…不治の病を患っていたのよ…」

リンディ「不治の病…」

プレシア「本当に愚かよね…フェイトと彼をあれだけ『不幸』にしておきながら…」

リンディ「…」

プレシア・テストロッサとリンディ・ハラオウンの会話を護送室の外で偶然聞いていた結標真紀。

真紀「…」

無言でその場から立ち去って行った少女。

それから一時間が経過して、フェイトとアルフと真紀は医務室を訪れていた。

アルフ「アンタがこんなんじゃないよ！誰も喜ばないよ！だから目を覚ましておくれよ！お願いだよ…トウマア…」

涙を流しながら訴えるアルフ。

少年の左手を握るフェイト・テストロッサ。

フェイト「当麻はあの時…フェイトは一人しか居ないって…怒ってくれたよね…誰の代わりでもないって…」

少女の手が微かに震えていた。

フェイト「嬉しかった…真つ向から私が『アリシア』の代わりじゃないって…否定してくれて…私を『フェイト』として見てくれて…」

真紀「…」

フェイト「当麻…当麻が居たから…私は…お母さんと分かり合えたんだよ？当麻と一緒に居た日は…私にとって『幸せ』だったんだよ？」

アルフ「…フェイトに約束したんだ…トウマと一緒に帰って来るって…まだ…アタシはフェイトに交わした約束を果たせていないんだよ？」

フェイト「お願い…当麻…目を覚まして？当麻がいないと…何も始められないから…」

フェイト・テストロッサとアルフを残して、医務室を出て行く結標真紀。

そのまま彼女は、リンディ・ハラオウンが居るブリッジへ向かって行った。

ウィーン！

ブリッジに到着した少女。

真紀「艦長…話が…」

リンディ「分かったわ…エイミィ…お願いね？」

エイミー「了解しました」

ブリッジから出て行くリンディと真紀。

そして、リンディ・ハラオウンの自室に入って行った二人。

リンディ「それで…話って？」

真紀「プレシア・テストロツサと上条君なんだけど…」

リンディ「二人がどうかしたのかしら？」

真紀「もし…あの二人を助ける手段があるかもしれないと言ったら？」

リンディ「何ですって!？」

真紀の言っている言葉が信じられないリンディ。

真紀「学園都市のとある病院にね…どんな病気や怪我也治すと言われている冥土返し（ヘヴンキャンセラー）って呼ばれている医者があるの」

リンディ「冥土返し（ヘヴンキャンセラー）…」

真紀「私も一度だけ世話になった事があるけど、恐らくこの世界で彼より優れた医者は存在しないわ」

リンディ「でも…学園都市は…」

真紀「外部から協力を仰いでも突っぱねられるのがオチでしょうね……」

リンディ「無理じゃない……」

真紀「学園都市は信用出来ないけど……あの人なら信用できる」

リンディ「まさか……」

真紀「私が直接、学園都市の乗り込んで彼を連れて来るわ」

リンディ「それは……」

真紀「大丈夫……私は暗部の連中に目を付けられているけど、そう簡単にやられないわ」

リンディ「……」

真紀「それにアースラは居心地が良いしね」

リンディ「はあ……分かりました……許可します……」

真紀「さっすがリンディさん！話が分かる！」

リンディ「でも……必ず戻ってきてね？」

真紀「りょくかい」

手を振りながら部屋を出て行く真紀。

その様子を不安そうに見ていたリンディ。

リンディ「さて…それじゃあ行きますか!！」

ゲートに向かう真紀。

そして、海鳴市に到着した少女。

真紀「飛ばしていくわよ!」『フェンリル』!」

『Set up.』

バリアジャケットに着替えた少女は、そのまま学園都市に向けて凄まじい速度で移動を開始した。

学園都市に移動を初めてから二時間後、学園都市の外周部に到着した少女。

真紀「(きつと…暗部じゃない連中とも戦う事になるでしょうね…)」

覚悟を消えて能力を使用した少女。

ヒュン!!

繰り返し能力を用いて、目的地である第七学区へ向かう。

そこで彼女はある違和感に気付く。

真紀「(おかしい…監視カメラの穴を狙って移動しているけど…静か過ぎる…)」

いくら能力を使っているとはいえ、学園都市が全く侵入に気付かないということはおかし過ぎる。

真紀「（まあ今は…あの人に会わなきゃ…）」

頭の中に湧いた疑問を一旦置いておいて、第七学区の病院まで向かう真紀。

そしてとある病院の前の辿り着いた少女は、そのまま病院内を走り回った。

真紀「（あの顔は…）」

彼女が捜し求める人物は、少しばかり変わった顔つきをしている為、少女はその人物が自身の捜し求めている人物であると確認する。

真紀「先生！！」

????「おや？君は…結標さんかい？」

真紀「話があります！」

????「？」

『アースラ』

結標真紀がアースラから居なくなつて三時間後…

クロノ「真紀さんは一体何処に？」

無断でアースラを抜け出した真紀を探していたクロノ。

リンディ「彼女に頼んでいた任務があるのよ」

クロノ「その任務は…」

リンディ「ヒ・ミ・ツ」

クロノ「はあ…」

そして、ブリッジのモニターに真紀と初老の男性が映し出される。

真紀「連れてきたわよ！」

リンディ「来たわね…転送用の魔法陣の準備を！」

クロノ「？」

真紀「ただいま〜あ〜疲れた〜」

???「ここがアースラという場所か…随分変わってるね〜」

リンディ「突然のお願いに応じて頂いて感謝します。冥土返し（へ  
ヴンキャンセラー）さんでよろしいですね？」

冥土返し「一応そう呼ばれているんだけどね？」

クロノ「艦長…この人は一体？」

リンディ「医者よ」

クロノ「医者？」

冥土返し「患者は何処だい？」

リンディ「そうだわ…クロノ…なのはさん達を呼んできて頂戴」

クロノ「りよ…了解」

何が起きているのか理解できないまま、少年少女達をブリッジに集合させた。

なのは「あの…この人は？」

リンディ「上条君の手術を担当してもらう医者の方ですよ」

クロノ「艦長！？何を…彼はもう…」

リンディ「大丈夫よクロノ。真紀を信じましょう」

フェイト「この人が当麻を？」

アルフ「当麻は助かるのかい！？」

真紀「賭ける価値はあると思うわ」

冥土返し「そんなに期待されても困るんだけどね？」

なのは「上条君を助けてください！！！」

フェイト「お願いします！！！」

アルフ「トウマを助けてやっておくれ！！！」



冥土返しに頭を下げる三人の少女。

冥土返し「僕を誰だと思っているんだい？」

「「「え？」」」

真紀「先生…こっちは…」

上条当麻が居る医務室まで案内するリンディと真紀。

リンディ「もう一人見て頂きたい患者が居るのですが…」

冥土返し「大丈夫だよ」

ウィーン！

医務室まで到着する一同。

冥土返し「彼だね？」

真紀「お願いします」

この世界が誇る最高の医者が上条当麻の手術を開始する。  
遅れて医務室の前に到着した少女達。

クロノ「本当に何とかなるのか？」

ユーノ「それは…」

なのは「…」

フェイト「…」

アルフ「…」

不安な気持ちを抑えながら、手術の終了を待つ一同。  
そして数時間が経過して、医者が医務室から出て来た。

ユーノ「彼は…？」

ユーノ・スクライアの頭を撫でながら冥土返しが微笑んで…

冥土返し「もう大丈夫だからね？」

クロノ「信じられない…」

アースラの高度な治療技術でも治す事が出来なかった少年の怪我を、目の前の男性がたった一人で治した事実が信じられず動揺するクロノ・ハラオウン。

なのは「ありがとうございます…！」

フェイト「良かった…当麻…」

アルフ「やった…！」

涙を流して喜びを露にする少女達。

リンディ「信じられない…」

真紀「だから言ったでしょ」

冥土返しの手腕に脱帽していたリンディ・ハラオウン。

真紀「お次はプレシア・テストロッサね」

リンディ「ええ…」

上条当麻の手術が終了して三時間後、医務室で少年を見守っていたなのはとユーノとフェイトとアルフ。

ピク…！

少年の右手が動く。

フェイト「当…」

なのは「上…」

当麻「う…ん…あれ…皆…」

なのは「上条君…！」

フェイト「当麻…！」

高町なのはとフェイト・テストロッサに抱きつかれた上条当麻。

当麻「ええええ！？ちよ…何が！？痛たたたたた！！」

なのは「良かった…本当に良かった…！」

フェイト「当麻…！」

アルフ「やっと目が覚めたんだね！」

ユーノ「気が付いた？」

当麻「何があつたの？」

上条当麻が気を失つてからの一部始終を語るユーノ・スクライア。

当麻「そうだったんだ…また迷惑を掛けちゃったんだ…」

フェイト「何か私達に言わないといけない言葉は？」

当麻「え…え…っ」と…」

なのは「…お帰りなさい」

当麻「…ただいま」

上条当麻が目を覚まして、ようやくハッピーエンドを迎えた少年少女達。

なのは「（そして…色んな事が終わりました。私達が出会ってから今日まで、終わってみればなんだかあつという間の日々。次元震の余波が収まるまでの間、私達は数日…アースラの中で過ごして…それから…）」

アースラの作戦司令室に居た高町なのはとユーノ・スクライア。

リンディ「今回の事件解決について大きな功績があったものとして、ここに略式ではありますが、その功績を讃え表彰いたします」

なのは「う…」

緊張を隠せない少女と少年。

リンディ「高町なのはさん…ユーノ・スクライア君…ありがとう」

パチパチパチ！！

局員から惜しみない拍手が送られる。

表彰を終えて、アースラ内の廊下を歩いていた高町なのはとユーノ・スクライアとクロノ・ハラオウン。

なのは「クロノ君…フェイトちゃんと上条君はこれからどうなるの？」

クロノ「事情があつたとはいえ、彼女達が次元干渉犯罪の一端を担っていたのは紛れも無い事実だ…」

なのは「…」

クロノ「重罪だからね…数百年以上の幽閉が普通なんだが…」

なのは「そんな…！」

クロノ「なんだけど…」

なのは「え…？」

クロノ「状況が特殊だし、彼女達が自らの意思で次元犯罪に加担していなかったこともはつきりしている。…後は、偉い人たちにその事実をどう理解させるかなんだけど…その辺にはちよつと自信がある。心配しなくていいよ」

なのは「クロノ君…」

クロノ「何も知らされず…ただ母親の願いを叶える為に…一生懸命だった子や…その子を守る為に戦い続けた彼を罪に問うほど…時空管理局は冷徹な集団じゃないから…」

なのは「クロノ君で…もしかして凄く優しい？」

クロノ「な!？」

予想していなかった言葉に、一瞬で顔が真っ赤になるクロノ。

なのは「あはは!」

ユーノ「あはは…」

クロノ「し…執務官として当然の発言だ!私情は別に入ってない!」

なのは「にゃはは…別に照れなくていいのに」

クロノ「て…照れてない!」

なのは「にやはは」

ユーノ「あははは」

クロノ「何で！？笑うなよぉ！」

クロノと一旦別れて、食堂に向かった高町なのはとユーノ・スクライア。

そこで彼女達はリンディ・ハラウンと料理を作っている上条当麻に出会った。

なのは「上条君！？何をやってるの？」

リンディ「ああ…実は上条君がね…」

当麻「時空管理局の人達には迷惑を掛けたからね。料理でも食べて貰おうかと思ってさ」

ユーノ「そうなんだ」

なのは「右腕は大丈夫なの？」

不安そうに上条当麻の右腕を見る少女。

彼の右腕はギプスに覆われていた。

当麻「大丈夫だよ。痛くないし…おっと…」

再び料理に取り掛かった上条当麻。

ユーノ「元気ですね…今回の事件で一番傷付いた筈なのに…」

リンディ「きっと強いよね」

当麻「〜」

鼻歌交じりに料理を作り進める少年。

なのは「何だか楽しそう…」

元気な少年の姿を見て思わず笑顔になる少女。

リンディ「そう言えば…」

なのは「どうしたんですか？」

リンディ「次元震の余波が完全に消滅したのよ。此処からなのはさん達の世界になら、明日には戻れると思うわよ」

なのは「良かったあ！…あ…上条君は…」

リンディ「彼には悪いけど…今回の事件の一端を担っていたから…少しばかり管理局が身柄を預かる事になるの…」

なのは「そう…ですか…」

ユーノ「なのは…」

リンディ「それとユーノ君」

ユーノ「はい？」



リンディ「ミッドチルダ方面の航路は…まだ空間が安定しないの…  
帰る為には暫く時間が掛かるみたい…」

ユーノ「そうなんですか…」

リンディ「数ヶ月か半年か…安全な航行が出来るまで…それくらいは掛かりそうね…」

ユーノ「その…まあうちの部族は遺跡を探して流浪している人ばかりですから…急いで帰る必要も無いといえは無いんですが…でもその間、ここにずっとお世話になるわけにもいかないし…」

なのは「じゃあ…うちに居ればいいよ！今まで通りに！」

ユーノ「なのは…いいの？」

なのは「うん！ユーノ君さえ良ければ！」

ユーノ「じゃあ…その…えと…お世話になります」

なのは「うん！ー！」

リンディ「ふふふ…」

そして、新しく食堂にクロノ・ハラオウンとエイミィと結標真紀が入って来た。

欠伸をしているエイミィに呆れるクロノ。

クロノ「全く…あんなに寝てるからだよ…」

エイミィ「だってずっと徹夜だったんだよ〜まだ眠い…」

真紀「そうかしら？私も徹夜だったんだけど…」

クロノ「真紀さんはタフすぎるんですよ…」

なのは「真紀さん！」

真紀「なのはちゃんじゃない」

なのは達が居るテーブルまで移動したクロノ達。

エイミィ「どうも」

クロノ「どうして料理を作ってるんですか？」

リンディに上条が料理を作っている理由を聞くクロノ。

リンディ「彼が手伝いたいって言ってたからね」

エイミィ「上条君って料理上手なんですか？」

リンディ「食べたこと無いから分からないわね」

なのは「そう言えば…」

リンディ「ユーノ君…」

ユーノ「何ですか？」

リンディ「あの人が目指していたアルハザードって場所…ユーノ君は知ってるわよね？」

ユーノ「はい…聞いたことがあります。旧暦以前…前世紀に存在していた空間で今はもう失われた秘術が幾つも眠る土地だって…」

クロノ「だけど、とっくの昔に次元断層に落ちて滅んだって言われている」

リンディ「あらゆる魔法がその究極の姿に辿り着き…その力を持つてすれば…叶わぬ望みはないとさえ言われた…アルハザードの秘術…時間と空間を遡り…過去さえ書き換えることが出来る魔法…失われた命をもう一度蘇らせる魔法…彼女はそれを求めたのね…」

なのは「…」

ユーノ「でも…魔法を学ぶものなら誰でも知っている。過去を遡ることも死者を蘇らせることも…決して出来ないって…」

クロノ「だから…その両方を望んだ彼女は…おとぎ話に等しい様な伝承にしか頼れなかった…頼らざるを得なかったんだ…」

リンディ「でも…あれだけの大魔導師が自分の生命さえ賭けて探していたのだから…彼女はもしかして…本当に見つけたのかもしれないわ…アルハザードの道を…後で本人に聞いておこうかしら？」

真紀「ねえ…アルハザードの秘術って…魔法が究極の姿に辿り着いた物を表すのよね？」

リンディ「ええ…伝承によるとそうらしいけど…」

真紀「魔法の力を容易く破壊する力も…アルハザードに関わりがあるのかしら？」

クロノ「それは…」

料理を作っていた上条当麻の姿を見たクロノ。

エイミイ「でも…なのはちゃん達の世界に魔法の力は存在しないはずじゃ…」

真紀「そうよね…気にしないで…」

ユーノ「ジュエルシードさえも破壊した力…」

真紀「（原石はアルハザードの秘術と関わりがあると思ったけど…やっぱり気のせいかな…）」

当麻「お待ちどうさま〜！」

少年少女達が座っているテーブルに料理を運ぶ上条当麻。

リンディ「ありがとう」

当麻「は…はい」

真紀「美味しそうじゃない」

クロノ「ああ…」

エイミィ「お腹空いた〜」

なのは「凄い…」

ユート「意外だね…」

少年の料理を食べ進める一同。

なのは「美味しい…」

ユート「うん…」

真紀「いいわね…」

リンディ「こんな息子が欲しいわ〜」

クロノ「確かに美味しい…」

エイミィ「おかわり〜」

当麻「良かった〜」

クロノ「なのはには多分、アースラでも最後の食事になるだろうし…」

エイミィ「うん？お別れが寂しいなら素直にそう言えばいいのになあ〜…クロノ君では照れ屋さん」

顔が真っ赤になるクロノ・ハラオウン。

クロノ「な…何を?」

エイミィ「なのはちゃん、ここにはいつでも遊びに来ていいんだからね」

なのは「はい!ありがとうございます!」

クロノ「エイミィ!アースラは遊び場じゃないんだぞ!」

リンディ「まあまあいいじゃない」

クロノ「え!」

リンディ「どうせ巡航任務中は暇を持て余してるんだし」

クロノ「か…艦長まで!」

なのは「えへへ」

当麻「それじゃあ僕はこの辺で」

なのは「何処に行くの?」

当麻「フェイトとアルフの所に」

先程作った料理を片手に食堂を出て行く上条当麻。

真紀「優しいわね」

なのは「フェイトちゃん…」

翌日、転送用の魔法陣の前に居た高町なのはとユーノ・スクライア。本日は、彼女達が元の世界に帰る日だった。

少年と少女を見送りに来ていたのは、上条当麻とクロノ・ハラオウンとリンディ・ハラオウンとエイミィと結標真紀の五名だった。

リンディ「それじゃあ…今回は本当にありがとうございます…」

クロノ「協力に感謝する」

握手を求めるクロノに応じるなのは。顔が赤くなるクロノ。

真紀「元気でね」

なのは「はい…ありがとうございます」

クロノ「フェイトと彼の処遇は決まり次第連絡する。大丈夫さ、決して悪いようにはしない」

なのは「うん。ありがとう」

リンディ「ユーノ君も帰りたくなったら連絡してね？ゲートを使わせてあげる」

ユーノ「はい。ありがとうございます」

当麻「高町さん…」

なのは「上条君…」

当麻「色々ありがとう」

なのは「こつちこそ…」

リンディ「上条君は出来るだけ速く復学できるように努力するからね」

当麻「何から何まですみません」

リンディ「気にしないの」

当麻「それじゃあ…高町さん…またね」

なのは「う…うん…上条君…あのね…／／／」

当麻「？」

なのは「あ…あの…その…／／／」

エイミィ「じゃあ…そろそろ良いかな？」

なのは「は…はい…」

当麻「それじゃあね」

なのは「うん！またね！クロノ君！エイミィさん！リンディさん！…上条君…！」



なのはとユーノの足元にあった転送用の魔法陣が発動して、その場から消える少女と少年。

海鳴市に戻ってきた二人。

なのは「帰ろうか？ユーノ君！」

ユーノ「うん！」

久しぶりの実家に帰ってきた高町なのは。

なのは「（こうして…戻って来た私の日常。今まで通りだけど…色んな事から…今までとは少しだけ違う日常…夢中だった時の事は…過ぎ去ってしまったえば…何だか一瞬の事のように…だけど…心の中には確かに残ってる…出会った事…必死だったこと…色んな事…）」

日常に戻ってきた少女は、フェイト・テストアロッサと上条当麻を心配していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3166y/>

---

とある魔法少女と不幸な転校生

2012年1月13日15時54分発行